令和元年度 「男女間における暴力に関する調査」

報 告 書

令和２年３月

富山県

は　じ　め　に

男女間における暴力は、人権を著しく侵害するものであり、男女共同参画社会の実現を阻害する要因のひとつとなっています。

近年、この男女間における暴力が社会的にも認識され、また、平成１３年に制定された「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」（配偶者暴力防止法）が、平成１６年、１９年、２５年及び令和元年の４度にわたり改正され、相談、保護、自立支援等の体制整備が図られたことなどから、県女性相談センターなど関係機関への相談や一時保護などの救済措置の件数が増加傾向にあります。

県では、この問題への対応として、平成１８年３月に策定した「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する基本計画」を平成２１年及び平成２８年の２度にわたり改定し、暴力を許さない社会づくりの推進に向けた意識啓発や、安全な保護体制の構築、被害者の自立を支援するための取組み等を進めてまいりました。

このたび、今後さらに顕在化することが予想される男女間における暴力に関して、県民の意識及び実態等を把握し、暴力に対する有効かつ適切な対策に反映するための基礎資料を得ることを目的とした「男女間における暴力に関する調査」を実施し、とりまとめました。

この調査結果が、関係機関をはじめ県民の皆様に広く活用され、男女間における暴力への認識をさらに深めていただく一助となれば幸いです。

終わりに、この調査を実施するにあたりご協力いただきました皆様、関係機関の方々に厚くお礼申し上げます。

令和２年３月

富山県総合政策局

少子化対策・県民活躍課

報告書の見方

●比率はすべて百分率で表示し、小数第 2 位を四捨五入して算出しているため、個々の比率の合計と全体を示す数値とは一致しない場合がある。
●図表中に「無回答」とあるものは、回答が示されていないものである。
●図表中の N は各質問に対する回答者数で、比率算出の基数である。
●「前回調査」「内閣府」との比較を行っている項目は、以下の調査結果を用いている。
前回調査：「男女間における暴力に関する調査」（平成 26 年度）富山県
内 閣 府：「男女間における暴力に関する調査」（平成 29 年度）内閣府

目　次

Ⅰ　調査の概要 ……1

1．調査の目的
2．調査の概要
3．調査項目
4．回答者の概要

Ⅱ　調査結果の要約 ……5

Ⅲ　調査結果の概要 ……9

1．家庭生活等に関する意識 ……9
2．男女間の暴力に関する意識 ……15
3．夫婦やパートナーとの男女間における暴力の経験 ……23
4．子どもの被害経験、子どもの頃の家庭における被害経験 ……42
5．10 歳代から 20 歳代における交際相手との間の暴力の経験 ……47
6．男女間における暴力を防止するための対策と被害者への支援 ……57
7．自由意見 ……58

Ⅳ　調査結果の数表 ……61

Ⅴ　使用した調査票 ……121

Ⅰ　調査の概要

Ⅰ 調査の概要

１．調査の目的

この調査は、男女間の暴力、特に潜在化しがちな「夫婦、パートナー間における暴力（ドメスティック・バイオレンス)」に関する県民の意識を明らかにするとともに、家庭生活及び社会生活において暴力被害経験を持つ県民の態様を把握し、暴力に対する有効かつ適切な対応策と被害者支援のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

２．調査の概要

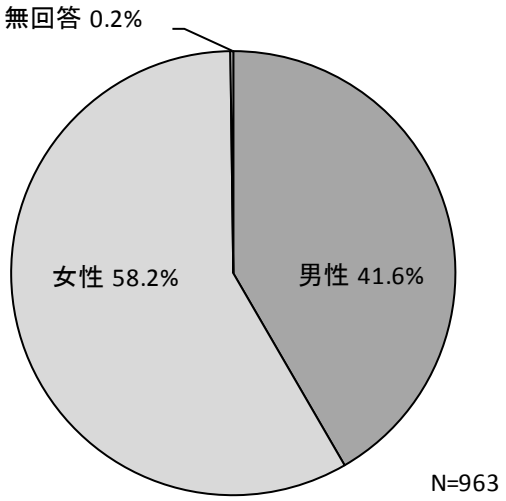
(1)調査対象　　県内在住の 20 代から 70 代の男女　2,000 人（男女各 1,000 人）
(2)抽出方法　　住民基本台帳に基づく無作為抽出
　　（市町村別、年齢区分の人口比による割当）
(3)調査期間　　令和元年 10 月 17 日～11 月 1 日
(4)調査方法　　郵送返送方式
(5)調査機関　　一般財団法人 北陸経済研究所
(6)回収状況　　標本数　2,000 人
　　回収数　963 人
　　回収率　48.2％

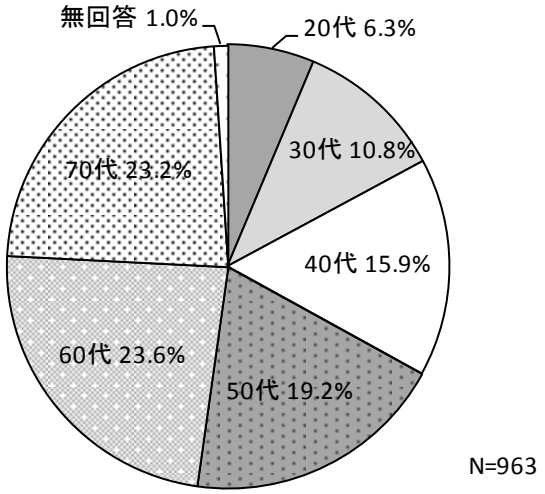
３．調査項目

(1)家庭生活等に関する意識
(2)男女間の暴力に関する意識
(3)夫婦やパートナーとの男女間における暴力の経験
(4)子どもの被害経験、子どもの頃の家庭における被害経験
(5)10 歳代から 20 歳代における交際相手との間の暴力の経験
(6)男女間における暴力を防止するための対策と被害者への支援
(7)自由意見

４．回答者の概要

【性別と年齢】

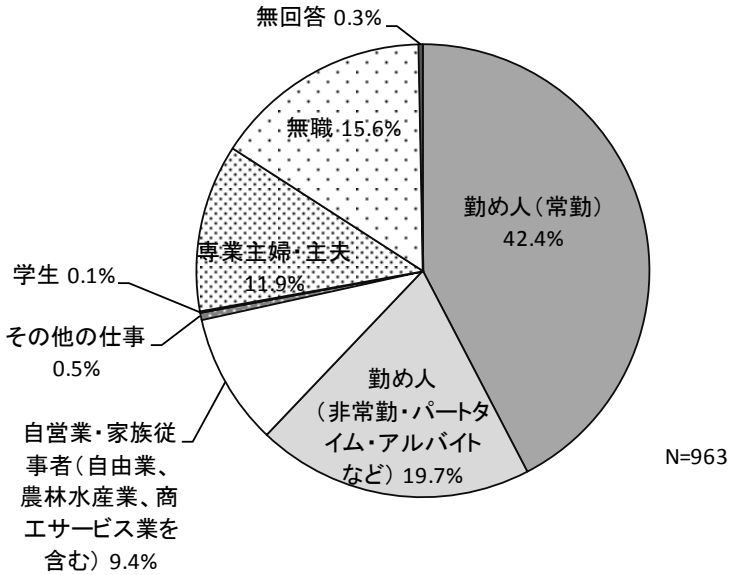




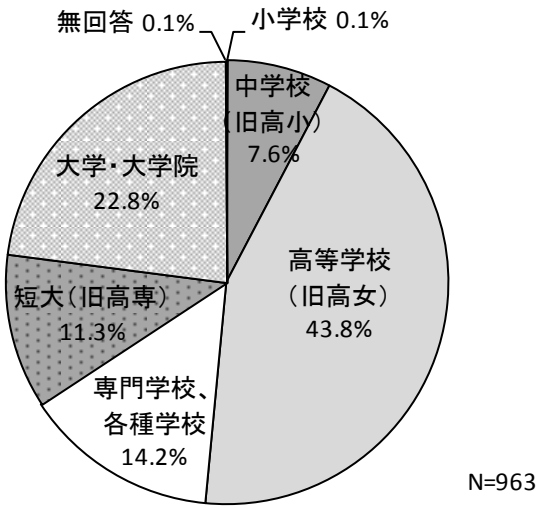
上段：人、下段：%

	合計	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
全体	963	61	104	153	185	227	223	10
	100.0	6.3	10.8	15.9	19.2	23.6	23.2	1.0
男性	401	23	35	59	77	96	107	4
	100.0	5.7	8.7	14.7	19.2	23.9	26.7	1.0
女性	560	38	69	94	108	131	116	4
	100.0	6.8	12.3	16.8	19.3	23.4	20.7	0.7
無回答	2	-	-	-	-	-	-	2
	100.0	-	-	-	-	-	-	100.0

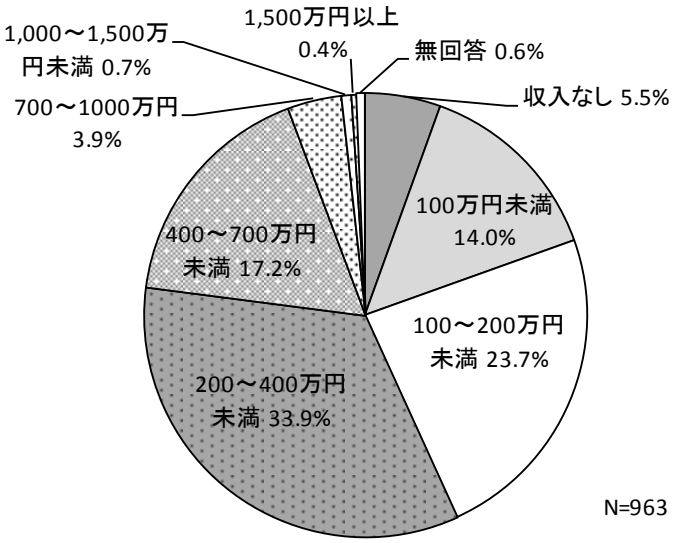
【職業】



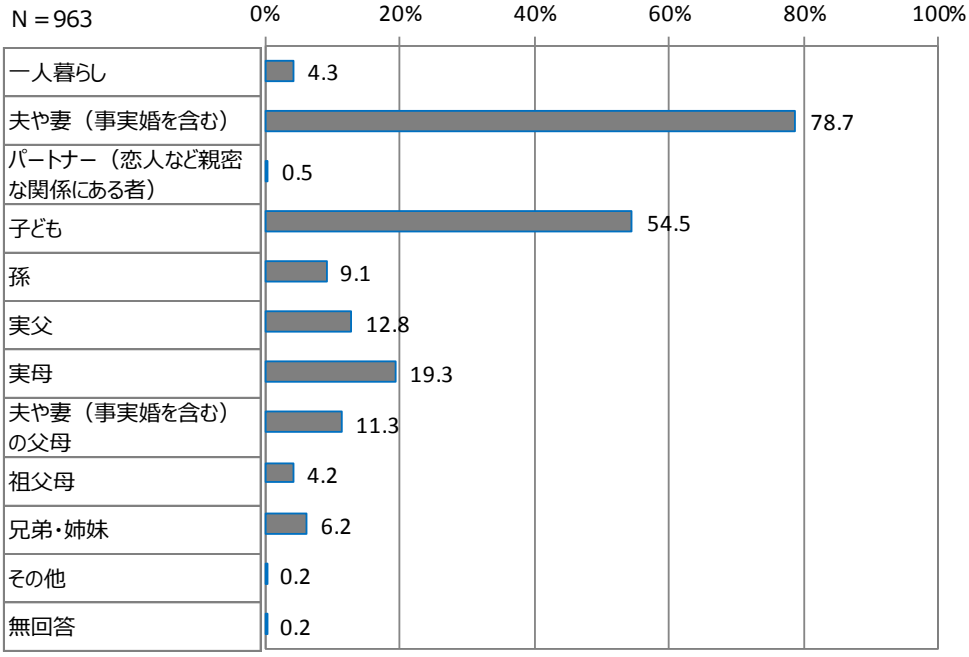
【最終学歴】



【年収】



【同居者】（複数回答）



Ⅱ．調査結果の要約

II 調査結果の要約

1．家庭生活等に関する意識 【問１】

家庭生活等に関する５つの考え方について、『そう思う』とした割合（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）が６割を超えるのは「夫婦間や家庭内のトラブルを家族以外の人に知られるのは世間体が悪い」という考え方のみである。一方、他の４つの考え方は、『そう思わない』とした割合（「そう思わない」＋「どちらかといえばそう思わない」）が６割を超え、なかでも「家庭での重要なことは夫が決め、妻はそれに従うのが望ましい」は８割を超えている。

前回調査と比べると、５つの考え方すべてについて、『そう思わない』とした割合が増えている（2.8～11.0ポイント）。

男女別では、「家庭での重要なことは夫が決め、妻はそれに従うのが望ましい」について、『そう思わない』『そう思う』のそれぞれの男女差がほとんどないが、「夫婦間や家庭内のトラブルを家族以外の人に知られるのは世間体が悪い」について、『そう思う』との回答は男性が女性を大きく上回る。

2．男女間の暴力に関する意識

(1) 夫婦間等における暴力行為に対する意識 【問2・問３】

夫婦やパートナーの間で行われた暴力行為が「どんな場合でも暴力にあたると思う」とした割合が多い行為は、「物でなぐったり、投げつけたりする」、「刃物をつきつける、なぐるふりをするなどして、おどす」、「手でぶつ、足でけるなど、身体的な暴力を加える」などの身体的な暴力行為で、その割合は９割を超えている。

前回調査と比較して、「『だれのおかげで生活できるんだ』とか、『甲斐性なし』とか言う」が、どんな場合でも暴力であるとの認識が約2割増加したほか、前回調査した項目のほぼ全ての行為について「どんな場合でも暴力にあたると思う」とする割合が増えており、暴力行為に対する認識が高まっている。

一方で、「暴力にあたる場合とそうでない場合があると思う」、「暴力にあたるとは思わない」と回答した理由としては、「夫婦（やパートナー）喧嘩の範囲だと思うから」が男女とも最も高くなっている。

(2) 夫婦間等における暴力行為の認知状況・その対応状況 【問４・問５】

「家族、親戚、友人、知人など身近な人から相談を受けたことがある」と「身近に当事者がいる」を合わせると15.4%となり、身近で暴力行為が認知されている。

身近な人が配偶者やパートナーから暴力行為を受けていることを知った際の行動は、「何もできなかった」が約３割で最も高く、次いで「加害者に暴力をやめるように話した」、「何もする必要がないと思った」、「被害者をかくまったり、家を出ることに援助をした」となっている。

(3) 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律（以下「ＤＶ防止法」という。）の認知状況 【問６】

ＤＶ防止法について、「法律があることも、その内容も知っている」が16.3%、「法律があることは知っているが、内容はよく知らない」が73.8%と、合わせてＤＶ防止法を知っている人はほぼ９割となっており、前回調査に比べて、法律があることの認知状況は5.4ポイント増加している。

(4) 配偶者等からの暴力について相談できる窓口の認知状況 【問７】

配偶者等からの暴力について相談窓口として知っている割合は、「警察相談ダイヤル（警察）」が33.7%と最も高く、次いで「富山県女性相談センター（配偶者暴力相談支援センター）」、「市町村のＤＶ相談窓口」となっている。一方、「相談できる窓口として知っているものはない」は前回調査と比較して4.3ポイント減少しているものの、36.6%と高い割合を占めている。

3．夫婦やパートナーとの男女間における暴力の経験

(1) 配偶者・パートナーへの加害経験 【問９①・問10・問11】

配偶者やパートナーがいる（いた）人のうち、配偶者やパートナーへの何らかの加害経験がある人は、全体で23.0%となっており、前回調査と比べると2.4ポイント増加した。

男女別では、男性は加害経験があるとした割合が約３割と、女性（19.6%）に比べて8.8ポイント高い。

加害経験があるとした人の加害理由は、「つい、カッとなってやってしまった」（42.3%）が最も高く、次いで「相手がそうされても仕方のないようなことをした」、「自分の言うことを聞かないので、相手の間違いを正そうとした」、「仕事や日常生活のストレスがたまっていた」となっている。

また、加害行為をしたことについて、「自分が悪かったと思い、その後は同じことをしていない」が40.8%と最も高いが、「自分が悪かったと思い、二度とやらないようにしたいという気持ちはあるが、その後も同じことをしてしまう」とした人も２割近くいる。

(2) 配偶者・パートナーからの被害経験 【問９②・問12～問20】

配偶者やパートナーがいる（いた）人のうち、配偶者やパートナーからの何らかの被害経験があるとした割合は25.6%となり、前回調査と比べて2.9ポイント増加した。

男女別では、女性は被害経験があるとした割合が３割と、男性（18.8%）に比べて11.2ポイント高い。

被害経験があるとした人の生活上の変化は、「夜、眠れなくなった」、「自分に自信がなくなった」とする人がそれぞれ２割を超えるが、３割超の人が「特にない」と回答している。

被害経験があるとした人のうち、「ケガをして医師の治療をうけた」、「精神の不調により、医師の治療をうけた」、「ケガをしたが、医師の治療はうけなかった」、「精神の不調になったが、医師の治療はうけなかった」を合わせた29.7%の人が受診の有無にかかわらず、ケガや精神の不調になったとしている。

また、被害経験があるとした人の相談先としては「家族や親戚に相談した」や、「友人・知人に相談した」が約25%と割合としては高いが、半数弱の人は「どこ（だれ）にも相談しなかった」としている。

「どこ（だれ）にも相談しなかった」とした人の相談しなかった理由は、「自分にも悪いところがあると思ったから」が41.0%と最も高く、次いで「相談するほどのことではないと思ったから」、「相談してもむだだと思ったから」となっている。

被害経験があるとした人が、暴力行為を受けたときどうしたかをみると、「相手と別れた」とした人はわずか8.3%であり、「別れたいと思ったが、別れられなかった」（36.7%）と「別れたいとは思わなかった」（45.0%）を合わせた約８割の人が別れなかったとしている。

「別れたいと思ったが、別れられなかった」、「別れたいとは思わなかった」とした人の、別れなかった理由をみると、「子どもがいる（妊娠した）から、子どものことを考えたから」と「別れるほどの問題ではないと思ったから」が４割を超え、次いで「経済的な不安があったから」が約３割となっている。

また、この3年間での配偶者やパートナーからの暴力について、「今はおさまっており、もうくりかえされないと思う」

が34.3%と最も高い。しかし、「変わらない」、「どちらかといえばよくなってきているが、今も続いている」、「今も続いており、どちらかといえばひどくなってきている」を合わせた15.2%が、継続して被害を受けているとしている。また、「今はおさまっているが、またあるかもしれない」と不安を感じている人も25.3%みられる。

配偶者やパートナーから暴力行為を受けていることを子どもが「見たことがある」、「見たことはないが、音や声、様子から知っている（知っていた）」を合わせると４割を超える人が認知しているとなっている。

４．子どもの被害経験、子どもの頃の家庭における被害経験 【問21～23】

配偶者やパートナーからの被害経験があって子どものいる方について、子どもの被害経験は、「心理的虐待」が16.6%、「身体的虐待」が12.0%、「ネグレクト」が0.6%となっている。

子どもの前での暴力等が児童虐待にあたることを「知らない」は51.6%と、「知っている」を5.3ポイント上回っている。

18歳になるまでの頃の家庭における被害経験についてみると、『あてはまるとした割合』（「あてはまる」+「どちらかといえばあてはまる」）が高いのは、「両親がお互いをののしりあったり、口げんかをしていた」で25.7%、次いで「家族だんらんが少なかった」となっている。

５．10歳代から20歳代における交際相手との間の暴力の経験

(1) 交際相手からの暴力（デートＤＶ）の認知状況 【問24】

「交際相手からの暴力」（デートＤＶ）については、「言葉も、その内容も知っている」が32.2%、「言葉があることは知っているが、内容はよく知らない」が33.3%となり、合わせて65.5%が言葉については知っているとしている。知っている割合は、前回調査と比べると6.3ポイント増加した。

(2) 交際相手への加害経験 【問26①】

「交際相手がいた（いる）」とした人のうち、交際相手への加害経験があるとした割合は5.9%と前回調査と比べると0.8ポイント減少している。

(3) 交際相手からの被害経験 【問26②・問27～問30】

「交際相手がいた（いる）」とした人のうち、交際相手からの被害経験があるとした割合は14.4%と前回調査と比べると5.4ポイント高くなっている。内閣府が行った全国調査と比べると2.3ポイント下回っている。

女性は被害経験があるとした割合が17.0%と、男性（9.9%）を7.1ポイント上回っている。

被害経験があるとした人が、その暴力行為を受けたときどうしたかをみると、「相手と別れた」が41.0%で最も高く、「別れたいと思ったが、別れられなかった」が20.5%、「別れたいとは思わなかった」が31.3%となっている。

「別れたいと思ったが、別れられなかった」「別れたいとは思わなかった」とした人が、別れなかった理由についてみると、「相手が変わってくれるかもしれないと思ったから」が39.5%と最も高く、次いで「相手が反省し、これ以上は繰り返されないと思ったから」、「別れるとさみしいと思ったから」、「別れるほどの問題ではないと思ったから」が３割超えている。

また、被害経験があるとした人のうち、「ケガをして医師の治療をうけた」、「ケガをしたが、医師の治療はうけなかった」、「精神の不調により、医師の治療をうけた」、「精神の不調になったが、医師の治療はうけなかった」を合わせた27.7%の人が、ケガや精神の不調になったとしている。

被害経験があるとした人の生活上の変化は、「自分に自信がなくなった」が２割を超え、「夜、眠れなくなった」が２割弱となっているが、「特にない」とする人が４割を超えている。

６．男女間における暴力を防止するための対策と被害者への支援 【問31】

男女間における暴力の防止策や被害者支援策に必要だと考えることについてみると、「相談しやすい環境を整備する（同性の相談員の配置など）」が56.7%と最も高く、次いで、「家庭や学校等で、暴力を防止するための教育を行う」、「加害者への罰則を強化する」、「被害者の体や心のケアを行う体制を整備する」、「被害者が一時的に避難するための施設を整備する」、「警察・役所・民間団体等と連携し、自立まで切れ目のない支援体制を整備する」の順になっている。

７．自由意見 【問32】

「ＤＶ防止や被害者支援等」、「ＤＶや社会に関する意識や環境等」などについて、118件の意見が寄せられた。

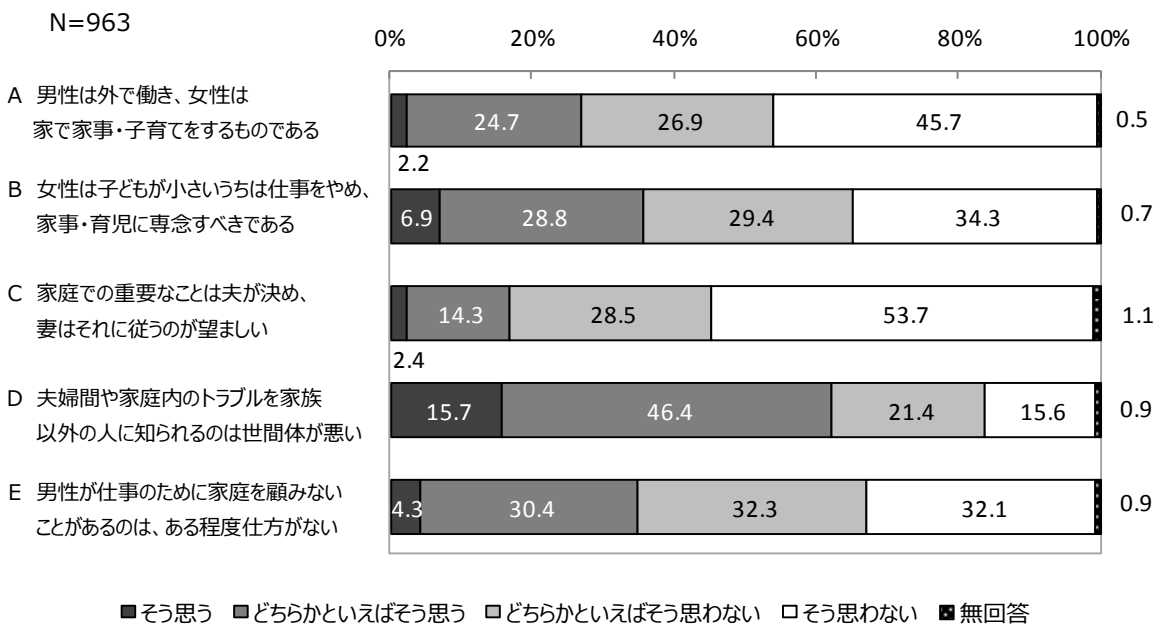
Ⅲ．調査結果の概要

１．家庭生活等に関する意識

問１　あなたは、次のような考え方について、どう思いますか。
　　ＡからＥのそれぞれについて、あなたの考えに近い番号に○をつけてください。

家庭生活等に関する５つの考え方について、全体でみると、『そう思う』とした割合（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）が半数を超えて高いのは、「Ｄ　夫婦間や家庭内のトラブルを家族以外の人に知られるのは世間体が悪い」のみで 62.1%となっている。（以下では、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせて『そう思う』、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせて『そう思わない』とする。）

一方、『そう思わない』とした割合が最も高いのは、「Ｃ　家庭での重要なことは夫が決め、妻はそれに従うのが望ましい」で 82.2%と８割を超え、次いで「Ａ　男性は外で働き、女性は家で家事・子育てをするものである」で 72.6%、「Ｅ　男性が仕事のために家庭を顧みないことがあるのは、ある程度仕方がない」で 64.4%、「Ｂ　女性は子どもが小さいうちは仕事をやめ、家事・育児に専念すべきである」で 63.7%となっている。



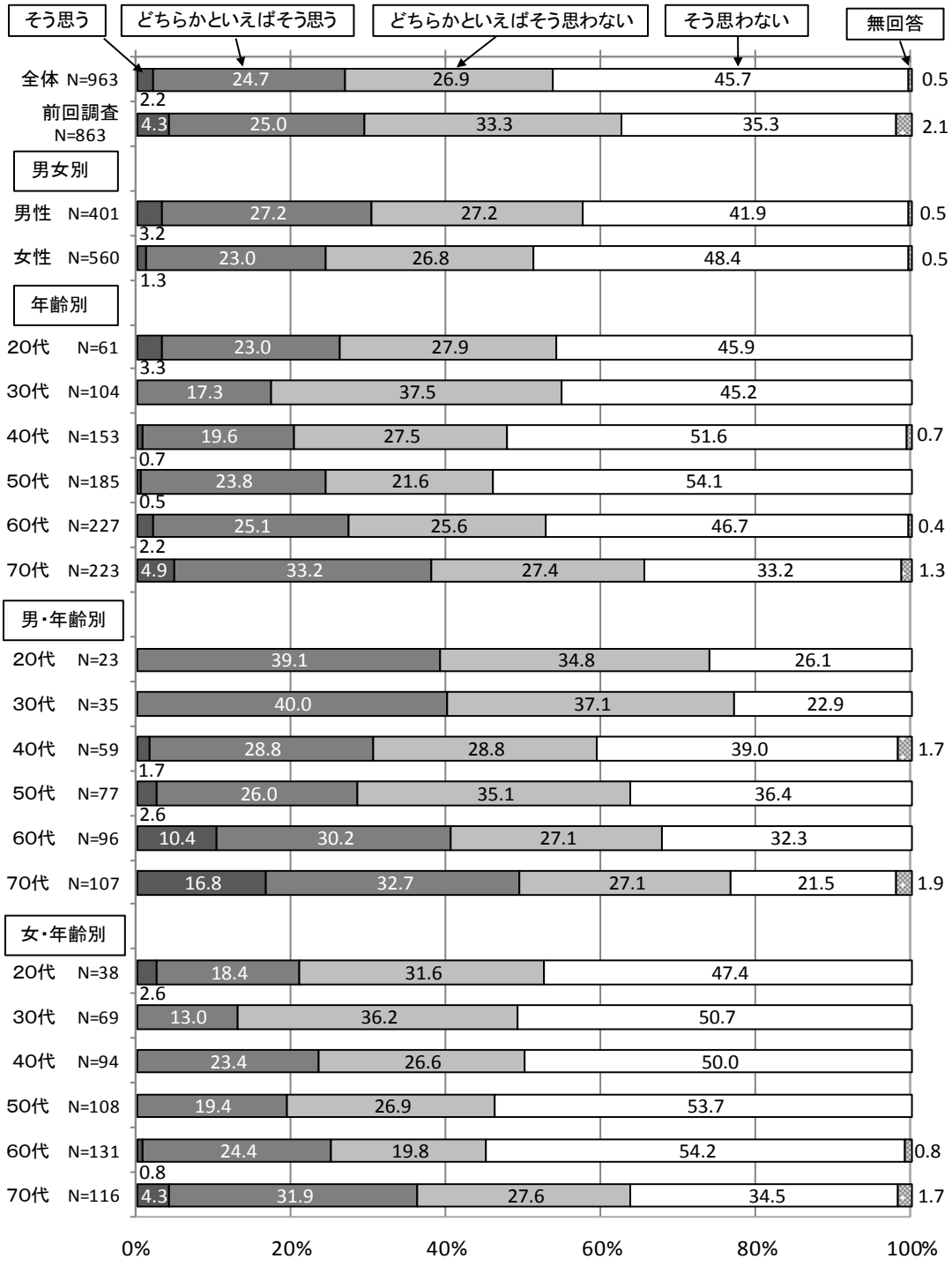
(1)「Ａ男性は外で働き、女性は家で家事・子育てをするものである」という考え方について

『そう思う』とした割合は26.9%（「そう思う2.2%」＋「どちらかといえばそう思う24.7%」）、『そう思わない』とした割合が72.6%（「そう思わない45.7%」＋「どちらかといえばそう思わない26.9%」）となり、『そう思わない』とした割合が45.7ポイント高い。

前回調査と比べると、『そう思う』とした割合は2.4ポイントの減少、『そう思わない』とした割合は4.0ポイントの増加となっている。

男女別でみると、女性は『そう思わない』とした割合が75.2%で、男性に比べ6.1ポイント高い。

性・年齢別でみると、女性の「30代」「50代」は『そう思わない』とした割合が８割を超えている。男性の「70代」は『そう思う』とした割合がほぼ５割となっている。



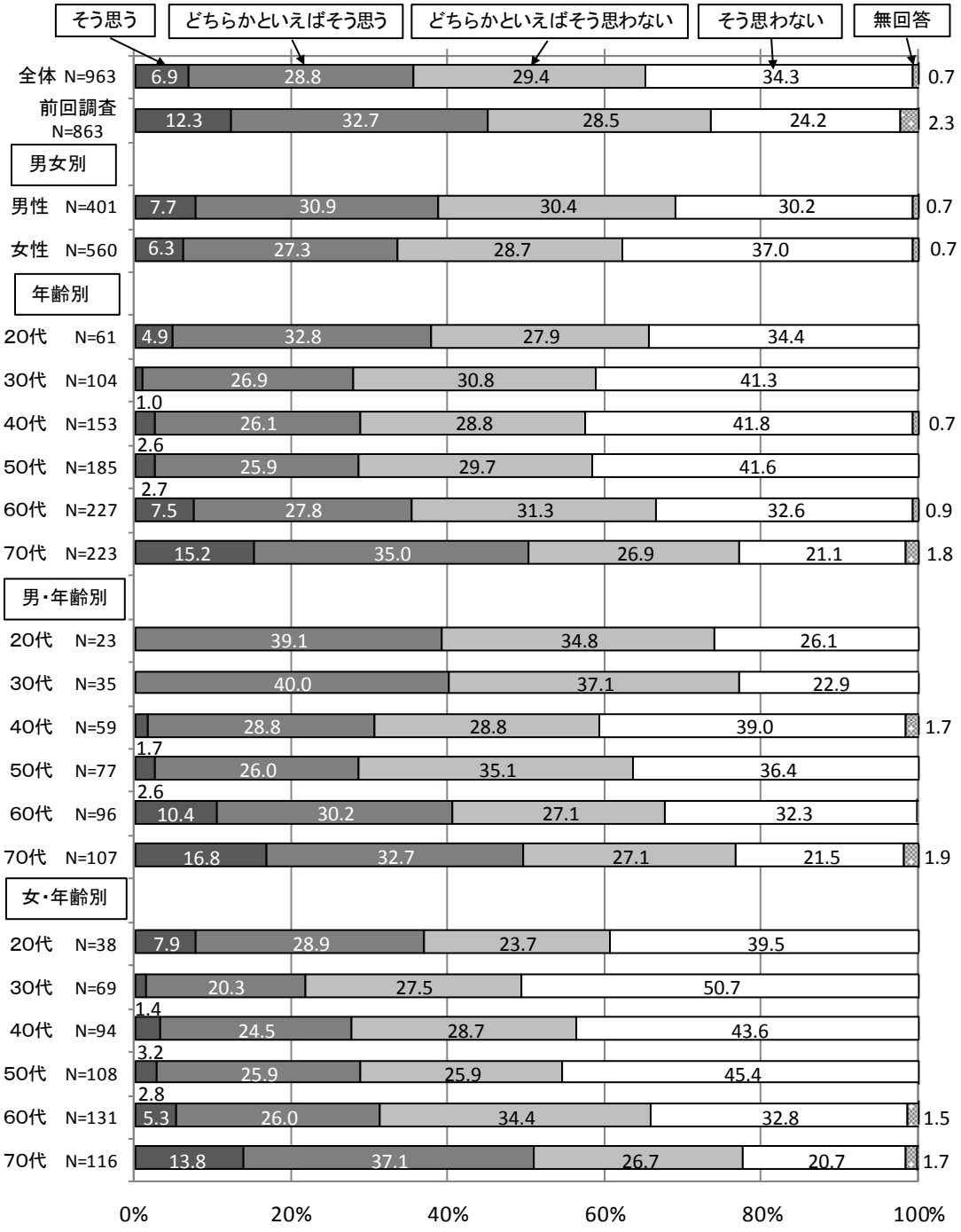
(2)「Ｂ女性は子どもが小さいうちは仕事をやめ、家事・育児に専念すべきである」という考え方について

『そう思う』とした割合は35.7%（「そう思う6.9%」＋「どちらかといえばそう思う28.8%」）、『そう思わない』とした割合が63.7%（「そう思わない34.3%」＋「どちらかといえばそう思わない29.4%」）となり、『そう思わない』とした割合が28.0ポイント高い。

前回調査と比べると、『そう思う』とした割合は9.3ポイントの減少、『そう思わない』とした割合は11.0ポイントの増加となっている。

男女別では、女性は『そう思わない』とした割合が65.7%で、男性に比べ5.1ポイント高い。

性・年齢別では、女性の「30代」「40代」「50代」と男性の「50代」が『そう思わない』とした割合が７割を超えている。



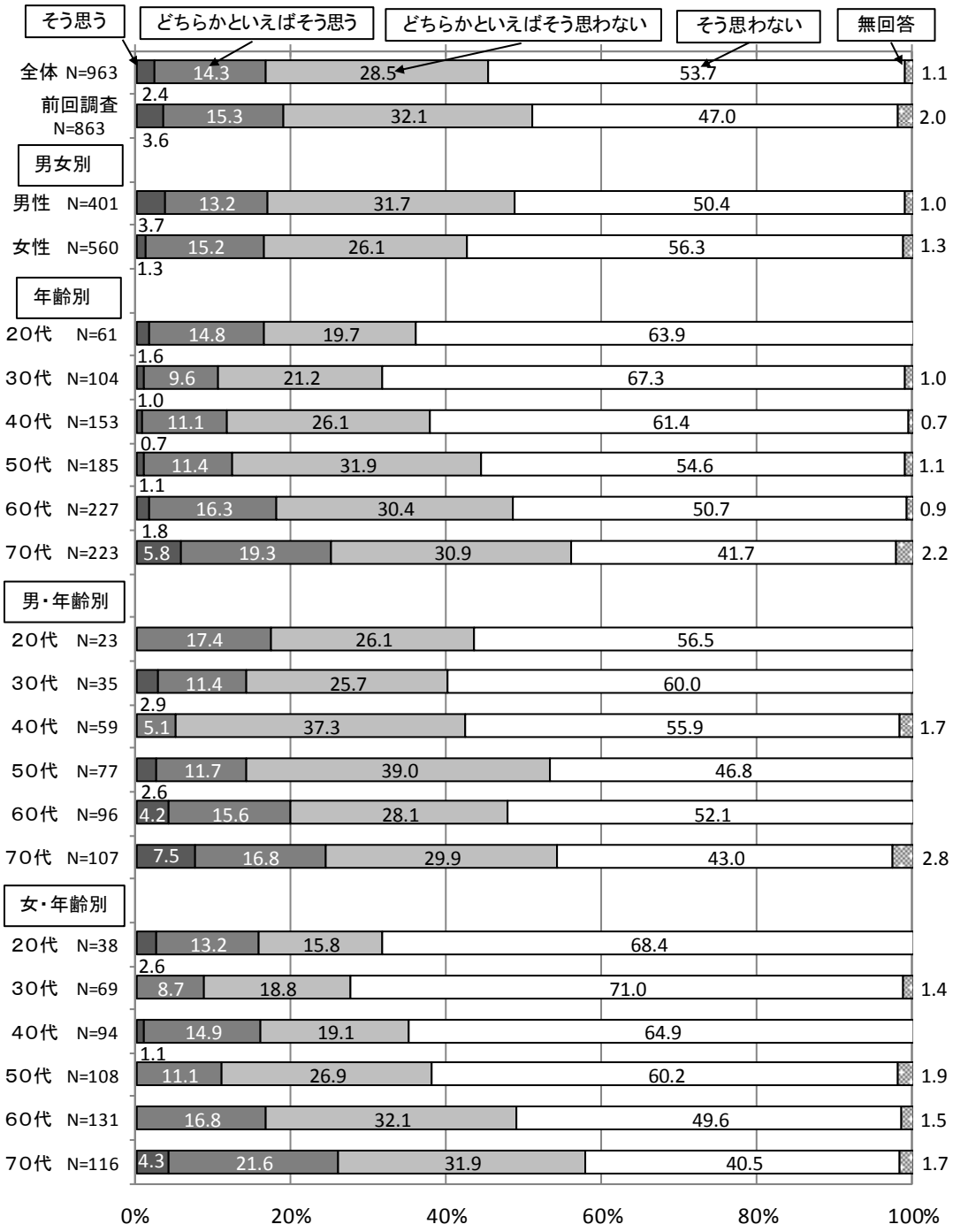
(3)「Ｃ家庭での重要なことは夫が決め、妻はそれに従うのが望ましい」という考え方について

『そう思う』とした割合は16.7%（「そう思う2.4%」＋「どちらかといえばそう思う14.3%」）、『そう思わない』とした割合が82.2%（「そう思わない53.7%」＋「どちらかといえばそう思わない28.5%」）となり、『そう思わない』とした割合が65.5ポイント高い。

前回調査と比べると、『そう思う』とした割合は2.2ポイントの減少、『そう思わない』とした割合は3.1ポイントの増加となっている。

男女別では、女性は『そう思わない』とした割合が82.4%で、男性に比べ0.3ポイント高いが、差は小さい。

性・年齢別では、男性の「40代」が『そう思わない』とした割合が93.2%と９割を超えている。



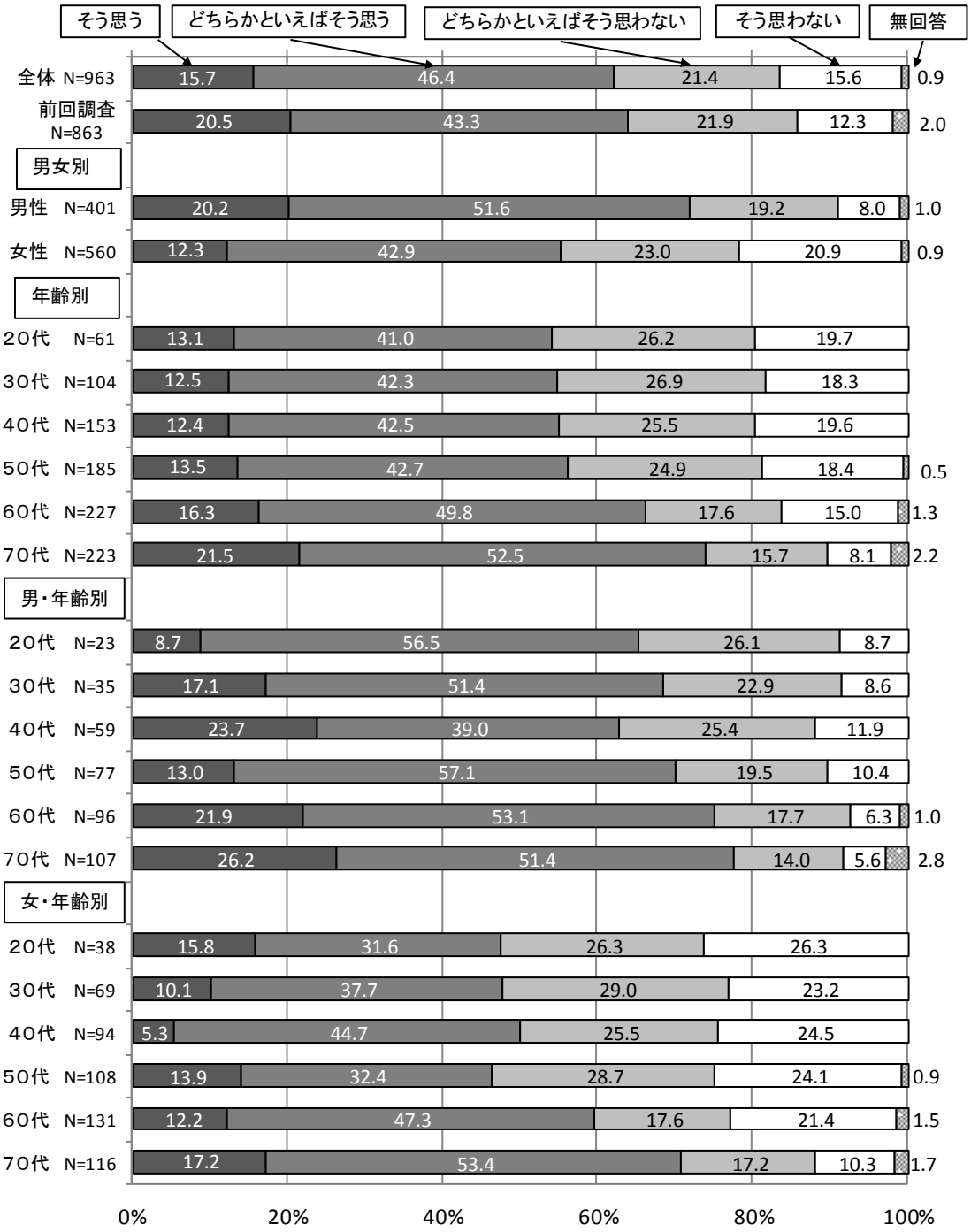
(4)「Ｄ夫婦間や家庭内のトラブルを家族以外の人に知られるのは世間体が悪い」という考え方について

『そう思う』とした割合は62.1%（「そう思う15.7%」＋「どちらかといえばそう思う46.4%」）、『そう思わない』とした割合が37.0%（「そう思わない15.6%」＋「どちらかといえばそう思わない21.4%」）となり、『そう思う』とした割合が25.1ポイント高い。

前回調査と比べると、『そう思う』とした割合は1.7ポイントの減少、『そう思わない』とした割合は2.8ポイントの増加となっている。

男女別では、男性は『そう思う』とした割合が71.8%で、女性に比べ16.6ポイント高い。

年齢別では、男女とも『そう思う』とした割合は「70代」が最も高く、次いで「60代」が高くなっている。



(5)「Ｅ男性が仕事のために家庭を顧みないことがあるのは、ある程度仕方がない」という考え方について

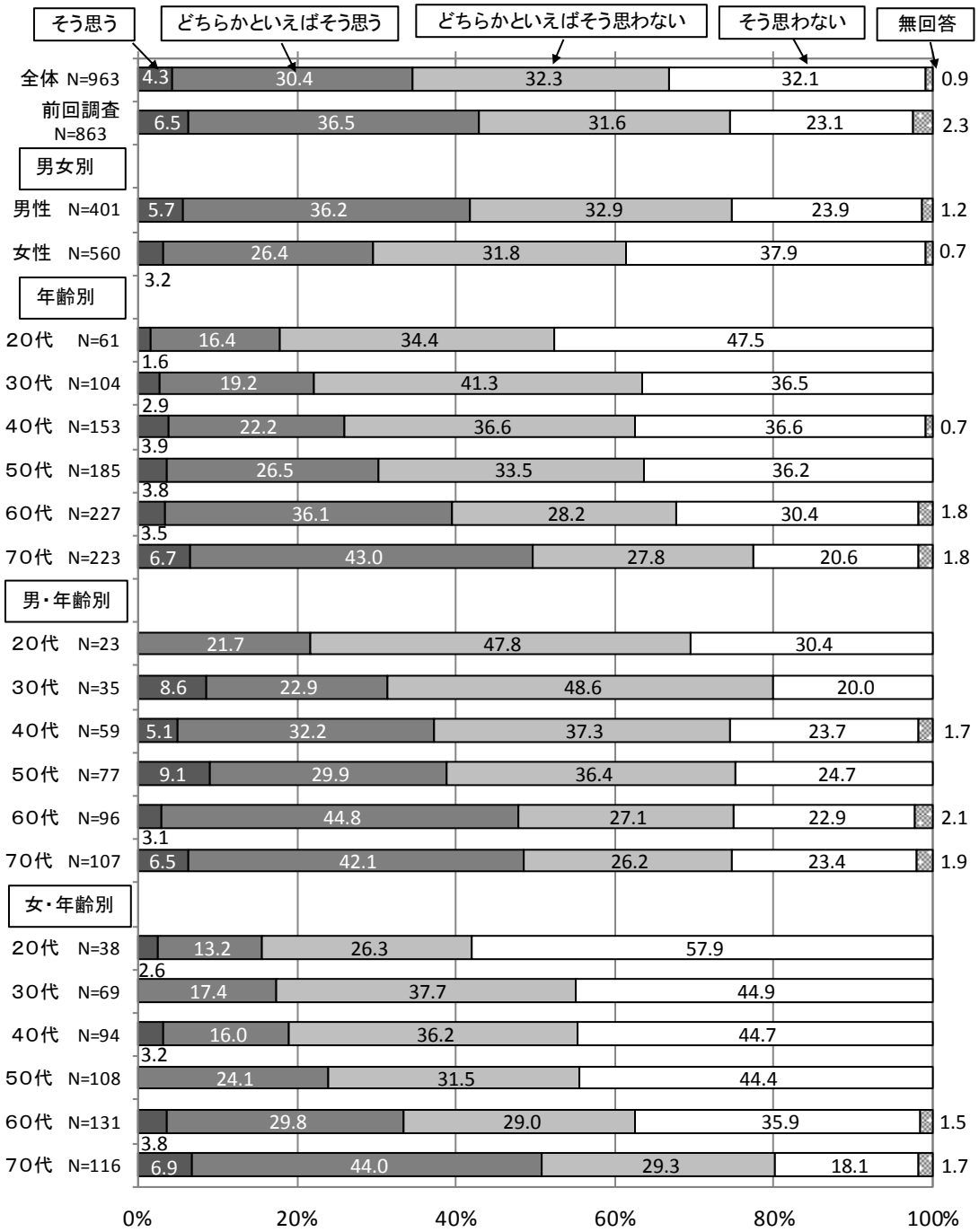
『そう思う』とした割合は34.7%（「そう思う4.3%」＋「どちらかといえばそう思う30.4%」）、『そう思わない』とした割合が64.4%（「そう思わない32.1%」＋「どちらかといえばそう思わない32.3%」）となり、『そう思わない』とした割合が29.7ポイント高い。

前回調査と比べると、『そう思う』とした割合は8.3ポイントの減少、『そう思わない』とした割合は9.7ポイントの増加となっている。

男女別では、女性は『そう思わない』とした割合が69.7%で、男性に比べ12.9ポイント高い。

年齢別では、男女とも『そう思わない』とした割合は「20代」が最も高く、年代が高くなるにつれて『そう思わない』とした割合は低くなっている。

性・年齢別では、「そう思わない」とした割合は、女性の20代から50代にかけて同世代の男性に比べ約20ポイント以上高くなっている。



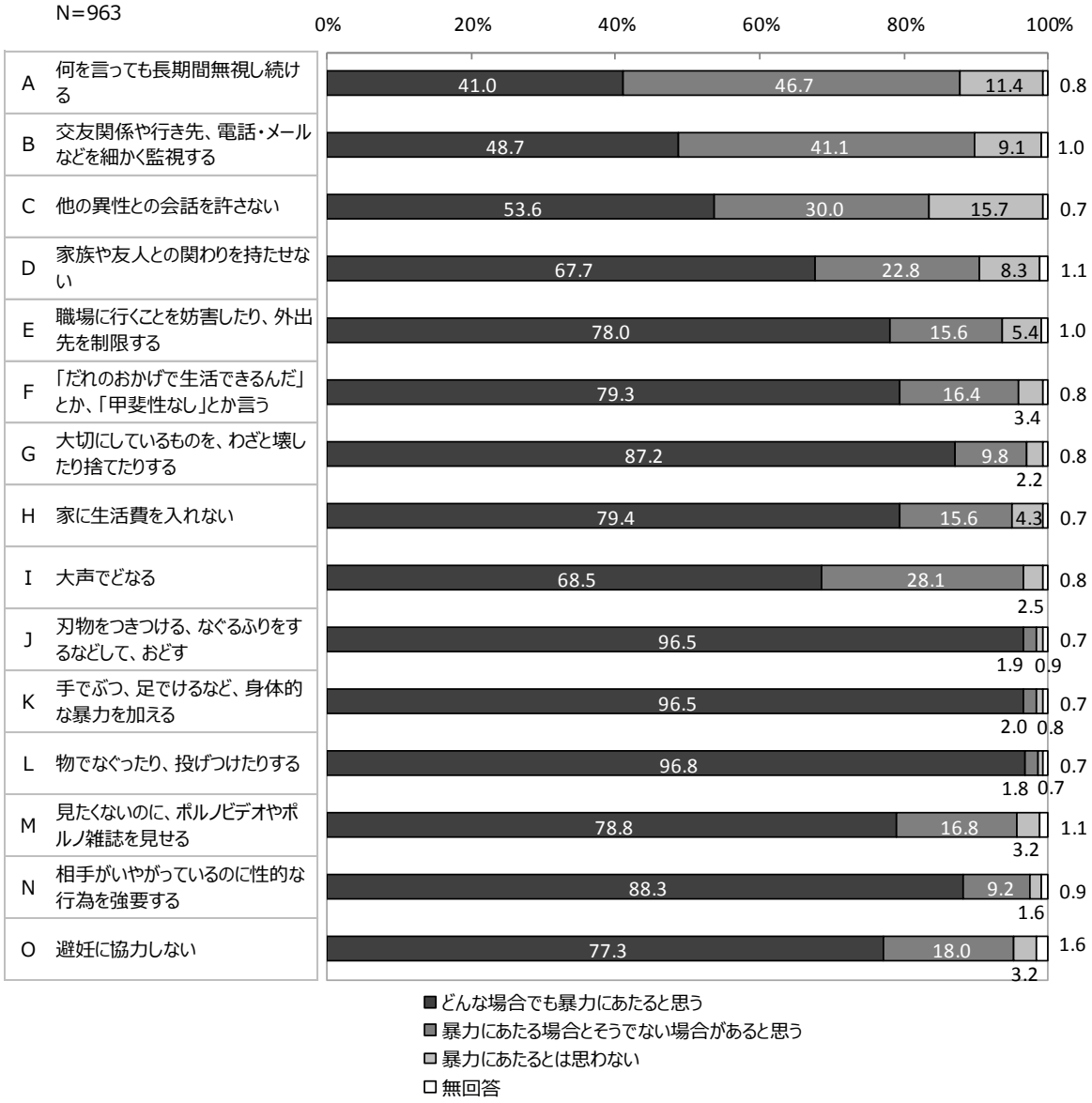
２．男女間の暴力に関する意識

<1>夫婦間等における暴力行為に対する意識

問２　あなたは、次のようなことが夫婦やパートナーの間で行われた場合、それを暴力だと思いますか。
　Ａから Ｏのそれぞれについて、あなたの考えに近い番号に〇をつけてください。

Ａから Ｏの15の行為について、「どんな場合でも暴力にあたると思う」と考える人が多いのは、「Ｌ　物でなぐったり、投げつけたりする」（96.8％）、「Ｊ　刃物をつきつける、なぐるふりをするなどして、おどす」（96.5%）、「Ｋ　手でぶつ、足でけるなど、身体的な暴力を加える」（96.5%）などの身体的な暴力行為で、夫婦間等であっても暴力にあたるとする割合が９割を超えている。次いで、「Ｎ　相手がいやがっているのに性的な行為を強要する」（88.3%）、「Ｇ　大切にしているものを、わざと壊したり捨てたりする」（87.2%）が８割を超えている。

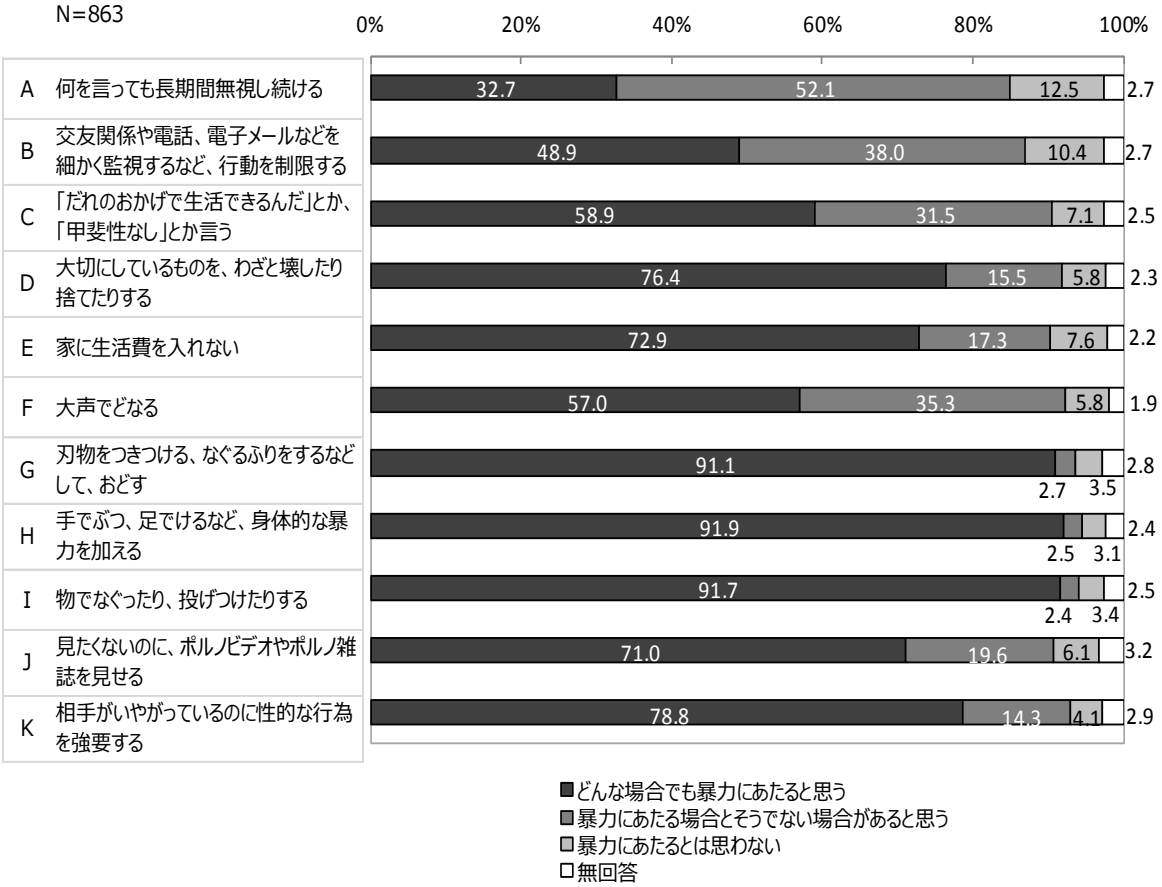
一方、「暴力にあたるとは思わない」と考える人が比較的多いのは、「Ｃ　他の異性との会話を許さない」（15.7%）、「Ａ　何を言っても長期間無視し続ける」（11.4%）だが、どちらも２割に満たない。



前回調査では、「どんな場合でも暴力にあたると思う」と考える人が多いのは、「Ｈ　手でぶつ、足でけるなど、身体的な暴力を加える」（91.9%）、「Ｉ　物でなぐったり、投げつけたりする」（91.7%）、「Ｇ　刃物をつきつける、なぐるふりをするなどして、おどす」（91.1%）などで、これらの身体的な暴力行為は夫婦間等であっても暴力にあたるとする割合は、今回調査と同様に９割を超えていた。

前回調査と比較して、「『だれのおかげで生活できるんだ』とか、『甲斐性なし』とか言う」が、どんな場合でも暴力であるとの認識が20.4ポイント増加したほか、「大声でどなる」が11.5ポイント、「大切にしているものを、わざと壊したり捨てたりする」が10.8ポイント増加するなど、前回調査のほぼ全ての行為について「どんな場合でも暴力にあたると思う」割合が増えており、夫婦間等であっても暴力にあたるとの認識が高まっている。

＜参考　前回調査＞



男女別にみると、「どんな場合でも暴力にあたると思う」割合の差は、「Ｉ　大声でどなる」が10.6ポイント、「Ｈ　家に生活費を入れない」が10.5ポイントそれぞれ女性が高くなるなど、15の行為中11の行為について女性の方が「どんな場合でも暴力にあたると思う」割合が高くなっている。

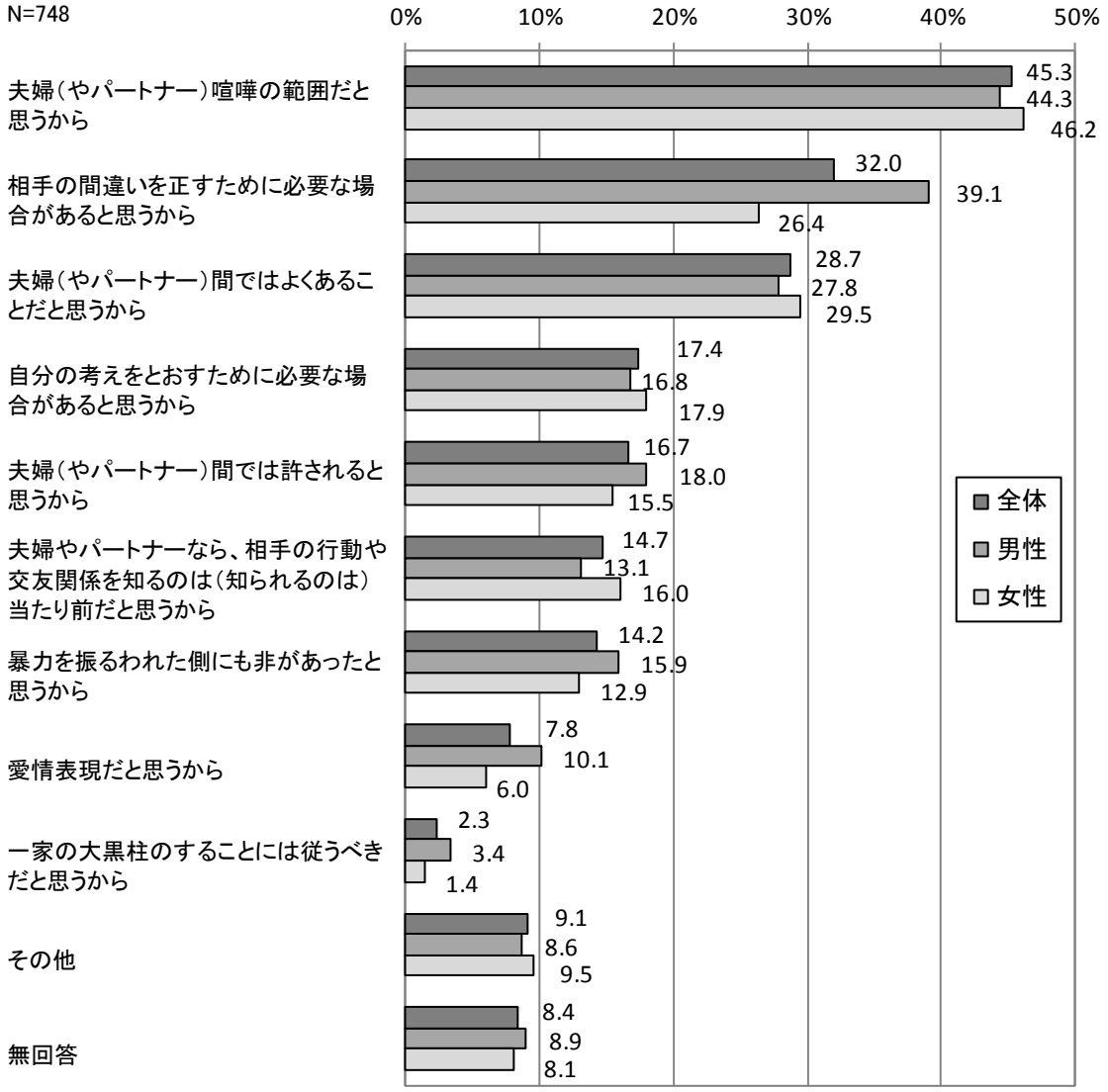
一方、「暴力にあたるとは思わない」とする割合の差は、「Ｃ　他の異性との会話を許さない」で4.7ポイント男性が高いが、その他の行為の差は全て３.0ポイント以下で大きな差はない。

問３　問２のＡ～Ｏのうち１つでも「２　暴力にあたる場合とそうでない場合があると思う」又は「３　暴力にあたるとは思わない」とお答えの方にお聞きします。

　そのような行為が「２　暴力にあたる場合とそうでない場合があると思う」、「３　暴力にあたるとは思わない」と思ったのはなぜですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

前問で夫婦間等におけるＡ～Ｏの暴力行為について１つでも「暴力にあたる場合とそうでない場合があると思う」又は「暴力にあたるとは思わない」と答えた748人に理由を聞いたところ、「夫婦（やパートナー）喧嘩の範囲だと思うから」が45.3%で最も高く、次いで、「相手の間違いを正すために必要な場合があると思うから」が32.0%、「夫婦（やパートナー）間ではよくあることだと思うから」が28.7%となった。

男女別でみると、「相手の間違いを正すために必要な場合があると思うから」で男性が12.7ポイント高くなっているが、他の理由の男女差は全て4.1ポイント以内で大きな差はない。



＜２＞夫婦間等における暴力行為の認知状況

問４　全員にお聞きします。

あなたはこれまでに問２であげたＡからＯのような行為が夫婦やパートナーの間で行われたことを身近で見聞きしたことがありますか。あてはまる番号１つに○をつけてください。（１つに○）

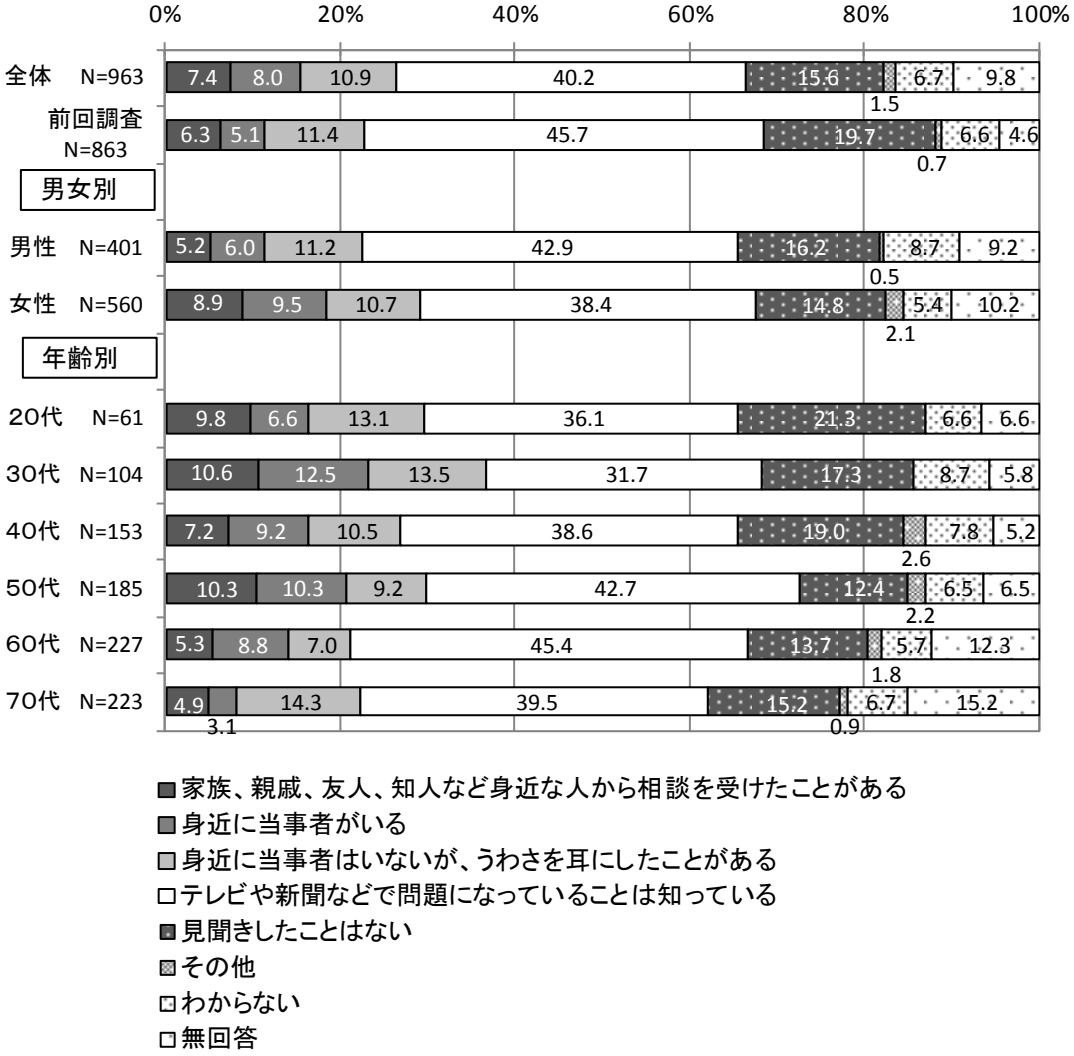
「家族、親戚、友人、知人など身近な人から相談を受けたことがある」が7.4%、「身近に当事者がいる」が8.0%と、合わせて15.4%が『身近でＤＶがあることを認知している』。（以下、「家族、親戚、友人、知人など身近な人から相談を受けたことがある」と、「身近に当事者がいる」を合わせて『身近でＤＶがあることを認知している』とする。）

一方、「テレビや新聞などで問題になっていることは知っている」が40.2%と最も高く、「見聞きしたことはない」は15.6%となっている。

前回調査と比較すると、『身近でＤＶがあることを認知している』割合は４.0ポイント増加した。

男女別では、女性は『身近でＤＶがあることを認知している』割合が18.4%と、男性（11.2%）に比べて7.2ポイント高い。

年齢別でみると、『身近でＤＶがあることを認知している』割合は「30代」が23.1%で最も高く、次いで「50代」が20.6%となっている。



＜３＞身近な暴力被害者への対応

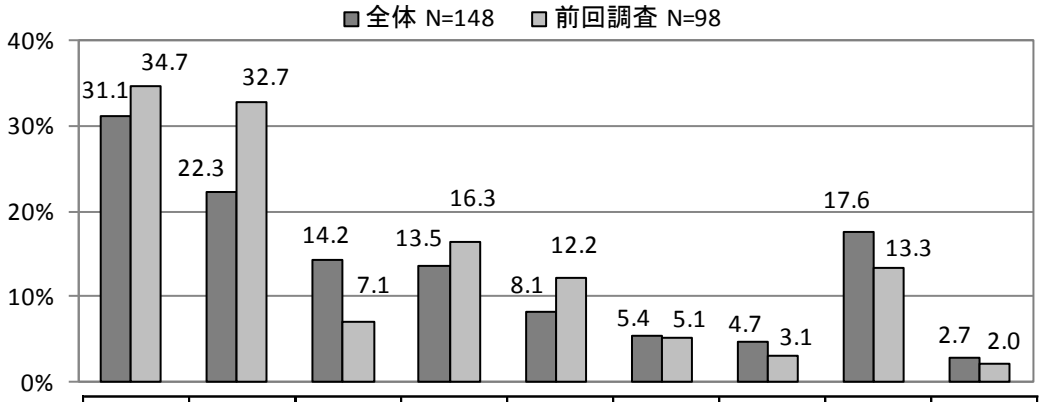
問５　問４で「１　家族、親戚、友人、知人など身近な人から相談を受けたことがある」又は「２　身近に当事者がいる」とお答えの方にお聞きします。

あなたは、身近な人が配偶者やパートナーから暴力行為を受けていることを知って、どのような行動をとりましたか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

前問で『身近でＤＶがあることを認知している』と答えた148人に聞いたところ、「何もできなかった」が31.1%で最も多く、次いで「加害者に暴力をやめるように話した」が22.3%、「何もする必要がないと思った」が14.2%、「被害者をかくまったり、家を出ることに援助をした」が13.5%となった。「その他」には、「話を聞いた」、「相談にのった」などがあげられた。

前回調査と比較して、「加害者に暴力をやめるように話した」が10.4ポイント減少した。

男女別では、男性は「加害者に暴力をやめるように話した」が28.9%で最も高く、女性（19.4%）に比べ9.5ポイント高くなっている。一方、女性は「何もできなかった」が35.0%で最も高く、男性（22.2%）に比べ12.8ポイント高くなっている。



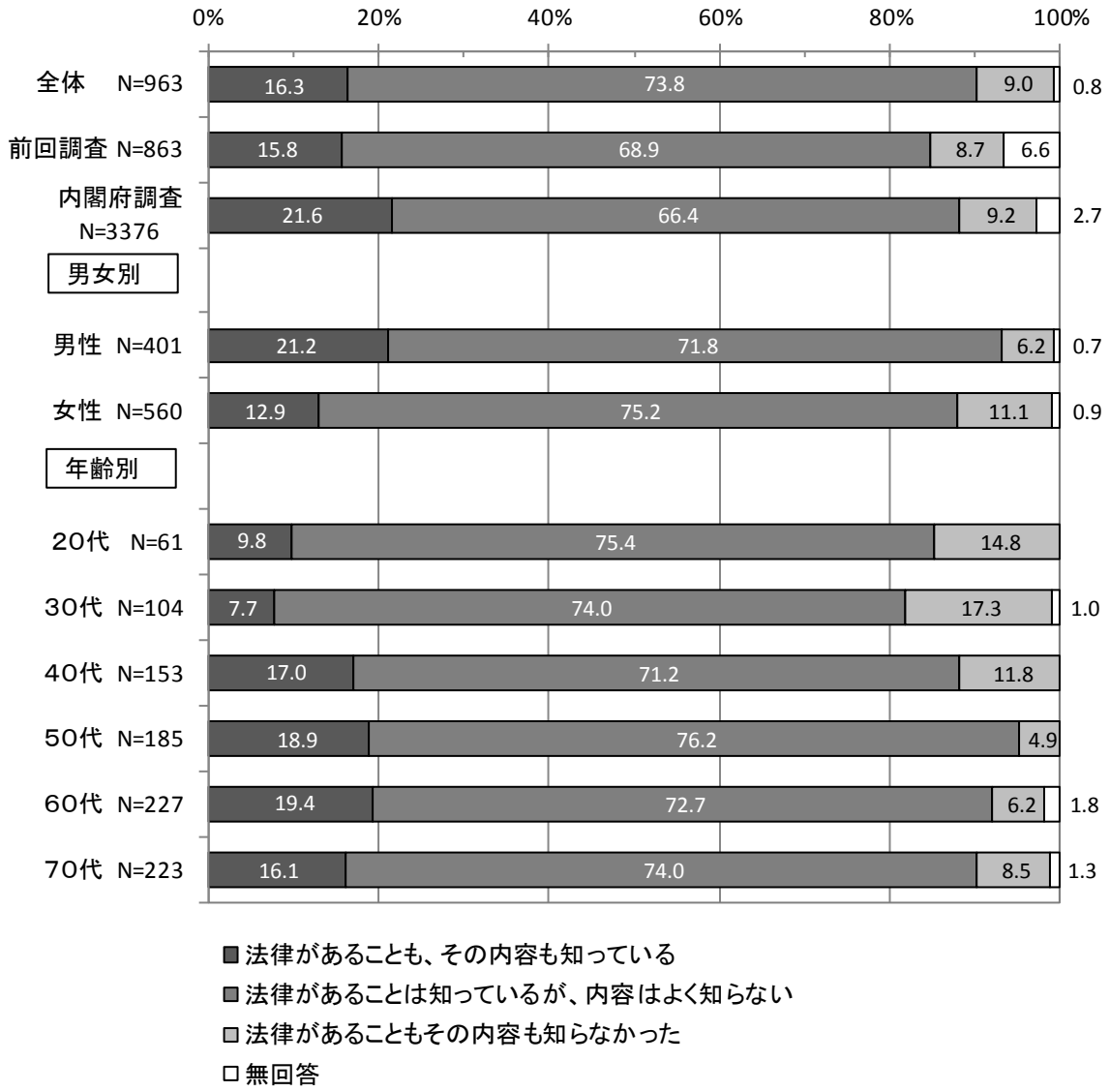
		何もできなかった	加害者に暴力をやめるように話した	何もする必要がないと思った	被害者をかくまったり、家を出ることに援助をした	被害者に相談機関などを紹介した	被害者に我慢するように話した	被害者と一緒に病院や相談機関に行った	その他	無回答
男女別	男性　N=45	22.2	28.9	22.2	13.3	6.7	11.1	4.4	11.1	-
	女性　N=103	35.0	19.4	10.7	13.6	8.7	2.9	4.9	20.4	3.9
年齢別	20代　N=10	40.0	20.0	20.0	20.0	10.0	-	-	10.0	-
	30代　N=24	33.3	25.0	12.5	12.5	8.3	12.5	4.2	16.7	-
	40代　N=25	36.0	16.0	12.0	24.0	4.0	4.0	-	20.0	-
	50代　N=38	36.8	18.4	13.2	15.8	10.5	5.3	7.9	15.8	2.6
	60代　N=32	28.1	25.0	12.5	9.4	3.1	3.1	6.3	21.9	9.4
	70代　N=18	11.1	33.3	22.2	-	11.1	5.6	5.6	16.7	-

＜４＞ＤＶ防止法の認知状況

問６　全員にお聞きします。
あなたは、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律（ＤＶ防止法）」を知っていますか。あてはまる番号１つに○をつけてください。（１つに○）

ＤＶ防止法の認知状況をみると、「法律があることも、その内容も知っている」が16.3%、「法律があることは知っているが、内容はよく知らない」が73.8%と、合わせてＤＶ防止法を知っている人は90.1%と９割を超えており、前回調査に比べて法律があることの認知状況は5.4ポイント増加している。

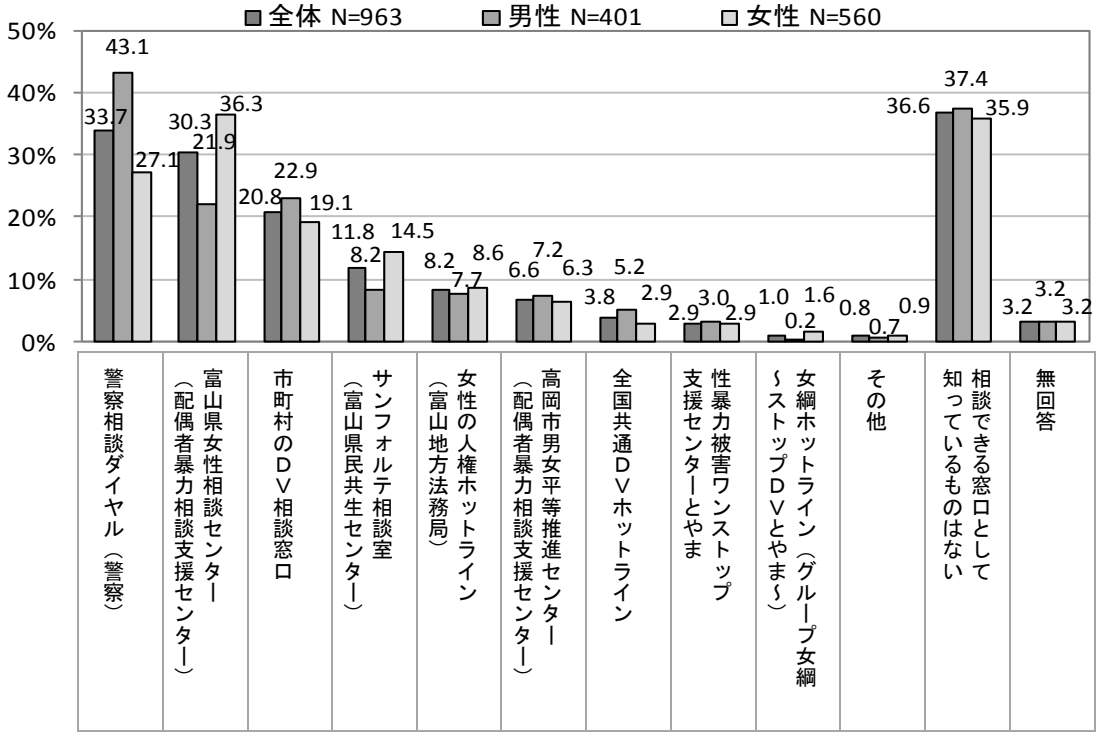
平成29年度に内閣府が実施した全国調査では、法律があることの認知状況は88.0%であり、富山県の認知状況が2.1ポイント上回っている。



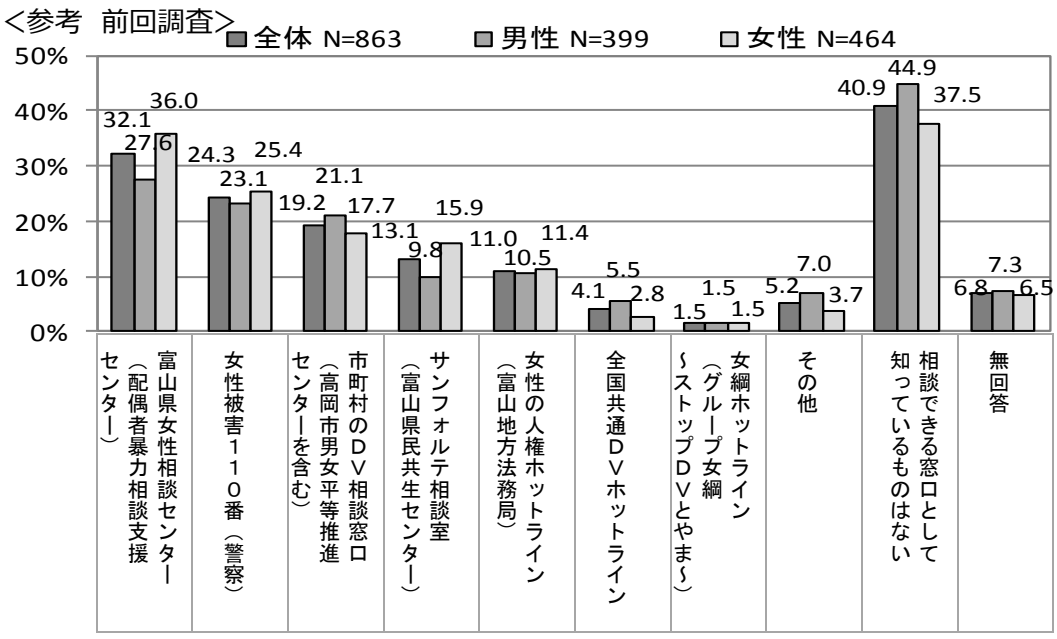
＜５＞配偶者等からの暴力について相談できる窓口の認知状況

問７　あなたは、配偶者等からの暴力について相談できる窓口として、どのようなものを知っていますか。 次の中から知っているものすべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

配偶者等からの暴力について相談窓口として知っている割合は、「警察相談ダイヤル（警察）」が33.7%と最も高く、次いで「富山県女性相談センター（配偶者暴力相談支援センター）」30.3%、「市町村のＤＶ相談窓口」が20.8%となっている。一方、「相談できる窓口として知っているものはない」は36.6%と高いが、前回調査と比較して4.3ポイント減少している。



＜参考　前回調査＞



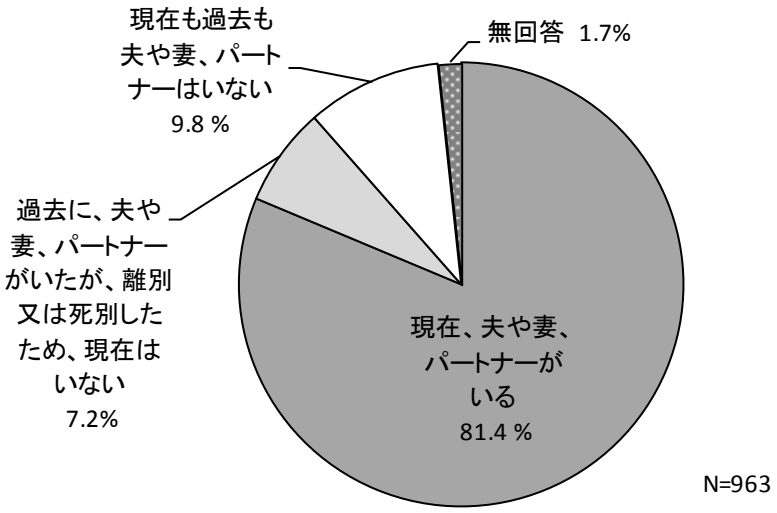
３．夫婦やパートナーとの男女間における暴力の経験

＜１＞婚姻歴

問８　婚姻歴等について、次の１から３の中であてはまる番号１つに○をつけてください。（１つに○）
なお、「夫や妻」は事実婚や別居中を含み、「パートナー」は同居していない場合も含みます。

（問９以降の配偶者・パートナーへの加害経験、配偶者・パートナーからの被害経験等について聞く前に、前提条件となる婚姻歴等について聞いたもの。）

「現在、夫や妻、パートナーがいる」が81.4%、「過去に、夫や妻、パートナーがいたが、離別または死別したため、現在はいない」が7.2%と、婚姻歴のある人が88.6%となっている。



（単位：人数（上段）、%（下段））

	総数	現在、夫や妻、パートナーがいる	過去に、夫や妻、パートナーがいたが、離別または死別したため、現在はいない	現在も過去も夫や妻、パートナーはいない	無回答
全体	963 100.0	784 81.4	69 7.2	94 9.8	16 1.7
男性	401 100.0	315 78.6	20 5.0	58 14.5	8 2.0
女性	560 100.0	467 83.4	49 8.8	36 6.4	8 1.4

＜２＞配偶者・パートナーへの加害経験・被害経験

問９　問８で「１　現在、夫や妻、パートナーがいる」又は「２　過去に、夫や妻、パートナーがいたが、離別または死別したため、現在はいない」とお答えの方にお聞きします。

あなたはこれまでに、あなたの夫や妻、パートナーに対し、次のようなことを行ったことがありますか。また、あなたの夫や妻、パートナーから、次のようなことをされたことがありますか。最近１年間と過去の経験の状況を、次のＡからＤのそれぞれについて、あてはまる番号１つに○をつけてください。

（○はＡからＤの①・②の最近１年間と過去の経験にそれぞれ１つずつ）

Ａ　身体的暴行

（例えば、なぐったり、けったり、物を投げつけたり、突き飛ばしたりするなどの身体に対する暴行）

Ｂ　心理的攻撃

（例えば、人格を否定するような暴言、交友関係や行き先、電話・メールなどを細かく監視したり、長時間無視したりするなどの精神的な嫌がらせ、あるいは、相手もしくは相手の家族が危害を加えられるのではないかと恐怖を感じるような脅迫）

Ｃ　経済的圧迫

（例えば、生活費を渡さない、給料や貯金を勝手に使う、外で働くことを妨害するなど）

Ｄ　性的強要

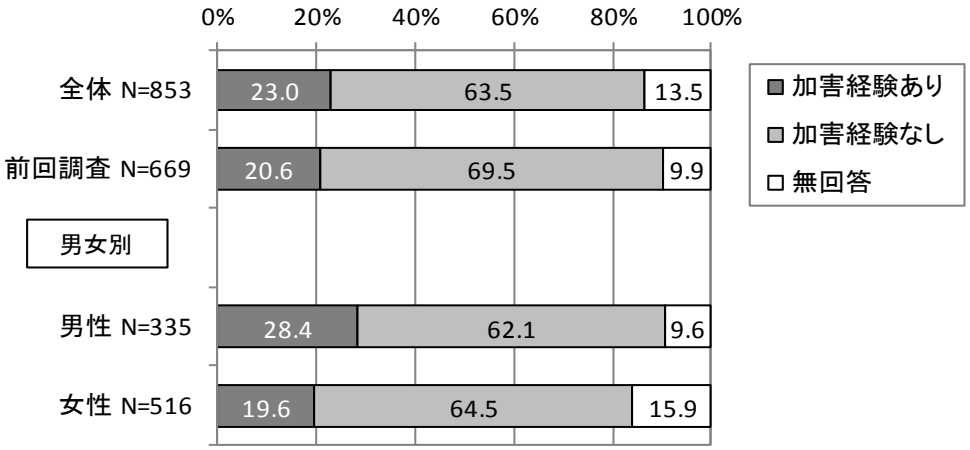
（例えば、嫌がっているのに性的な行為を強要したり、ポルノ映像等を見せたり、避妊に協力しないなど）

(1) 配偶者・パートナーへの加害経験（ＤＶ加害経験　問９－①）

配偶者やパートナーがいる（いた）853 人の、加害経験についてみてみる。

ＡからＤの暴力行為について、最近１年間と過去の経験において、１つでも「一・二度した」又は「何度もした」とする加害経験のある人は23.0%となっており、前回調査に比べると2.4ポイント増加した。

男女別では、男性は加害経験があるとした割合が28.4%と、女性（19.6%）に比べて8.8ポイント高い。



以下、身体的暴行、心理的攻撃、経済的圧迫、性的強要の４つの暴力行為について、最近１年間と過去の経験別に、加害状況をみてみる。

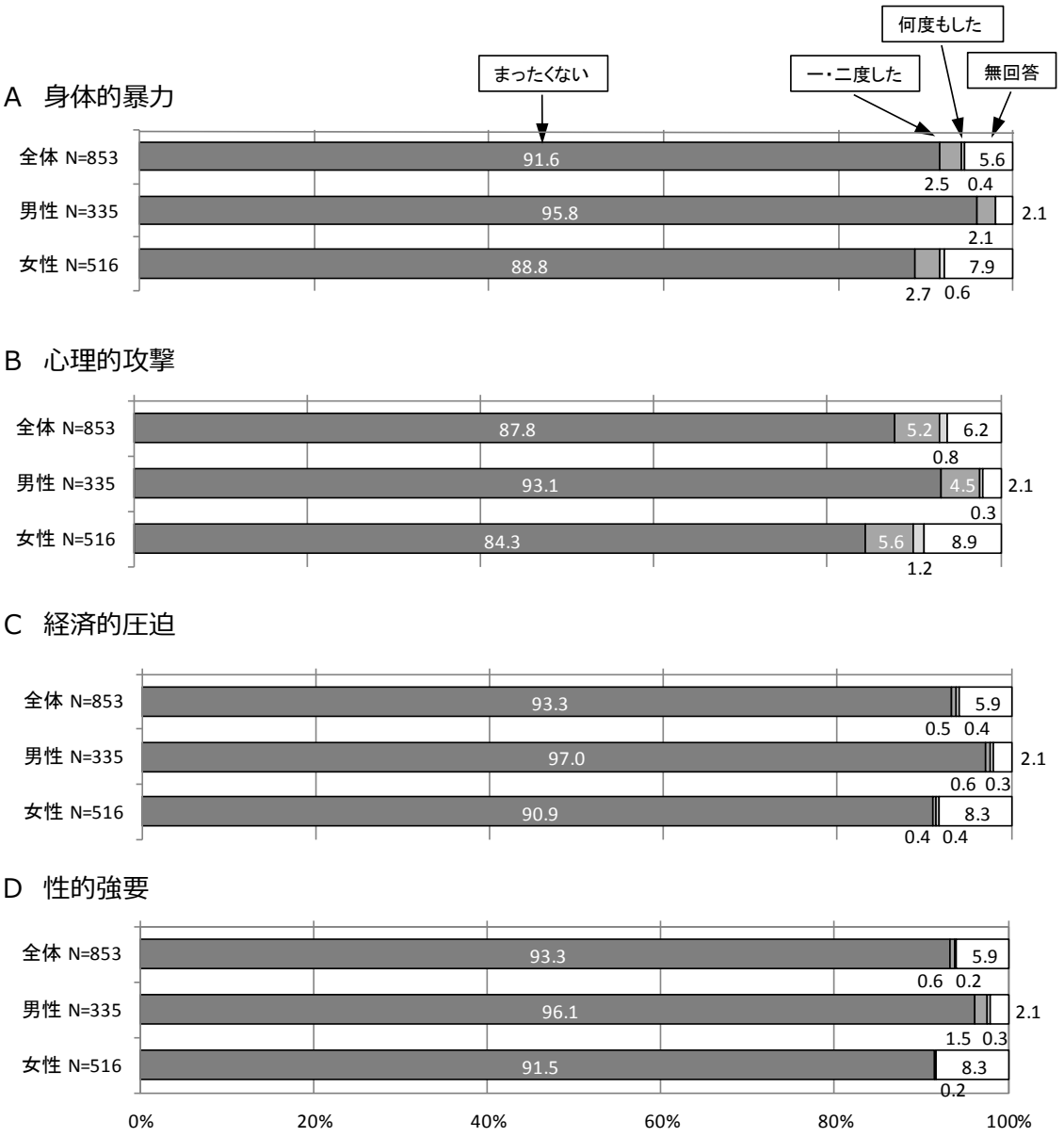
(ⅰ)最近１年間

A　身体的暴力について、最近１年間に『加害経験があるとした割合』（「一・二度した」＋「何度もした」）は2.9%で、男女別でみると男性は2.1%、女性は3.3%となっている。

B　心理的攻撃について、最近１年間に『加害経験があるとした割合』は6.0%で、男女別でみると男性は4.8%、女性は6.8%となっている。

C　経済的圧迫について、最近１年間に『加害経験があるとした割合』は0.9%で、男女別でみると男性は0.9%、女性は0.8%となっている。

D　性的強要について、最近１年間に『加害経験があるとした割合』は0.8%で、男女別でみると男性は1.8%、女性は0.2%となっている。



(ⅱ)過去の経験

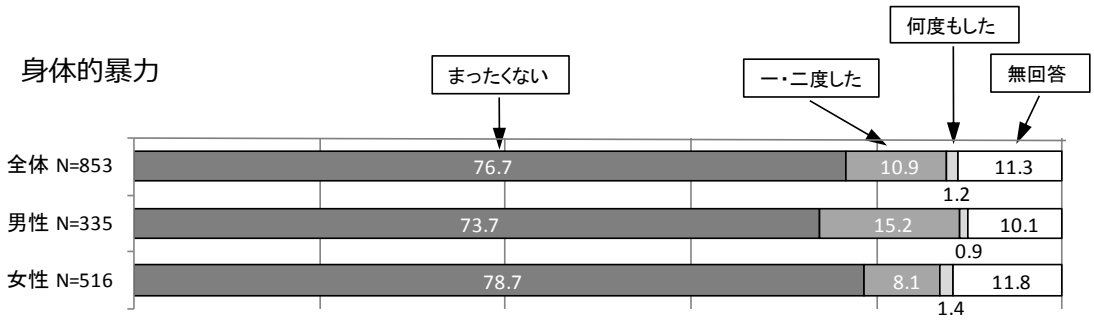
A　身体的暴力について、過去に『加害経験があるとした割合』（「一・二度した」＋「何度もした」）は12.1%で、男女別でみると男性は16.1%と女性（9.5%）と比べ6.6ポイント高くなっている。

B　心理的攻撃について、過去に『加害経験があるとした割合』は10.9%で、男女別でみると男性は10.7%、女性は11.1%となっている。

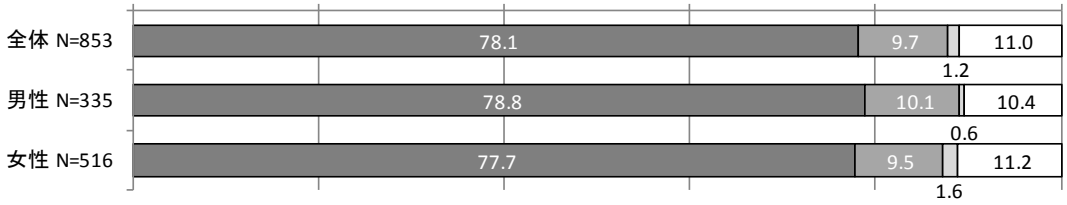
C　経済的圧迫について、過去に『加害経験があるとした割合』は2.2%で、男女別でみると男性は2.7%、女性は2.0%となっている。

D　性的強要について、過去に『加害経験があるとした割合』は3.0%で、男女別でみると男性は5.4%、女性は1.4%と、男性の方が４.0ポイント高くなっている。

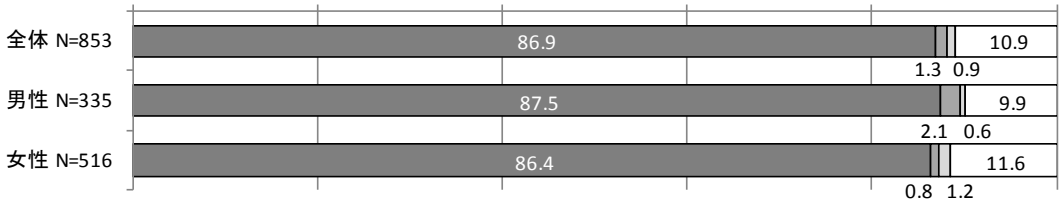
A　身体的暴力



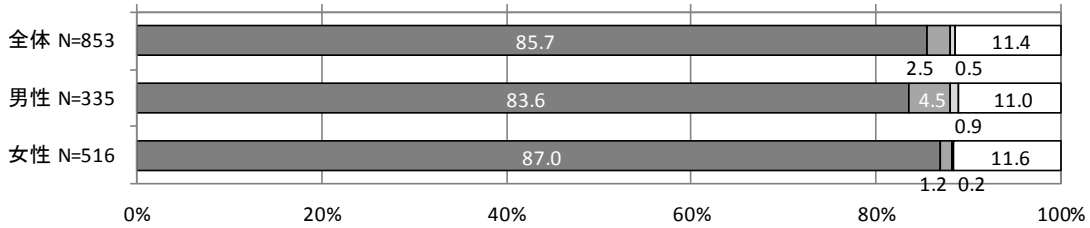
B　心理的攻撃



C　経済的圧迫



D　性的強要



(ⅲ)最近１年間と過去の経験との比較

ＡからＤの暴力行為の加害状況をみると、いずれの行為においても『加害経験があるとした割合』は、「最近１年間」の方が「過去の経験」に比べて低くなっている。

（単位：%）

全体 N=853	一・二度した			何度もした		
	最近１年間（ア）	過去の経験（イ）	差し引き（ア）－（イ）	最近１年間（ア）	過去の経験（イ）	差し引き（ア）－（イ）
A 身体的暴力	2.5	10.9	▲8.4	0.4	1.2	▲0.8
B 心理的攻撃	5.2	9.7	▲4.5	0.8	1.2	▲0.4
C 経済的圧迫	0.5	1.3	▲0.8	0.4	0.9	▲0.5
D 性的強要	0.6	2.5	▲1.9	0.2	0.5	▲0.3

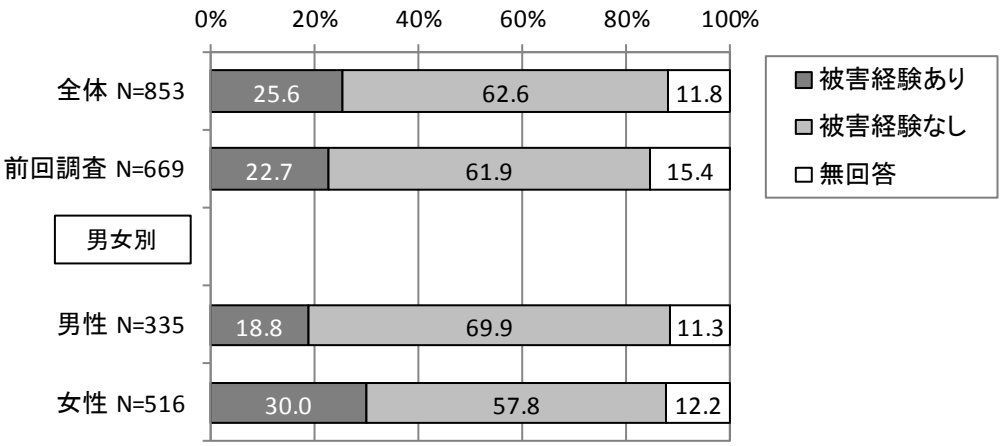
(2) 配偶者・パートナーからの被害経験（ＤＶ被害経験　問９－②）

配偶者やパートナーがいる（いた）853人の、被害経験についてみてみる。

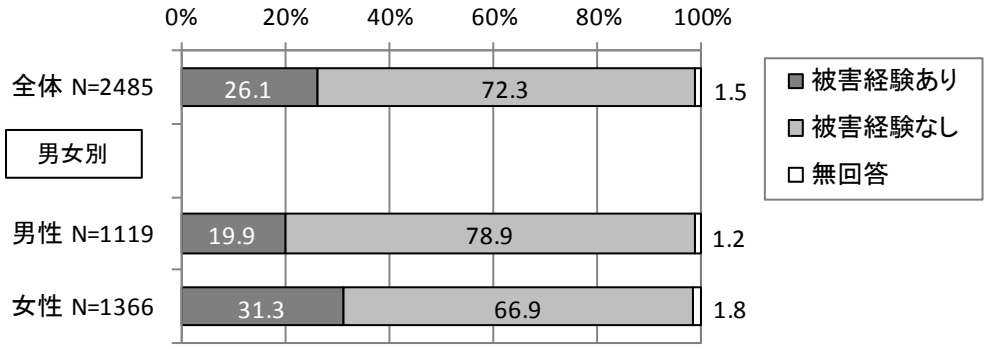
ＡからＤの暴力行為について、最近１年間と過去の経験において、１つでも「一・二度された」又は「何度もされた」とする被害経験がある人は25.6%となっており、前回調査に比べると2.9ポイント増加した。

男女別では、女性は被害経験があるとした割合が30.0%と、男性（18.8%）に比べ11.2ポイント高い。

内閣府が実施した全国調査と比較すると、被害経験のあるとした割合は、全体で0.5ポイント、男性で1.1ポイント、女性で1.3ポイント、それぞれ下回っている。



＜参考　内閣府調査＞



以下、身体的暴行、心理的攻撃、経済的圧迫、性的強要の４つの暴力行為について、最近１年間と過去の経験別に、被害状況をみてみる。

(ｉ)最近１年間

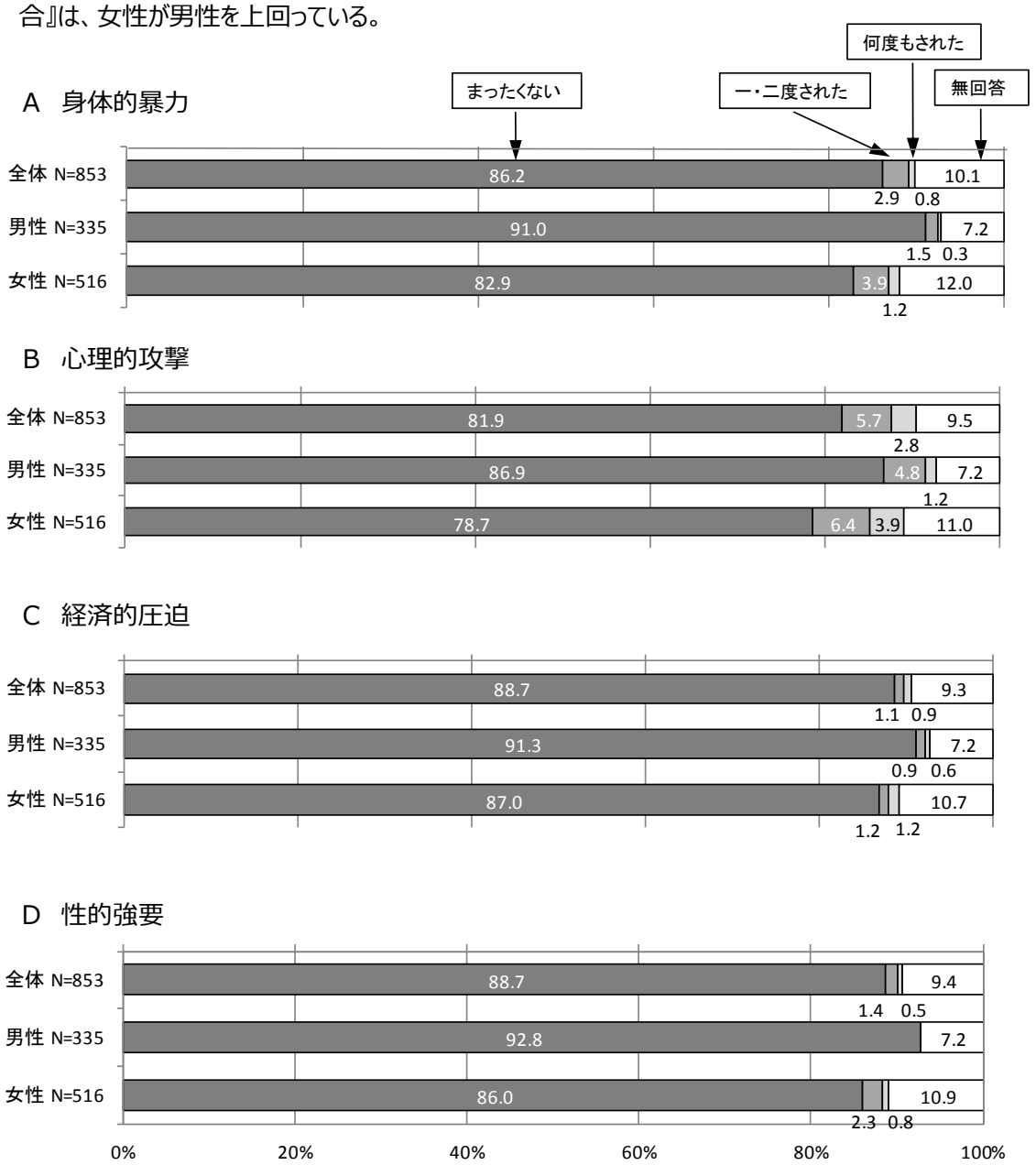
A　身体的暴力について、最近１年間に『被害経験があるとした割合』（「一・二度された」＋「何度もされた」）は3.7%で、男女別でみると男性は1.8%、女性は5.1%となっている。

B　心理的攻撃について、最近１年間に『被害経験があるとした割合』は8.5%で、男女別でみると男性は6.0%、女性は10.3%となっている。

C　経済的圧迫について、最近１年間に『被害経験があるとした割合』は2.0%で、男女別でみると男性は1.5%、女性は2.4%となっている。

D　性的強要について、最近１年間に『被害経験があるとした割合』は1.9%で、男女別でみると男性はゼロ、女性は3.1%となっている。

以上、ＡからＤの暴力行為について、いずれの行為においても最近１年間に『被害経験があるとした割合』は、女性が男性を上回っている。



(ⅱ)過去の経験

A　身体的暴力について、過去に『被害経験があるとした割合』（「一・二度された」＋「何度もされた」）は15.2%で、男女別でみると男性は9.3%、女性は19.2%と、女性の方が9.9ポイント高くなっている。

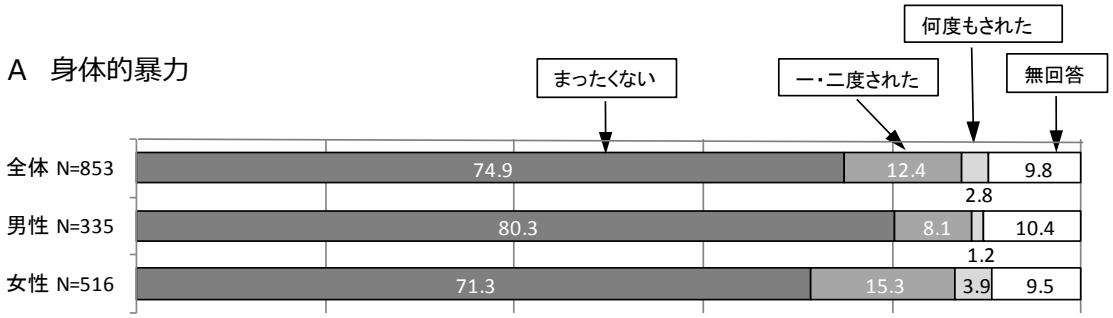
B　心理的攻撃について、過去に『被害経験があるとした割合』は14.1%で、男女別でみると男性は10.8%、女性は16.2%となっている。

C　経済的圧迫について、過去に『被害経験があるとした割合』は6.0%で、男女別でみると男性は2.7%、女性は8.2%となっている。

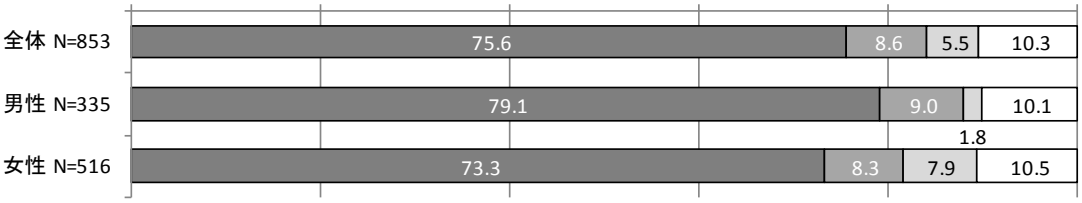
D　性的強要について、過去に『被害経験があるとした割合』は5.7%で、男女別でみると男性は0.9%、女性は8.9%と、女性の方が８.0ポイント高くなっている。

以上、ＡからＤの暴力行為について、いずれの行為においても過去に『被害経験があるとした割合』は、女性が男性を上回っている。

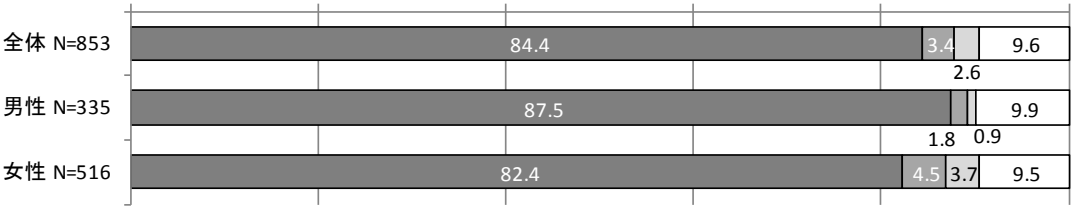
A　身体的暴力



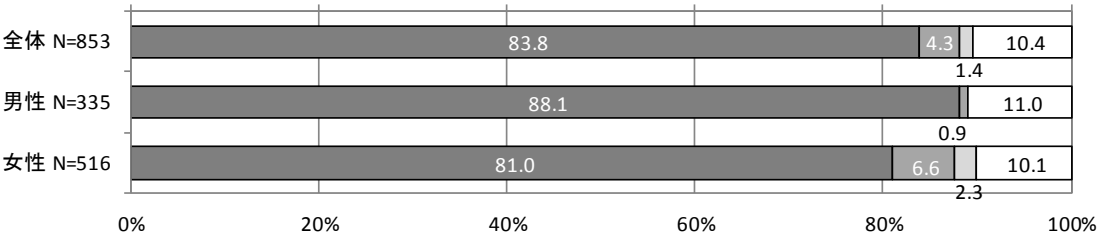
B　心理的攻撃



C　経済的圧迫



D　性的強要



(ⅲ)最近１年間と過去の経験との比較

ＡからＤの暴力行為の被害状況をみると、いずれの行為においても『被害経験があるとした割合』は、「最近１年間」の方が「過去の経験」に比べて低くなっている。

（単位：%）

全体 N=853	一・二度された			何度もされた		
	最近１年間（ア）	過去の経験（イ）	差し引き（ア）－（イ）	最近１年間（ア）	過去の経験（イ）	差し引き（ア）－（イ）
A 身体的暴力	2.9	12.4	▲9.5	0.8	2.8	▲2.0
B 心理的攻撃	5.7	8.6	▲2.9	2.8	5.5	▲2.7
C 経済的圧迫	1.1	3.4	▲2.3	0.9	2.6	▲1.7
D 性的強要	1.4	4.3	▲2.9	0.5	1.4	▲0.9

(3) 配偶者・パートナーへの加害経験と配偶者・パートナーからの被害経験

ＤＶ加害経験のある196人のＤＶ被害経験のある割合は63.3%で、ＤＶ加害経験のない542人のＤＶ被害経験のある割合の13.1%より50.2ポイント高くなっている。

ＤＶ被害経験のある218人のＤＶ加害経験のある割合は56.9%で、ＤＶ被害経験のない534人のＤＶ加害経験のある割合の11.0%より45.9ポイント高くなっている。

（単位 ： 人数（上段）、%（下段））

全体 N=853		ＤＶ被害経験 （問９－②）			
		総数	被害経験あり	被害経験なし	無回答
ＤＶ加害経験別（問９－①）	総数	853 100.0	218 25.6	534 62.6	101 11.8
	加害経験あり	196 100.0	124 63.3	59 30.1	13 6.6
	加害経験なし	542 100.0	71 13.1	459 84.7	12 2.2
	無回答	115 100.0	23 20.0	16 13.9	76 66.1
全体 N=853		ＤＶ加害経験 （問９－①）			
		総数	加害経験あり	加害経験なし	無回答
ＤＶ被害経験別（問９－②）	総数	853 100.0	196 23.0	542 63.5	115 13.5
	被害経験あり	218 100.0	124 56.9	71 32.6	23 10.6
	被害経験なし	534 100.0	59 11.0	459 86.0	16 3.0
	無回答	101 100.0	13 12.9	12 11.9	76 75.2

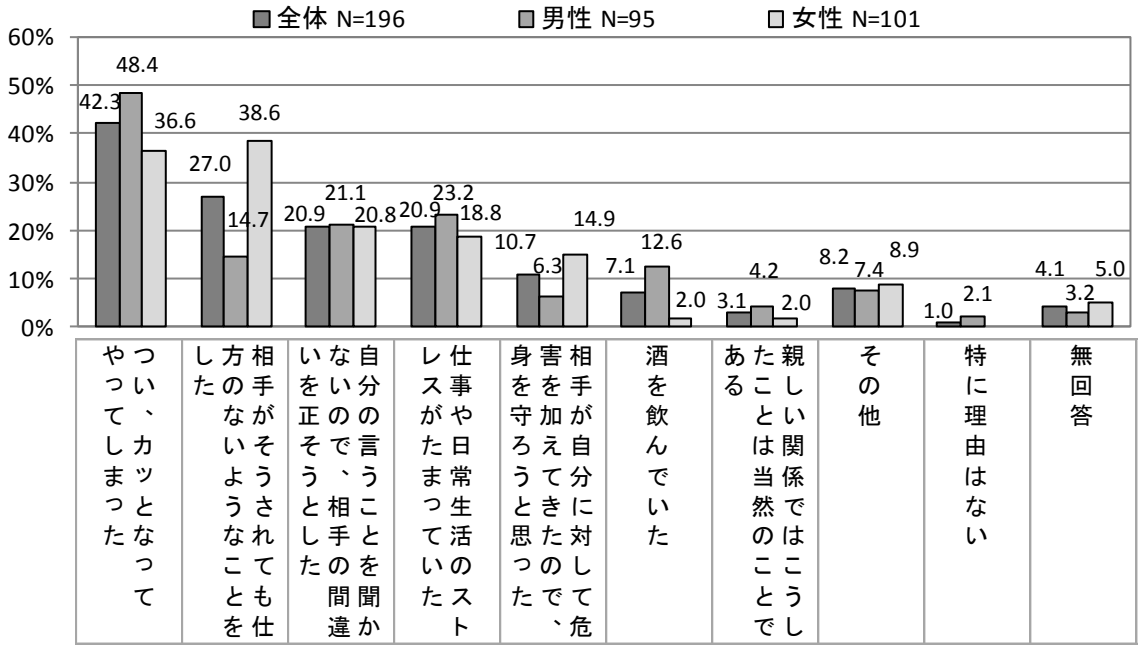
＜３＞加害理由

問 10　問９－①（あなたが夫や妻等に行ったこと）のＡからＤのうち、１つでも「２」又は「３」とお答えの方にお聞きします。

あなたは、ご自身がなぜそのようなことをしたとお考えですか。次の１から９のうちあてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

ＤＶ加害経験のある196人に理由を聞いたところ、「つい、カッとなってやってしまった」が42.3%と最も高く、次いで「相手がそうされても仕方のないようなことをした」が27.0%、「自分の言うことを聞かないので、相手の間違いを正そうとした」と「仕事や日常生活のストレスがたまっていた」が20.9%となった。

男女別でみると、男性は、「つい、カッとなってやってしまった」が48.4%と最も高く、女性（36.6%）に比べ11.8ポイント高くなっている。一方、女性は、「相手がそうされても仕方のないようなことをした」が38.6%と最も高く、男性（14.7%）に比べ23.9ポイント高くなっている。

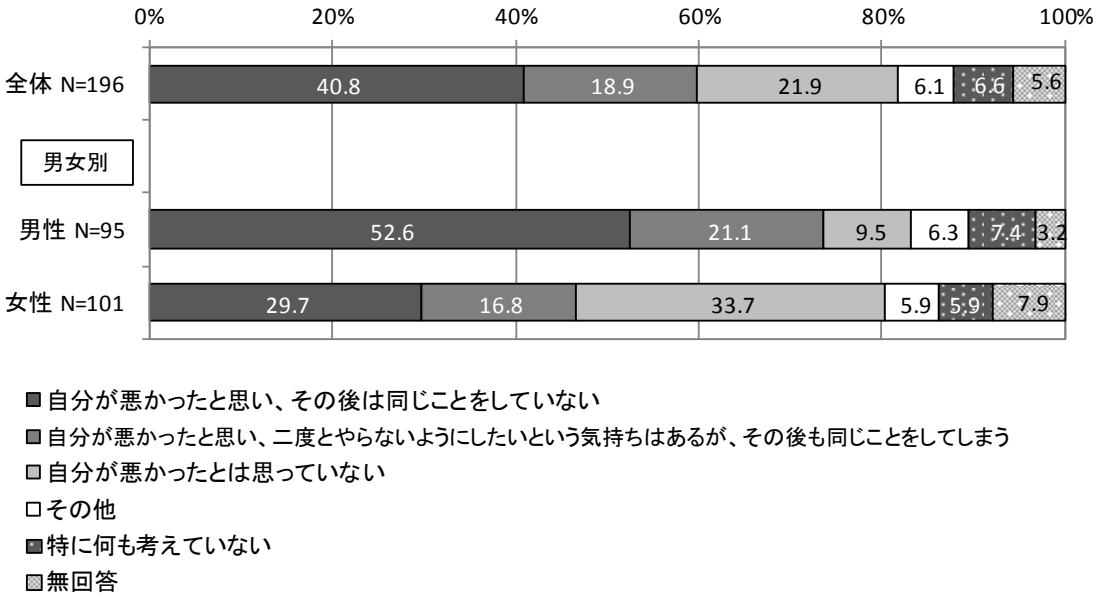


＜４＞加害行為をしたことに対する考え

問 11　あなたは、問９－①であげたような行為をしたことについて、どのように考えていますか。 あなたの考えに近い番号１つに○をつけてください。（１つに○）

「自分が悪かったと思い、その後は同じことをしていない」が40.8%と最も高く、次いで「自分が悪かったとは思っていない」が21.9%、「自分が悪かったと思い、二度とやらないようにしたいという気持ちはあるが、その後も同じことをしてしまう」が18.9%となっている。

男女別でみると、男性は「自分が悪かったと思い、その後は同じことをしていない」が52.6%と、女性に比べ22.9ポイント高くなっている。女性は、「自分が悪かったとは思っていない」が33.7%と、男性に比べ24.2ポイント高くなっている。



＜５＞暴力行為による生活上の変化

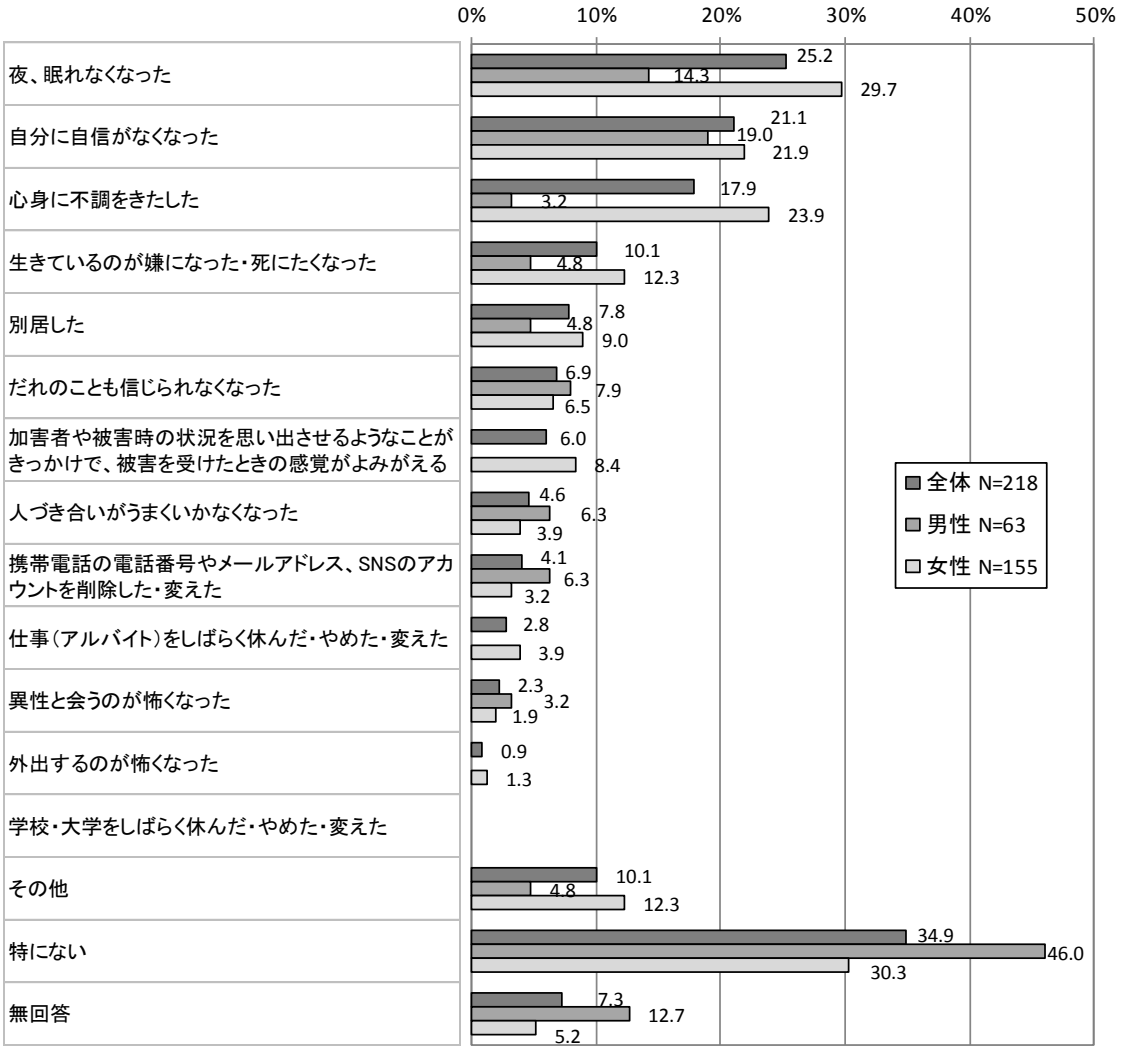
問 12　問９－②（あなたが夫や妻等からされたこと）のＡからＤのうち、１つでも「２」又は「３」とお答えの方にお聞きします。

あなたはこれまでに、夫や妻、パートナーからの暴力行為によって、生活が変わりましたか。

次の１から 15 のうちあてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

ＤＶ被害経験のある218人について生活上の変化をみると、「夜、眠れなくなった」が25.2%、「自分に自信がなくなった」が21.1%、「心身に不調をきたした」が17.9%となっているが、「特にない」が34.9%で最も高くなっている。

男女別でみると、女性は「夜、眠れなくなった」が29.7%と男性に比べ15.4ポイント高く、「心身に不調をきたした」が23.9%と男性に比べ20.7ポイント高く、大きな差がある。



＜６＞暴力行為による受診の状況

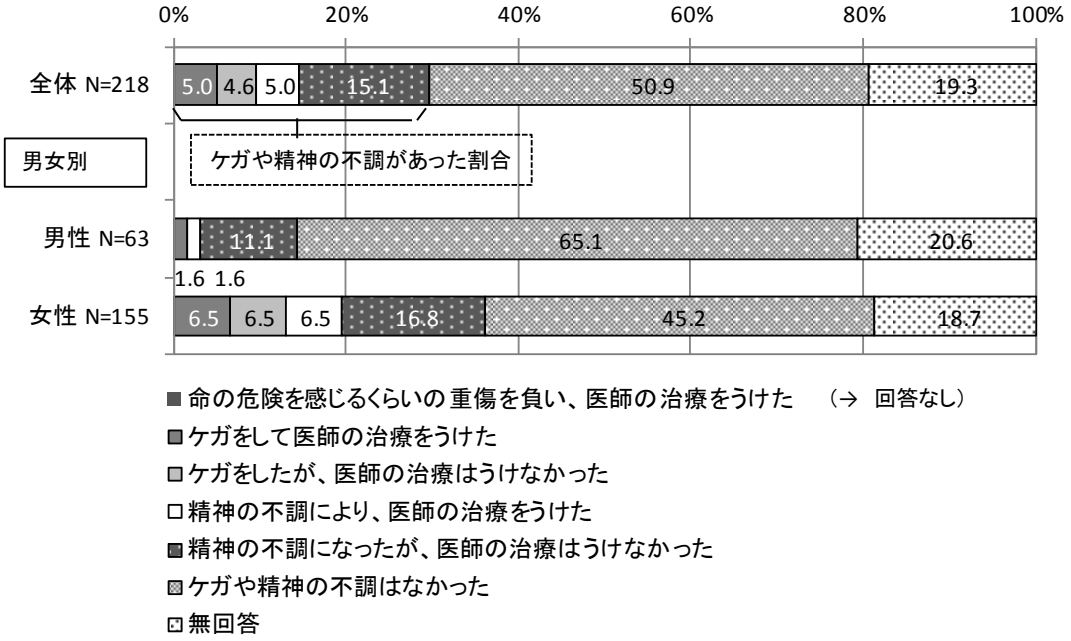
問 13　あなたはこれまでに、夫や妻、パートナーからの暴力行為によって、医師の治療をうけましたか。 あてはまる番号１つに○をつけてください。（１つに○）

ＤＶ被害経験のある 218 人について受診の状況をみると、「ケガをして医師の治療をうけた」が 5.0%、「精神の不調により、医師の治療をうけた」が 5.0%と、合わせて 10.0%が医師の治療を受けたとしている。

「ケガをしたが、医師の治療はうけなかった」は4.6%、「精神の不調になったが、医師の治療はうけなかった」は15.1%となり、合わせて19.7%がケガや精神が不調になったが医師の治療を受けていない。

前記の「医師の治療を受けた」10.0%と「医師の治療を受けていない」19.7%を合わせると、受診の有無にかかわらずケガや精神が不調になった人の割合は 29.7%となっている。

男女別でみると、女性の方がケガや精神が不調になった人の割合が高い。

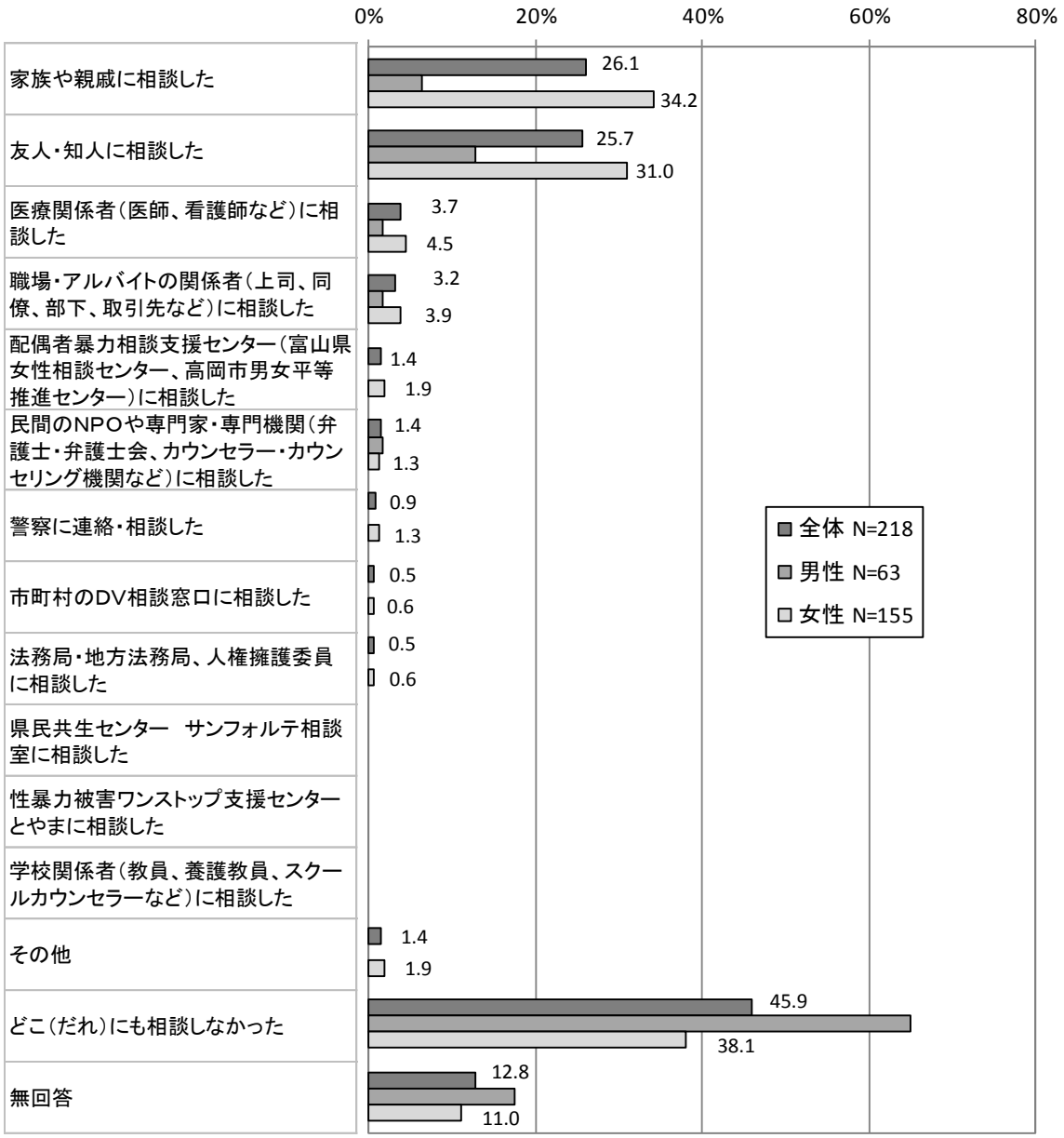


＜７＞暴力被害の相談先

問 14　あなたはこれまでに、夫や妻、パートナーから受けた暴力行為について、だれかに打ち明けたり、相談したりしましたか。 あてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

ＤＶ被害経験のある218人について相談先を聞いたところ、「家族や親戚に相談した」が26.1%、「友人・知人に相談した」が25.7%となっているが、「どこ（だれ）にも相談しなかった」が45.9%と最も高くなっている。

男女別でみると、女性は、「家族や親戚に相談した」が34.2%と男性に比べ27.9ポイント高く、また、「友人・知人に相談した」が31.0%と男性に比べ18.3ポイント高くなっている。男性は、「どこ（だれ）にも相談しなかった」が65.1%と女性（38.1%）と比べて27.0ポイント高くなっている。

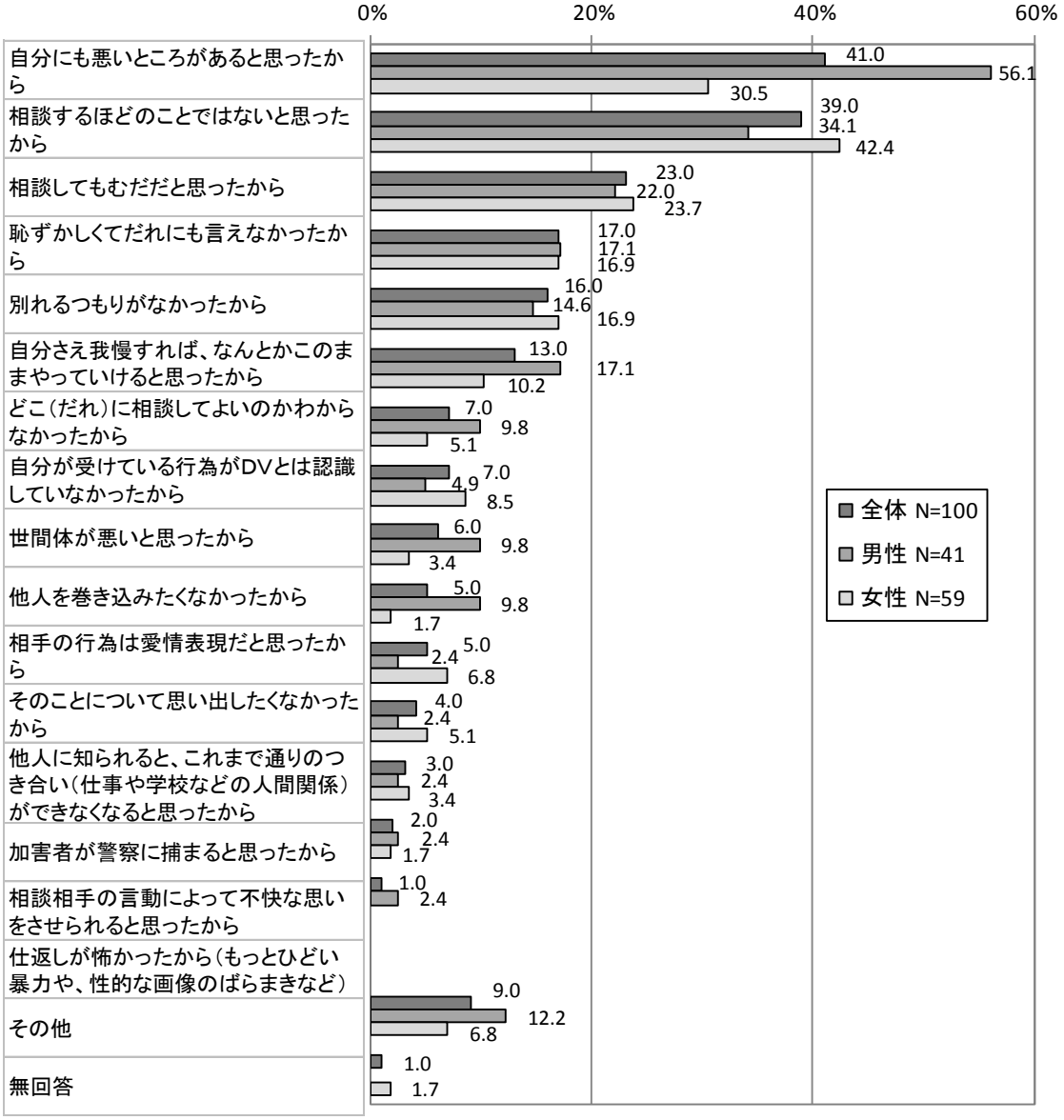


＜８＞相談しなかった理由

問15　問14で「14 どこ（だれ）にも相談しなかった」とお答えの方にお聞きします。
どこ（だれ）にも相談しなかったのは、なぜですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。
（○はいくつでも）

前問で「どこ（だれ）にも相談しなかった」と答えた100人に理由を聞いたところ、「自分にも悪いところがあると思ったから」が41.0%と最も高く、次いで「相談するほどのことではないと思ったから」が39.0%、「相談してもむだだと思ったから」が23.0%となっている。

男女別でみると、男性は「自分にも悪いところがあると思ったから」が56.1%と最も高く、女性と比べて25.6ポイント高くなっている。女性は、「相談するほどのことではないと思ったから」が42.4%と最も高くなっている。

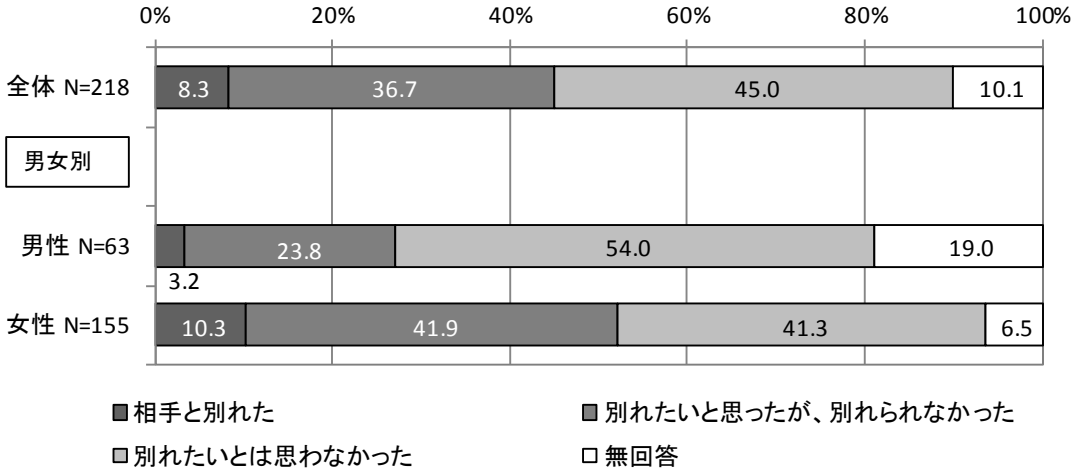


＜９＞暴力被害を受けたときの行動

問 16　あなたは、夫や妻、パートナーから暴力行為を受けたとき、どうしましたか。 あてはまる番号１つに○をつけてください。（１つに○）

ＤＶ被害経験のある218人の暴力行為を受けたときの行動をみると、「相手と別れた」が8.3%、「別れたいと思ったが、別れられなかった」が36.7%、「別れたいとは思わなかった」が45.0%となっている。

男女別でみると、女性は、「別れたいと思ったが、別れられなかった」が41.9%と、男性と比べて18.1ポイント高くなっている。男性は、「別れたいとは思わなかった」が54.0%と、女性に比べて12.7ポイント高くなっている。

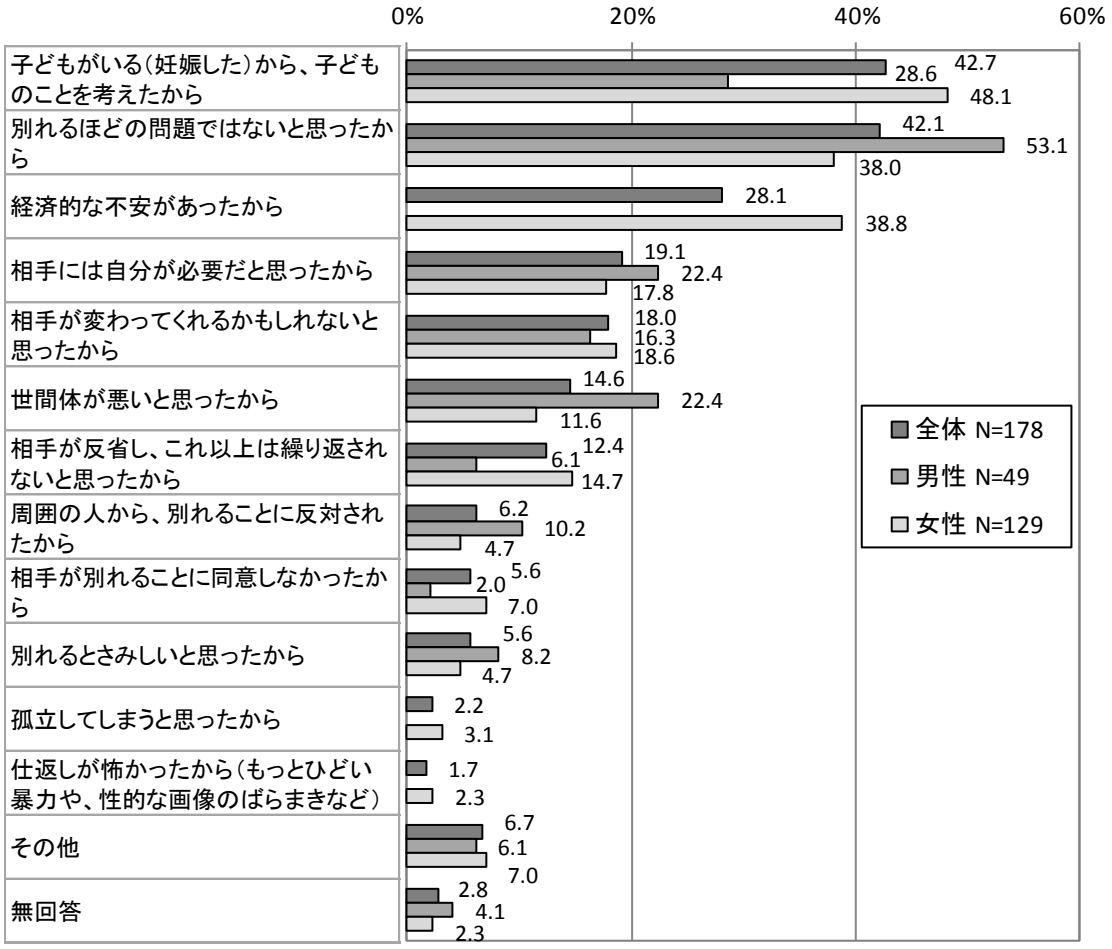


<10>別れなかった理由

問 17　問 16 で「２」又は「３」とお答えの方にお聞きします。
別れなかった理由は何ですか。
次の１から 13 のうちあてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

前問で、「別れたいと思ったが、別れられなかった」、「別れたいとは思わなかった」とした178人について理由を聞いたところ、「子どもがいる（妊娠した）から、子どものことを考えたから」が42.7%、「別れるほどの問題ではないと思ったから」が42.1%、「経済的な不安があったから」が28.1%となった。

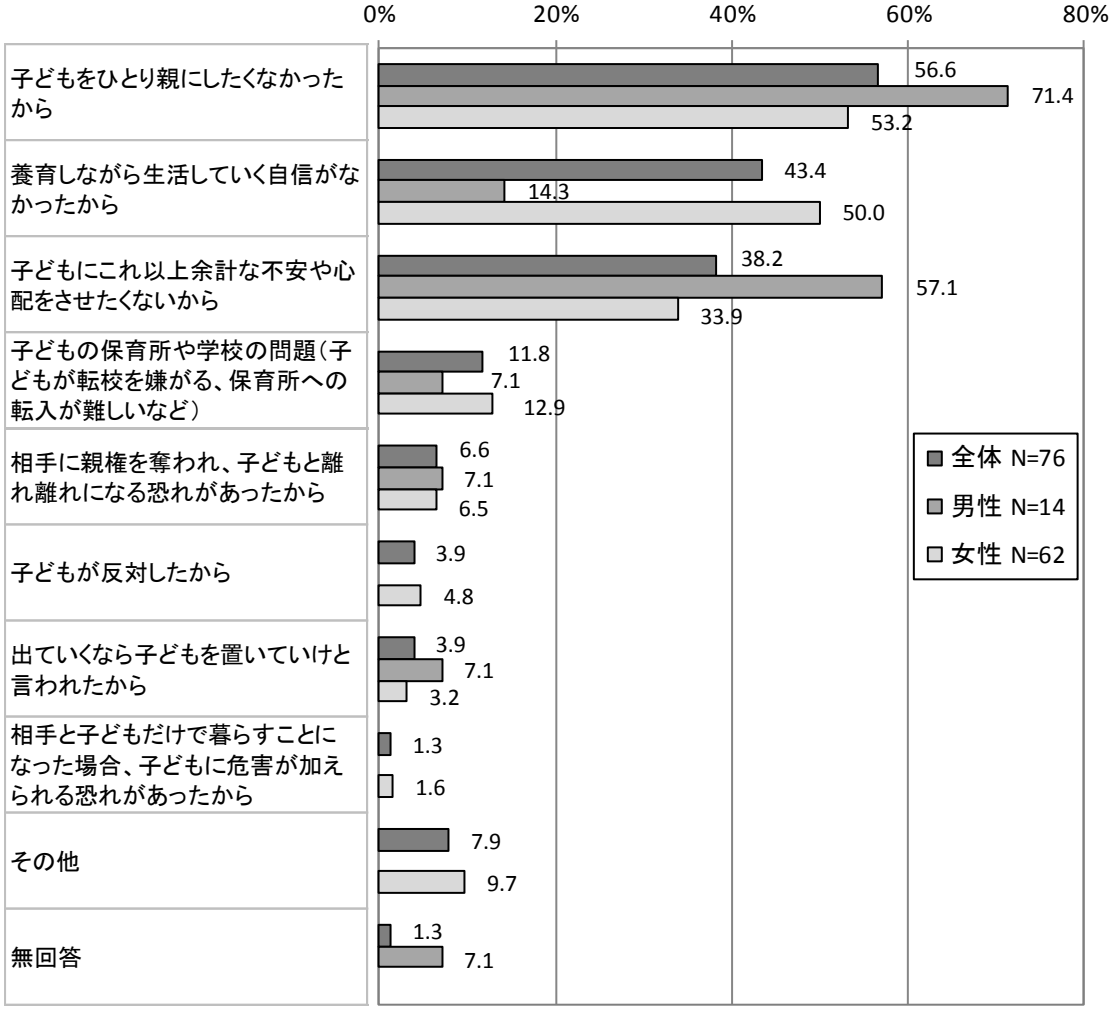
男女別でみると、女性は、「子どもがいる（妊娠した）から、子どものことを考えたから」が48.1%と最も高く、男性と比べて19.5ポイント高くなっている。次いで、女性は、「経済的な不安があったから」が38.8%であるが、男性は、ゼロである。男性は、「別れるほどの問題ではないと思ったから」が53.1%と最も高く、女性に比べて15.1ポイント高くなっている。



問18　問17で「12 子どもがいる（妊娠した）から、子どものことを考えたから」とお答えの方にお聞きします。
あなたが、子どものことで配偶者と別れなかった主な理由は何ですか。（○は３つまで）

前問で、「子どもがいる（妊娠した）から、子どものことを考えたから」と答えた76人に理由を聞いたところ、「子どもをひとり親にしたくなかったから」が56.6%、「養育しながら生活していく自信がなかったから」が43.4%、「子どもにこれ以上余計な不安や心配をさせたくないから」が38.2%となった。

男女別でみると、男性は、「子どもをひとり親にしたくなかったから」、「子どもにこれ以上余計な不安や心配をさせたくないから」の順に高くなっており、それぞれ女性に比べ18.2ポイント、23.2ポイント高くなっている。一方、女性は「養育しながら生活していく自信がなかったから」が最も高く、男性とは35.7ポイントの差がある。



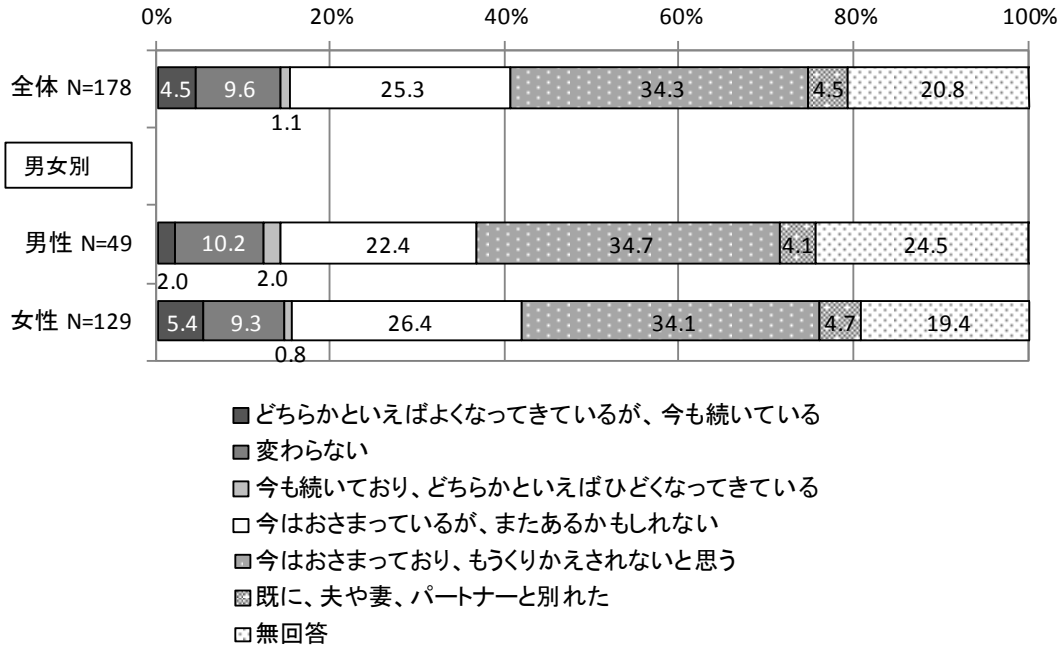
＜11＞この３年間における暴力行為の変化

問 19　問 16 で「２」又は「３」とお答えの方にお聞きします。
あなたに対する夫や妻、パートナーからの暴力行為は、この３年間ではどういう変化をしてきていますか。
あてはまる番号１つに○をつけてください。（１つに○）

問16で、「別れたいと思ったが、別れられなかった」、「別れたいとは思わなかった」と答えた178人に聞いたところ、「今はおさまっており、もうくりかえされないと思う」が34.3%と最も高い。

しかし、「変わらない」が9.6%、「どちらかといえばよくなってきているが、今も続いている」が4.5%、「今も続いており、どちらかといえばひどくなってきている」が1.1%となり、合わせて15.2%が今も継続して被害を受けているとしている。また、「今はおさまっているが、またあるかもしれない」と不安を感じている人も25.3%みられる。

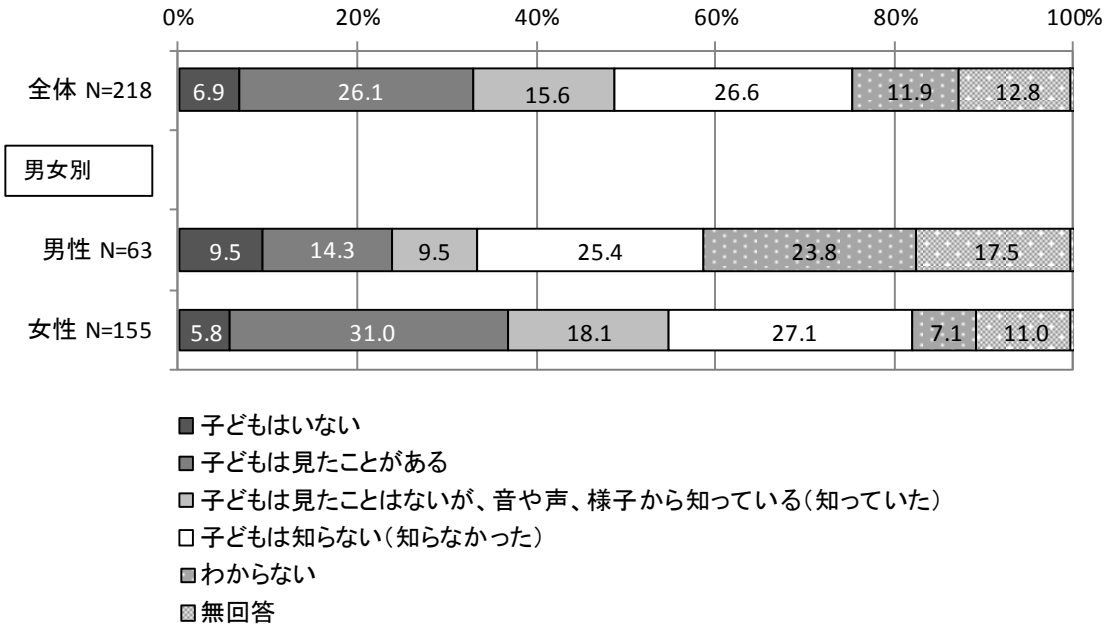
男女別でみると、（無回答を除いて）回答項目ごとの回答率の差は、4.0ポイント以内となっている。



<12>夫婦間の暴力行為等についての子どもの認知・子どもへの暴力・児童虐待の認知

問 20　あなたにはお子さんがいますか。いる場合、あなたのお子さんは、あなたが配偶者やパートナーから暴力行為を受けたのを見たことがありますか。または、知っていますか。
　あなたのお子さんが１８歳未満の場合は現在について、すでにお子さんが１８歳以上の場合は１８歳になるまでの頃について、お答えください。（１つに○）

暴力行為の被害経験のある218人に聞いたところ、「子どもは見たことがある」が26.1%、「子どもは見たことはないが、音や声、様子から知っている（知っていた）」が15.6%と、合わせて41.7%が認知しているとなっている。

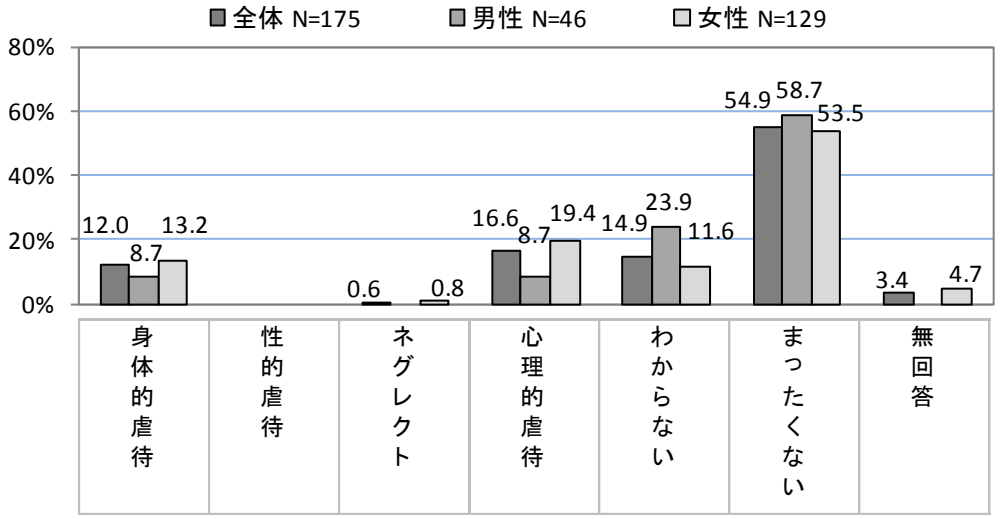


４． 子どもの被害経験、子どもの頃の家庭における被害経験

問 21　問 20 で「２」～「５」のいずれかをお答えの方にお聞きします。
あなたの子どもは 18 歳になるまでの間に、配偶者から次のようなことをされたことがありますか。
あてはまる番号すべてに〇をつけてください。（○はいくつでも）

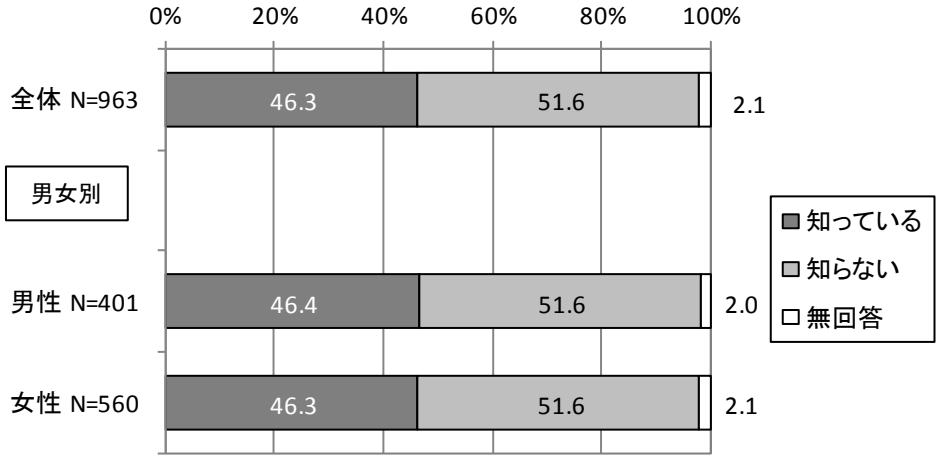
・身体的虐待
（例えば、なぐる、ける、叩く、投げ落とす、激しく揺さぶる、やけどを負わせる、溺れさせる、首を絞める、縄などにより一室に拘束する、長時間外に放置するなど）
・性的虐待
（例えば、子どもへの性的行為、性的行為を見せる、性器を触る又は触らせる、児童ポルノの被写体にするなど）
・ネグレクト
（例えば、家に閉じ込める、食事を与えない、ひどく不潔にする、自動車の中に放置する、重い病気になっても病院に連れて行かないなど）
・心理的虐待
（例えば、言葉による脅し、無視、兄弟姉妹間での差別的扱い、子どもの目の前で家族に対して暴力をふるう、兄弟姉妹に虐待行為を行うなど）
・わからない
・まったくない

前問で「子どもは見たことがある」、「子どもは見たことはないが、音や声、様子から知っている（知っていた）」、「子どもは知らない（知らなかった）」、「わからない」と回答した175人に聞いたところ、「心理的虐待」が16.6%、「身体的虐待」が12.0%、ネグレクトが0.6%となった。
一方、「まったくない」が54.9%、「わからない」が14.9%となっている。



問 22　全員にお聞きします。
子どもの前での暴力等（夫婦げんか等）が児童虐待にあたることを知っていますか。
あてはまる番号１つに○をつけてください。（１つに○）

「知らない」が 51.6%と、「知っている」の 46.3%を、5.3 ポイント上回っている。
男女別での差はほとんどない。



問 23　あなたが 18 歳になるまでの頃のことについて、お聞きします。

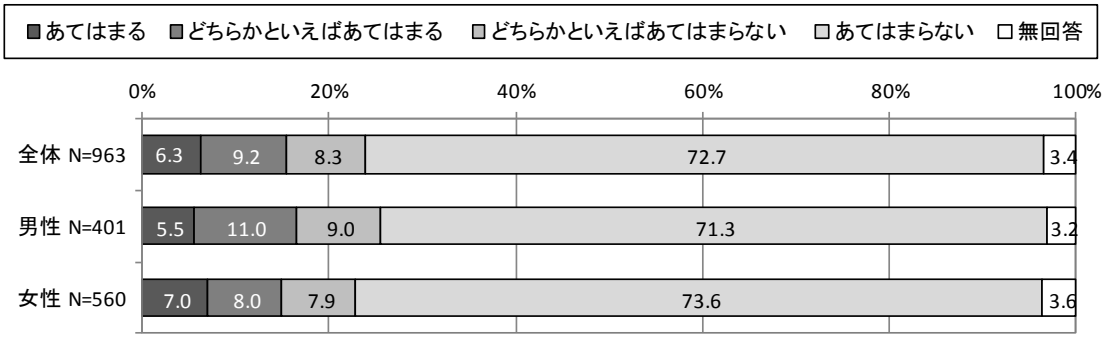
あなたが 18 歳になる以前に、あなたの親（養父母を含む）は、次のようなことをしたことがありますか。A から F のそれぞれについて、 あてはまる番号に○をつけてください。（○は A から F にそれぞれ１つずつ）

A　父（母）は母（父）に暴力をふるっていた
B　両親がお互いをののしりあったり、口げんかをしていた
C　親からなぐる、けるなどの身体に対する暴行をうけた
D　親から「お前なんか生まれなければよかった」などと言われたり、無視されたりした）
E　親は自分の意見や行動を尊重してくれなかった
F　家族だんらんが少なかった

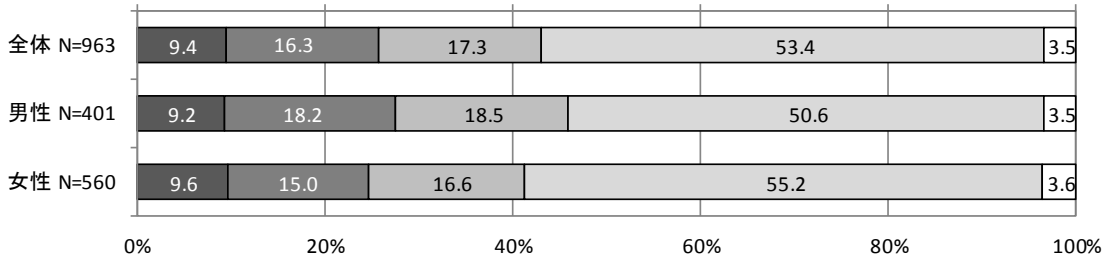
（18歳になるまでの家庭における A から F の被害経験について、『あてはまるとした割合』（「あてはまる」＋「どちらかといえばあてはまる」）をみてみる。）

「B　両親がお互いをののしりあったり、口げんかをしていた」が『あてはまるとした割合』が最も高く25.7%、次いで「F　家族だんらんが少なかった」が17.1%となっている。

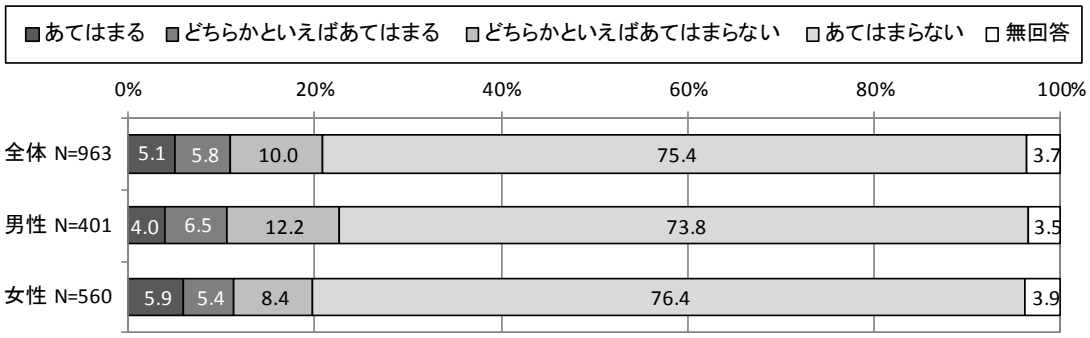
A　父（母）は母（父）に暴力をふるっていた　→『あてはまるとした割合』は15.5%



B　両親がお互いをののしりあったり、口げんかをしていた　→『あてはまるとした割合』は 25.7%



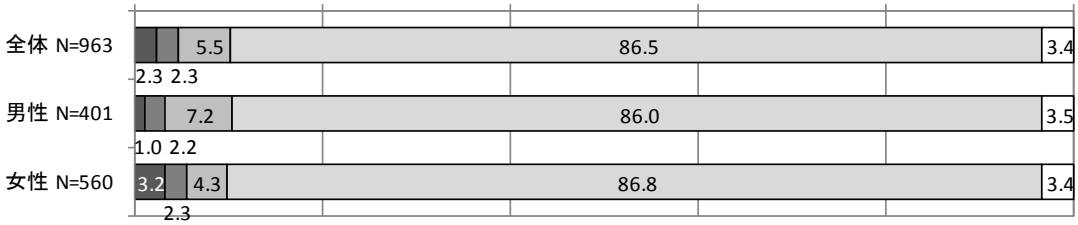
C　親からなぐる、けるなどの身体に対する暴行をうけた　→　『あてはまるとした割合』は10.9%



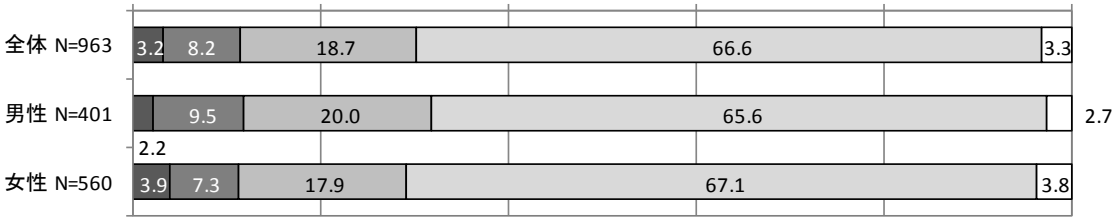
D　親から「お前なんか生まれなければよかった」などと言われたり、無視されたりした

→　『あてはまるとした割合』は4.6%

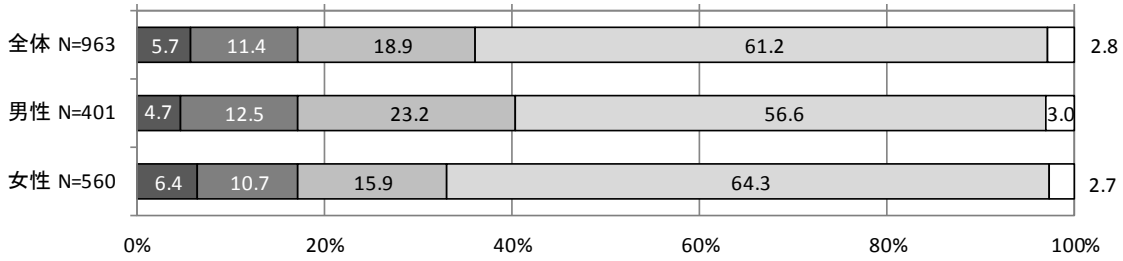
→　『あてはまるとした割合』は4.6%



E　親は自分の意見や行動を尊重してくれなかった　→　『あてはまるとした割合』は11.4%



F　家族だんらんが少なかった　→　『あてはまるとした割合』は17.1%



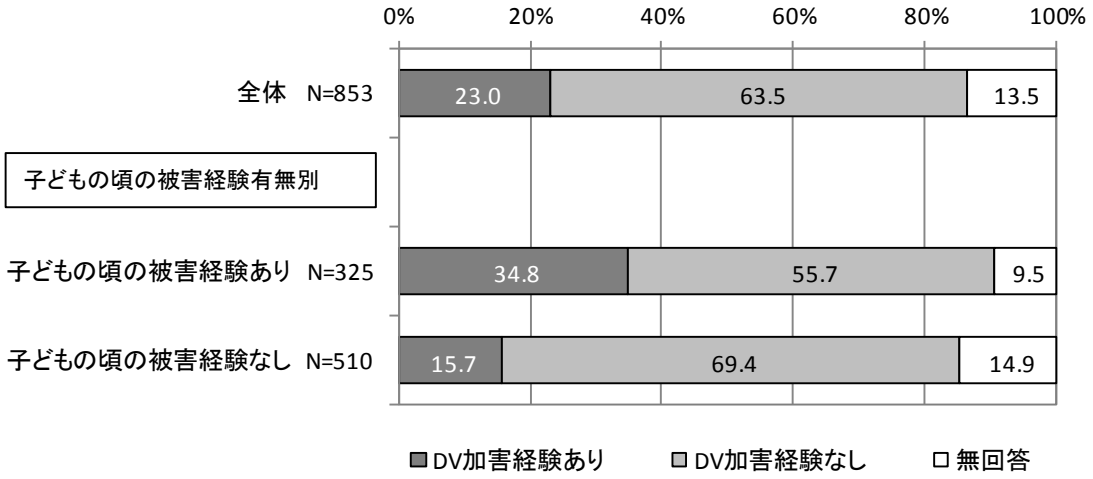
18歳までの家庭における被害経験が、のちに夫婦・パートナー間の暴力行為の加害経験や被害経験に関係しているかをみてみる。

ここでは、18歳までの家庭におけるＡからＦの被害経験について、１つでも「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」とした人を『子どもの頃の被害経験あり』とした。また、ＡからＦの被害経験について、すべてが「あてはまらない」または「どちらかといえばあてはまらない」とした人を『子どもの頃の被害経験なし』とした。

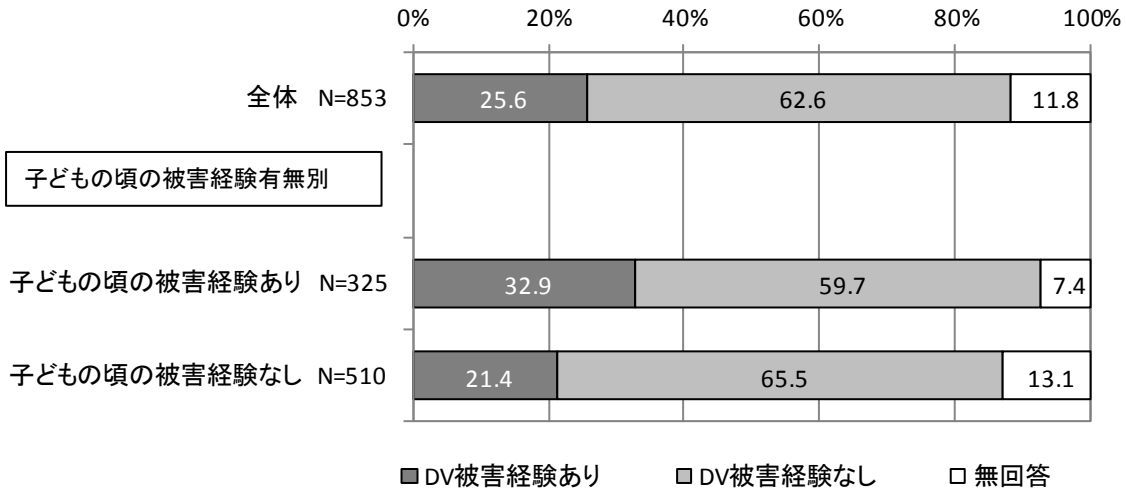
配偶者やパートナーがいる（いた）853人のうち、自分が『子どもの頃の被害経験あり』とした人の34.8%が夫婦やパートナー間の暴力行為の加害経験（ＤＶ加害経験）があると答えており、『子どもの頃の被害経験なし』とした人のＤＶ加害経験の割合（15.7%）を19.1ポイント上回っている。

また、自分が『子どもの頃の被害経験あり』とした人の32.9%が夫婦やパートナー間の暴力行為の被害経験（ＤＶ被害経験）があると答えており、『子どもの頃の被害経験なし』とした人のＤＶ被害経験の割合（21.4%）を11.5ポイント上回っている。

＜子どもの頃の被害経験有無別の夫婦・パートナー間のＤＶ加害経験（問９①）の状況＞



＜子どもの頃の被害経験有無別の夫婦・パートナー間のＤＶ被害経験（問９②）の状況＞



５．10 歳代から 20 歳代における交際相手との間の暴力の経験

<1>交際相手からの暴力（デートＤＶ）の認知状況

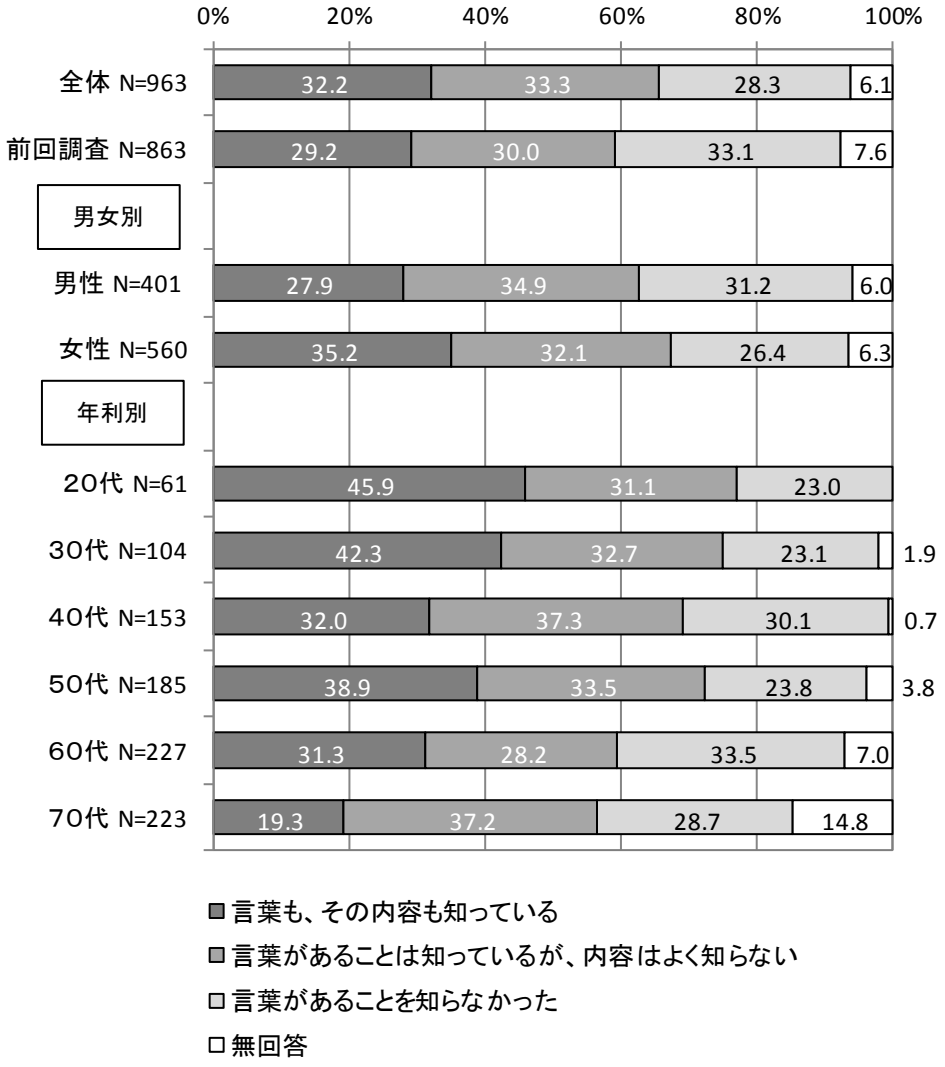
問 24　あなたは「交際相手からの暴力」（いわゆる「デートＤＶ」）について知っていますか。
あてはまる番号１つに○をつけてください。（１つに○）

「言葉も、その内容も知っている」が32.2%、「言葉があることは知っているが、内容はよく知らない」が33.3%となり、合わせて65.5%は言葉については知っているとしている。一方、「言葉があることを知らなかった」が28.3%となっている。

前回調査と比較すると、「言葉も、その内容も知っている」が3.0ポイント、「言葉があることは知っているが、内容はよく知らない」が3.3ポイント、それぞれ前回より高くなっている。

男女別では女性の方が知っているとした割合が高くなっている。

年齢別では「20代」「30代」「50代」が知っているとした割合が７割を超えている。



＜２＞交際相手の有無

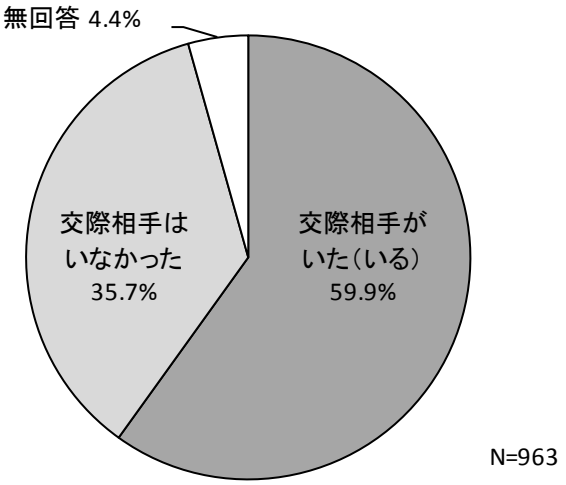
問 25　あなたの 10 歳代から 20 歳代の経験についてお聞きします。結婚している方、結婚したことのある方については、結婚前についてお答えください。

あなたには、その当時、交際相手がいましたか。あてはまる番号１つに○をつけてください。結婚している方、結婚したことのある方については、後に配偶者となった相手以外についてお答えください。

（１つに○）

（問26以降の交際相手への加害経験・交際相手からの被害経験等について聞く前に、前提条件となる交際相手の有無について聞いたもの。）

結婚前の10歳代から20歳代に、「交際相手がいた（いる）」が59.9％、「交際相手はいなかった」が35.7%となっている。



＜３＞交際相手への加害経験・交際相手からの被害経験

問 26　問 25 で「１　交際相手がいた（いる）」とお答えの方にお聞きします。

あなたは、10 歳代、20 歳代のときに、交際相手に次のようなことを行ったことがありますか。

また、交際相手から次のようなことをされたことがありますか。ＡからＤのそれぞれについて、あてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はＡからＤの①・②のそれぞれに１つ以上、いくつでも）

Ａ　身体的暴行

（例えば、なぐったり、けったり、物を投げつけたり、突き飛ばしたりするなどの身体に対する暴行）

Ｂ　心理的攻撃

（例えば、人格を否定するような暴言、交友関係や行き先、電話・メールなどを細かく監視したり、長時間無視したりするなどの精神的な嫌がらせ、あるいは、相手もしくは相手の家族が危害を加えられるのではないかと恐怖を感じるような脅迫）

Ｃ　経済的圧迫

（例えば、相手の給料や貯金を勝手に使う、デート代や生活費を相手に無理やり払わせるなど）

Ｄ　性的強要

（例えば、嫌がっているのに性的な行為を強要したり、ポルノ映像等を見せたり、避妊に協力しないなど）

（１）交際相手への加害経験（問 26－①）

結婚前の10歳代から20歳代に「交際相手がいた（いる）」577人に加害経験を聞いたところ、

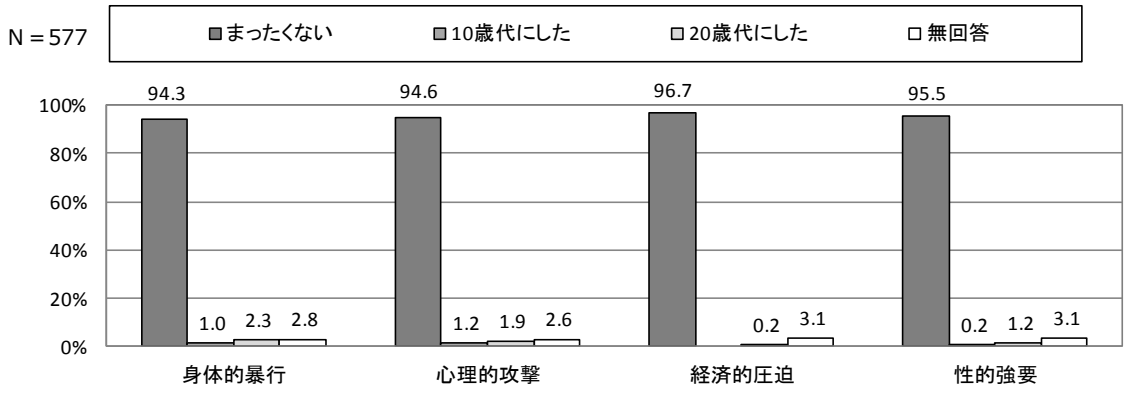
Ａ　身体的暴力は「10歳代にした」が1.0%、「20歳代にした」が2.3%、

Ｂ　心理的攻撃は「10歳代にした」が1.2%、「20歳代にした」が1.9%、

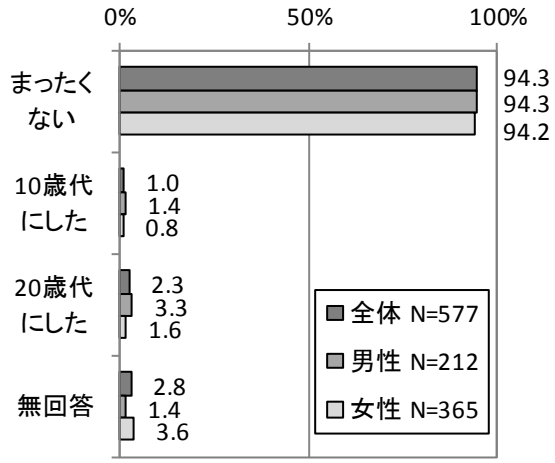
Ｃ　経済的圧迫は「10歳代にした」が0%、「20歳代にした」が0.2%、

Ｄ　性的強要は「10歳代にした」が0.2%、「20歳代にした」が1.2%となった。

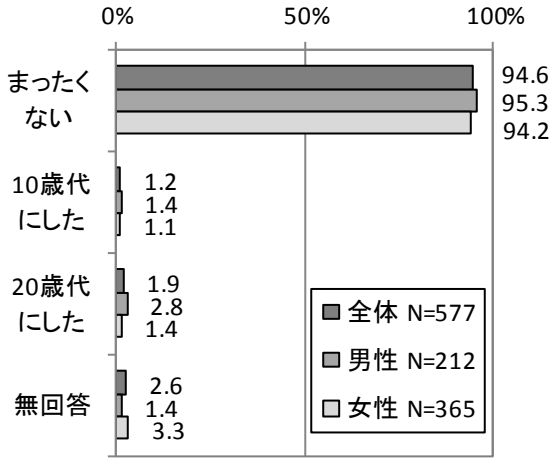
男女別でみると、経済的圧迫を除いて、いずれの行為も男性の加害経験の割合が女性を若干上回っているが、差は小さい。



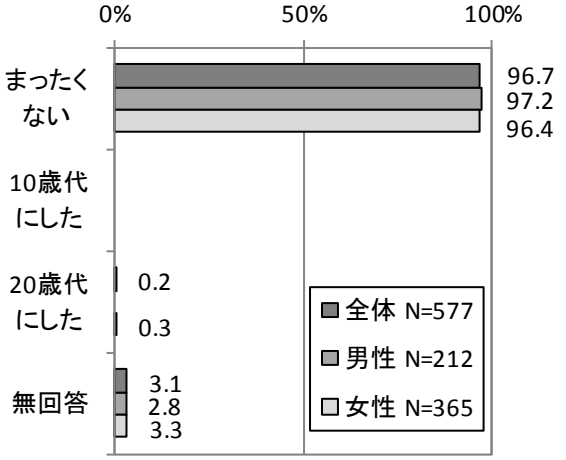
＜A　身体的暴力＞



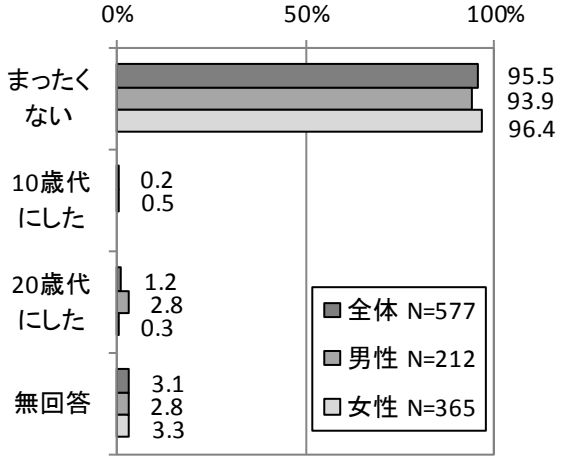
＜B　心理的攻撃＞



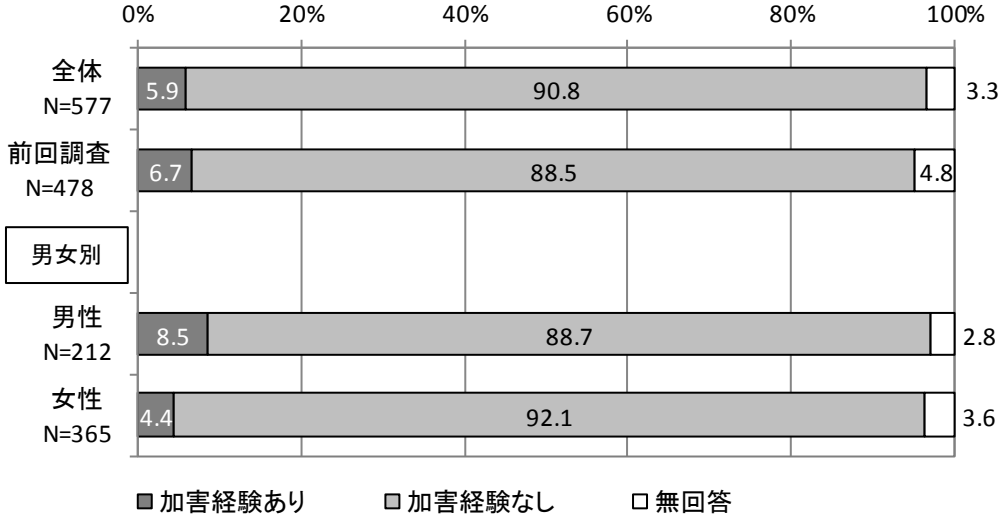
＜C　経済的圧迫＞



＜D　性的強要＞



（あなたが交際相手に行ったこと）のＡからＤのうち、１つでも「２　10歳代にした」又は「３　20歳代にした」と答えた人を『デートＤＶ加害経験あり』としたところ、その割合は5.9%となり、前回調査に比べると0.8ポイント減少した。



(2)交際相手からの被害経験（問 26－②）

結婚前の10歳代から20歳代に「交際相手がいた（いる）」577人に被害経験を聞いたところ、

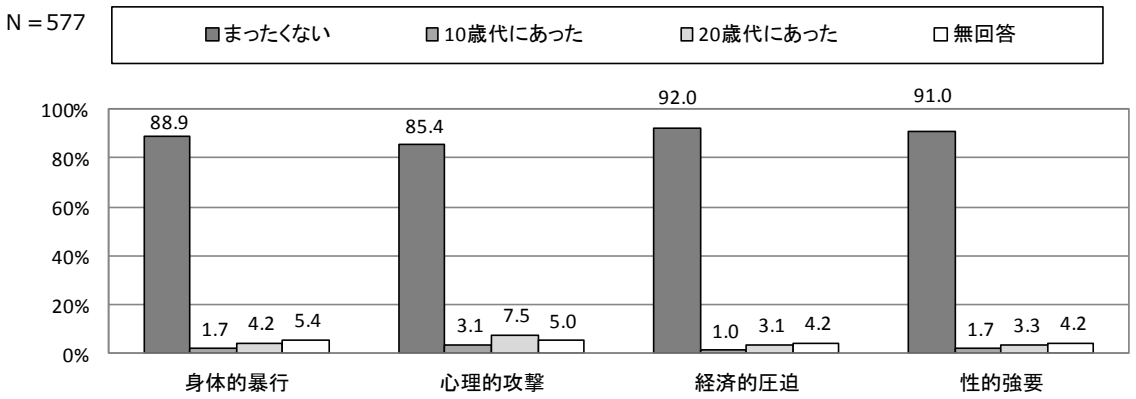
A　身体的暴力は「10歳代にあった」が1.7%、「20歳代にあった」が4.2%、

B　心理的攻撃は「10歳代にあった」が3.1%、「20歳代にあった」が7.5%、

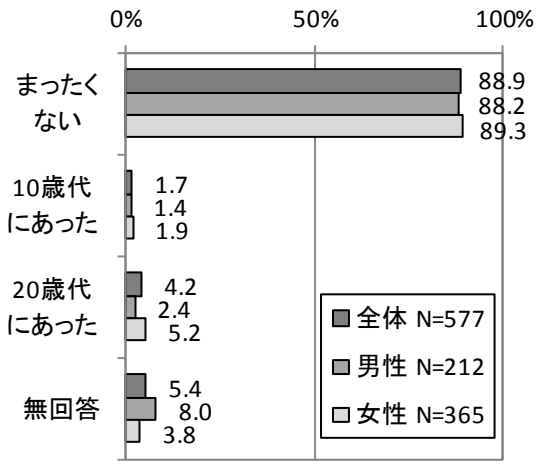
C　経済的圧迫は「10歳代にあった」が1.0%、「20歳代にあった」が3.1%、

D　性的強要は「10歳代にあった」が1.7%、「20歳代にあった」が3.3%となっている。

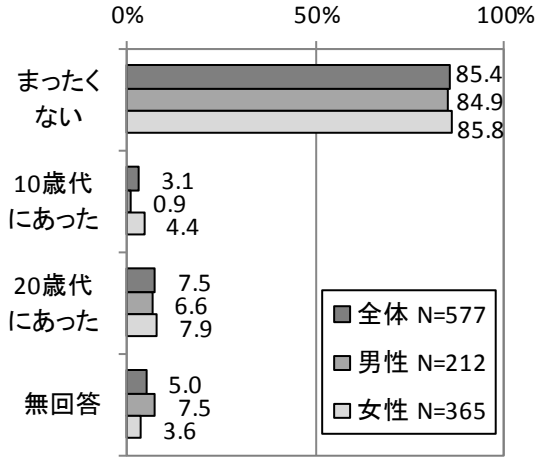
男女別でみると、いずれの行為も女性の被害経験の割合が男性を上回っている。



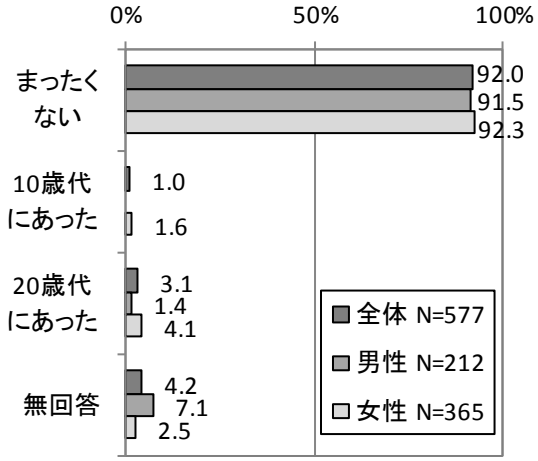
＜A　身体的暴力＞



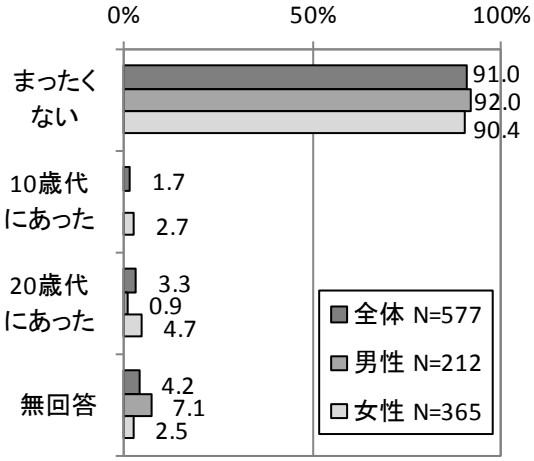
＜B　心理的攻撃＞



＜C　経済的圧迫＞



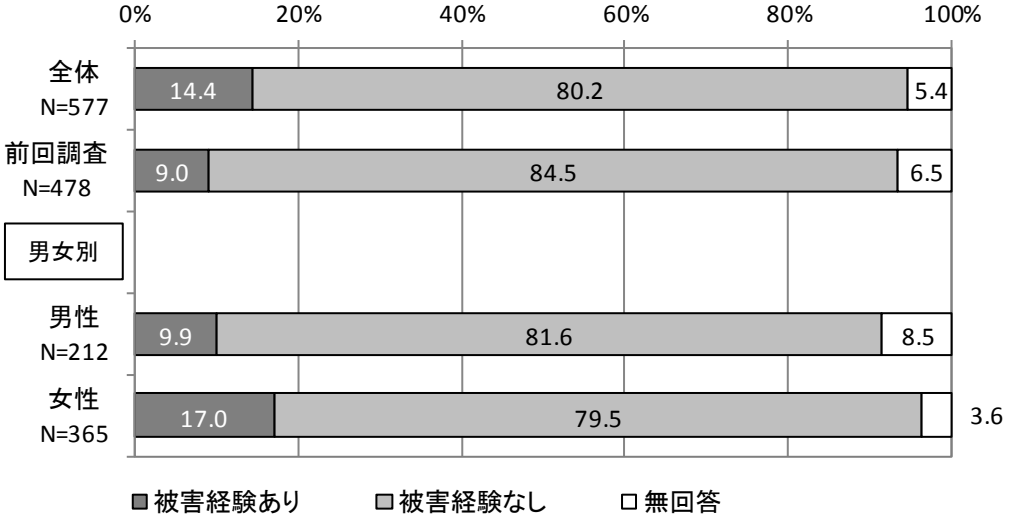
＜D　性的強要＞



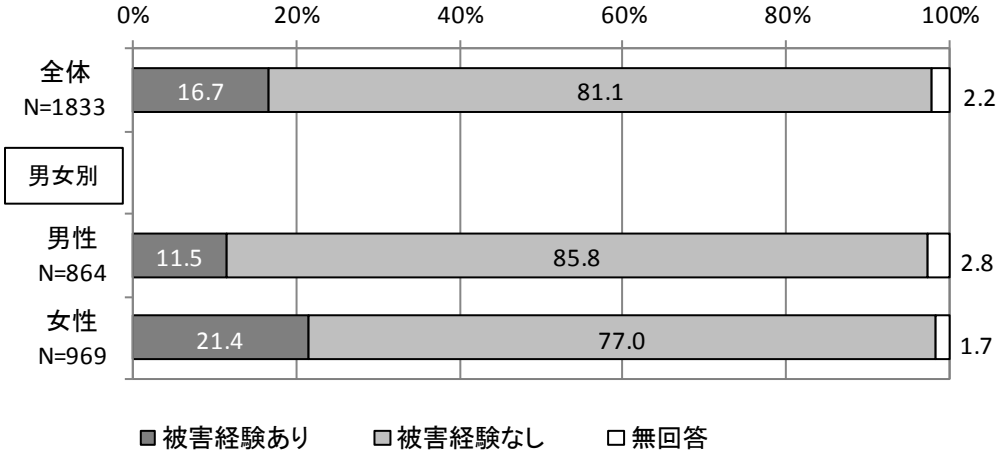
（あなたが交際相手からされたこと）のＡからＤのうち、１つでも「２　10歳代にあった」又は「３　20歳代にあった」と答えた人を『デートＤＶ被害経験あり』としたところ、その割合は14.4%となり、前回調査に比べると5.4ポイント高くなった。

内閣府が実施した全国調査と比較すると、被害経験のある人の割合は、全体で2.3ポイント、男性で1.6ポイント、女性で4.4ポイント、それぞれ下回っている。

（注．内閣府調査は、交際相手からの被害状況を「10歳代にあった」、「20歳代にあった」、「30歳代以上にあった」を取りまとめたもので、本県の被害調査対象年代と異なっている。）



＜参考　内閣府調査（H29 年度）＞



(3)交際相手への加害経験（問 26－①）と配偶者・パートナーへの加害経験（問９－①）

10歳代、20歳代に交際相手がいて、婚姻歴のある537人について、交際相手への加害経験の有無別に、配偶者やパートナーへの加害経験の割合についてみると、交際相手への加害経験がある人の配偶者等へのＤＶ加害経験の割合は77.8%で、交際相手への加害経験がない人も22.4%がＤＶ加害経験がある。

（単位：人数(上段)、％（下段））

全体 N=537		配偶者やパートナーへ加害経験　（問９－①）			
		総数	加害経験あり	加害経験なし	無回答
交際相手への加害経験別（問26－②）	総数	537 100.0	136 25.3	341 63.5	60 11.2
	加害経験あり	27 100.0	21 77.8	4 14.8	2 7.4
	加害経験なし	491 100.0	110 22.4	333 67.8	48 9.8
	無回答	19 100.0	5 26.3	4 21.1	10 52.6

＜４＞暴力被害を受けたときの行動

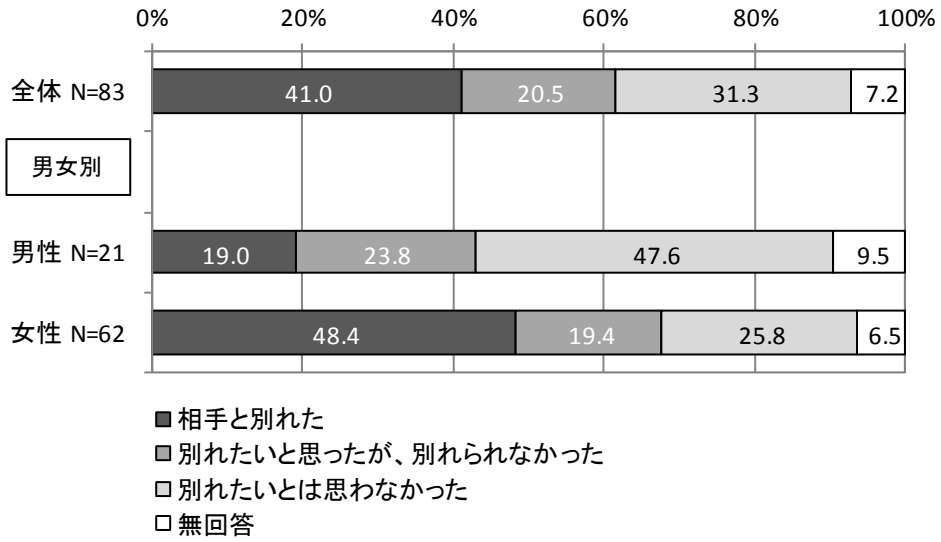
問 27　問 26－②（あなたが交際相手からされたこと）のＡからＤで、１つでも「２　10 歳代にあった」「３　20 歳代にあった」のいずれかにお答えの方にお聞きします。

あなたは、交際相手から暴力行為を受けたとき、どうしましたか。あてはまる番号１つに○をつけてください。

複数の交際相手から暴力を受けた方は、より深く傷ついた経験の１つについてお答えください。（１つに○）

デートＤＶの被害経験のある83人については、「相手と別れた」が41.0%、「別れたいと思ったが、別れられなかった」が20.5%、「別れたいとは思わなかった」が31.3%となっている。

男女別でみると、男性は「別れたいとは思わなかった」が47.6%と、女性に比べて21.8ポイント高く、女性は「相手と別れた」が48.4%と、男性に比べて29.4ポイント高くなっている。

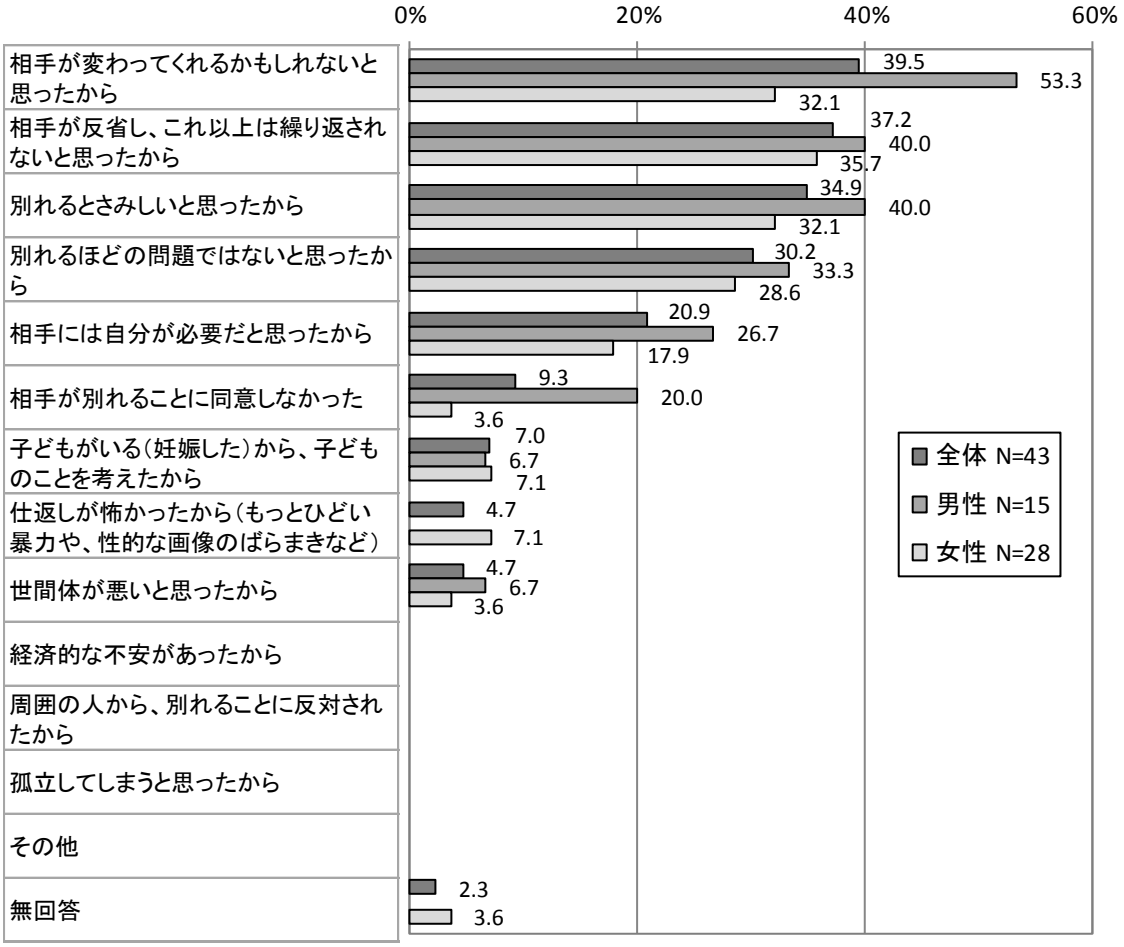


＜５＞別れなかった理由

問 28　問 27 で「２　別れたいと思ったが、別れられなかった」又は「３別れたいとは思わなかった　」とお答えの方にお聞きします。
別れなかった理由は何ですか。
次の１から 13 のうちあてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

前問で「別れたいと思ったが、別れられなかった」「別れたいとは思わなかった」とした43人に理由を聞いたところ、「相手が変わってくれるかもしれないと思ったから」が39.5%と最も高く、次いで「相手が反省し、これ以上は繰り返されないと思ったから」が37.2%、「別れるとさみしいと思ったから」が34.9%、「別れるほどの問題ではないと思ったから」が30.2%、「相手には自分が必要だと思ったから」が20.9%となっている。

男女別でみると、男性は「相手が変わってくれるかもしれないと思ったから」が53.3%と、女性に比べて21.2ポイント高くなっている。

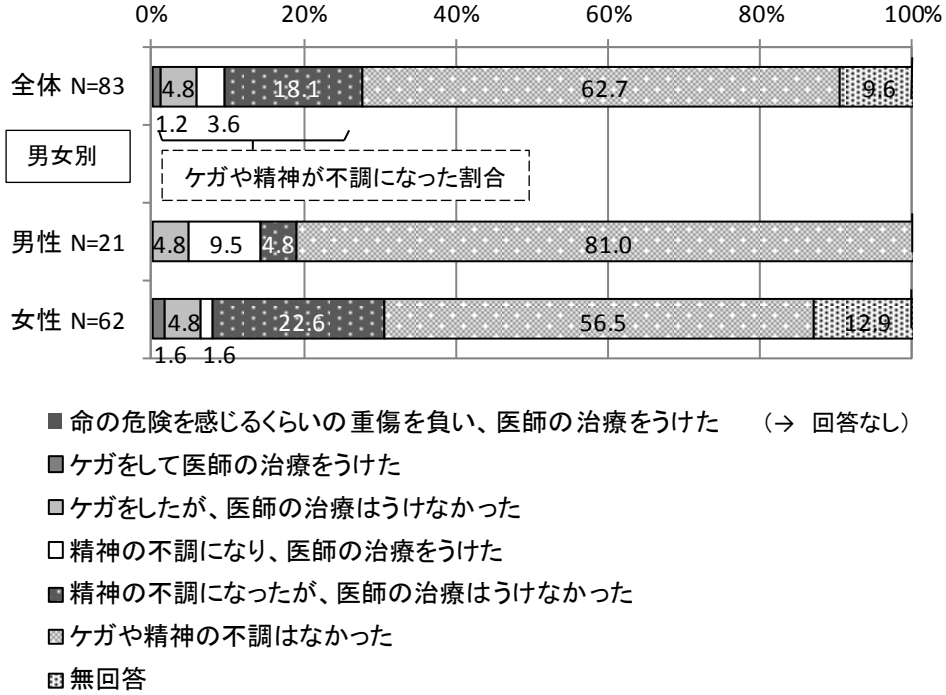


＜６＞暴力行為による受診の状況

問 29　あなたは、交際相手からの暴力行為によって、医師の治療をうけたことがありますか。 あてはまる番号１つに○をつけてください。（１つに○）

デートＤＶの被害経験のある83人の受診の状況をみると、「ケガをして医師の治療をうけた」が1.2%、「ケガをしたが、医師の治療はうけなかった」が4.8%、「精神の不調になり、医師の治療をうけた」が3.6%、「精神の不調になったが、医師の治療はうけなかった」が18.1%となり、合わせてケガや精神が不調になった人は27.7%となっている。

男女別でみると、女性はケガや精神が不調になった人の割合は30.6%と、男性に比べて11.5ポイント高くなっている。

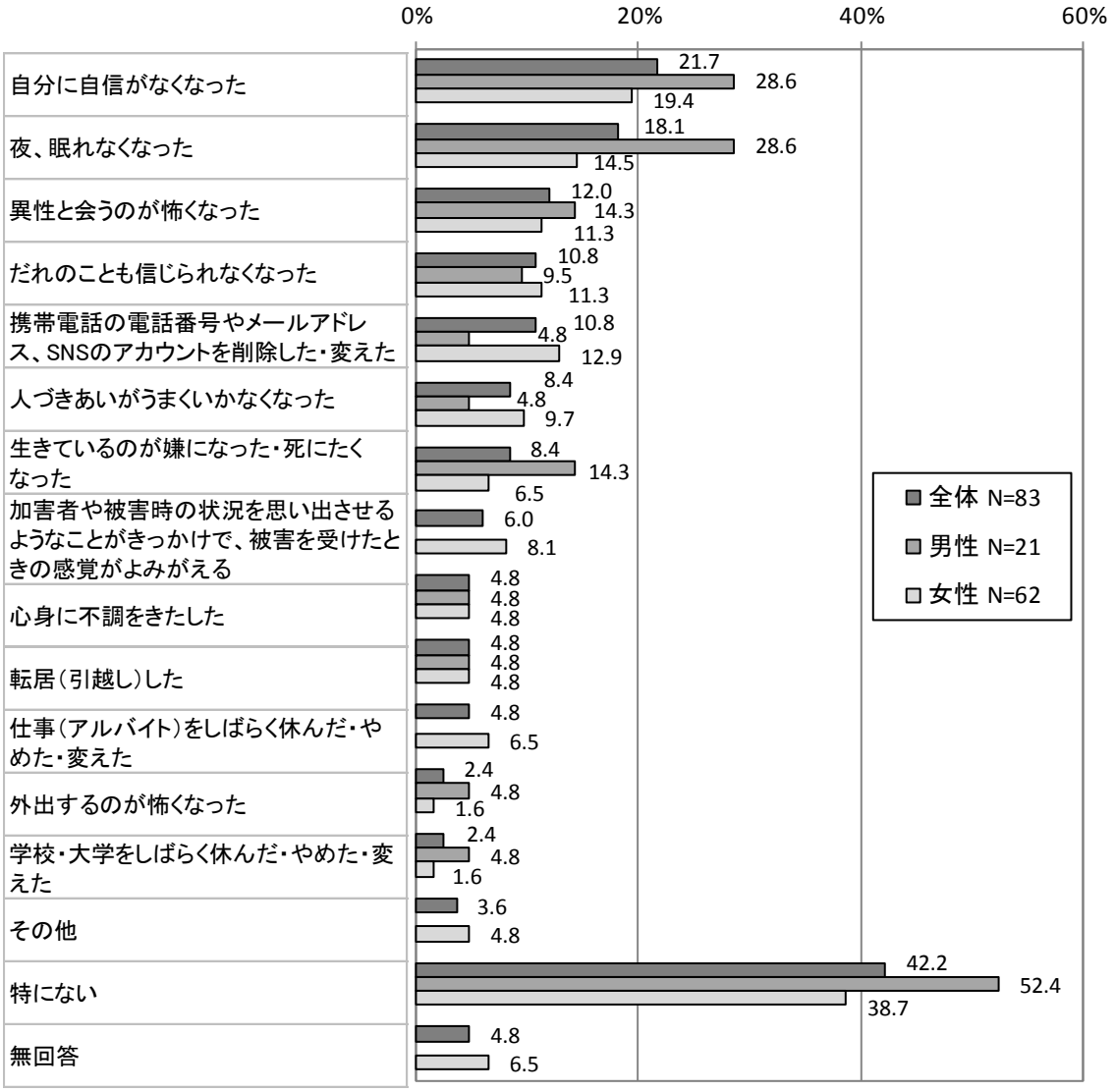


＜７＞暴力行為による生活上の変化

問 30　あなたは、交際相手から受けた暴力行為によって、生活上の変化がありましたか。 あてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

デートＤＶの被害経験のある83人の生活上の変化をみると、「自分に自信がなくなった」が21.7%、「夜、眠れなくなった」が18.1%、「異性と会うのが怖くなった」が12.0%、「だれのことも信じられなくなった」と「携帯電話の電話番号やメールアドレス、SNS のアカウントを削除した・変えた」がともに10.8%と続いている。一方、「特にない」とする人は42.2%となっている。

男女別でみると、男性は 「自分に自信がなくなった」、「夜、眠れなくなった」がともに28.6%と、女性に比べてそれぞれ9.2ポイント、14.1ポイント高くなっている。



6．男女間における暴力を防止するための対策と被害者への支援

問 31　全員にお聞きします。

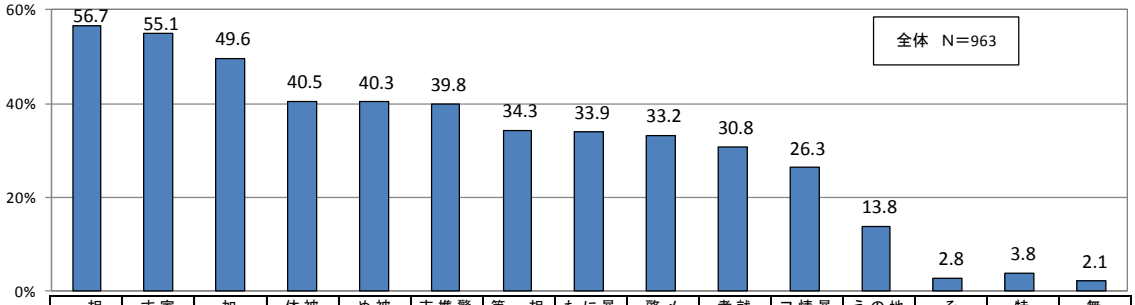
男女間における暴力を防止し、また、被害者を支援するために、どのようなことが必要だと考えますか。

あてはまる番号すべてに○をつけてください。（○はいくつでも）

「相談しやすい環境を整備する（同性の相談員の配置など）」が56.7%と最も高く、次いで、「家庭や学校等で、暴力を防止するための教育を行う」が55.1%、「加害者への罰則を強化する」が49.6%、「被害者の体や心のケアを行う体制を整備する」が40.5%、「被害者が一時的に避難するための施設を整備する」が40.3%、「警察・役所・民間団体等と連携し、自立まで切れ目のない支援体制を整備する」が39.8%の順になっている。

男女別でみると、女性は「被害者の体や心のケアを行う体制を整備する」で男性に比べ9.6ポイント高く、すべての項目で男女差は10ポイント未満となっている。

年齢別でみると、「20代」「30代」の若い世代で「加害者への罰則を強化する」が高く、６割を超えている。



		相談しやすい環境を整備する（同性の相談員の配置など）	家庭や学校等で、暴力を防止するための教育を行う	加害者への罰則を強化する	被害者の体や心のケアを行う体制を整備する	被害者が一時的に避難するための施設を整備する	警察・役所・民間団体等と連携し、自立まで切れ目のない支援体制を整備する	相談窓口の機能を充実させる（メール相談の受付、弁護士等の専門相談の受付など）	暴力をふるったことのある者に対し、二度と繰り返さないための教育を行う	メディアを活用して、広報・啓発活動を積極的に行う	就業や住宅の確保など、被害者の生活基盤確立を支援する	暴力を助長するおそれのある情報（雑誌、コンピュータソフトなど）を取り締まる	地域で、暴力を防止するための研修会・イベントなどを行う	その他	特にない	無回答
男女別	男性 N=401	53.9	56.4	49.4	34.9	39.7	42.9	33.9	34.7	36.7	31.2	24.4	18.0	2.7	5.2	2.2
	女性 N=560	58.8	54.1	49.8	44.5	40.5	37.3	34.6	33.4	30.5	30.5	27.5	10.9	2.9	2.9	2.0
年齢別	20代 N=61	65.6	55.7	65.6	54.1	49.2	49.2	49.2	37.7	41.0	31.1	18.0	11.5	4.9	3.3	-
	30代 N=104	51.9	54.8	65.4	45.2	43.3	33.7	37.5	38.5	29.8	32.7	19.2	17.3	1.0	3.8	-
	40代 N=153	52.3	52.3	51.0	44.4	42.5	41.8	34.6	34.6	30.7	25.5	22.2	9.8	2.6	2.0	0.7
	50代 N=185	58.9	52.4	49.7	42.7	43.2	41.1	32.4	30.8	38.4	33.0	22.7	12.4	3.8	2.2	2.2
	60代 N=227	59.9	56.4	46.7	41.4	37.4	40.1	35.7	33.5	33.5	33.0	25.6	16.3	4.0	4.4	1.8
	70代 N=223	54.7	58.3	40.8	30.5	35.0	37.7	29.1	34.5	30.0	29.1	38.6	14.8	1.3	5.8	4.5

= 最も高い項目

７．自由意見

問 32　夫婦や恋人同士など男女間での暴力防止について、ご意見・ご要望がありましたら、ご自由にお書きください。

夫婦や恋人同士など男女間での暴力防止について118件の意見をいただいた。それらの意見の傾向をみるため、意見に含まれる内容を項目に分けて集計した。なお、集計は、一人の意見の中に複数の項目が含まれる「複数回答」によるものであり、合計は100%を超える。

項　目		件数	%	男性	女性
Ⅰ　ＤＶ防止、被害者支援等について		59	50.0	17	42
1	ＤＶ防止について	10	8.5	6	4
2	被害者支援について	20	16.9	5	15
3	広報・啓発について	14	11.9	2	12
4	教育について	15	12.7	4	11
Ⅱ　ＤＶや社会に関する意識や環境等について		56	47.5	27	29
1	ＤＶや暴力について	17	14.4	8	9
2	夫婦等の関係について（コミュニケーションなど）	16	13.6	10	6
3	家庭環境について	7	5.9	1	6
4	社会や社会意識について	9	7.6	3	6
5	その他の暴力（職場内暴力、児童虐待）について	7	5.9	5	2
Ⅲ　その他　アンケートについて		9	7.6	6	3
	合計	124		50	74

【各項目の主な意見（例示）】

Ⅰ-1　ＤＶ防止について

・取り締まりの強化と、加害者への罰則を厳罰化するべきだと思う。（30 代・男性）

・相談窓口や DV センター等の部署の権限を強化し、加害者に対し強制的に施設等へ留置できるようにする。（60 代・男性）

・暴力を行う側にも何かしらの心の問題があると思うので、被害者支援はもちろん、加害者側の精神的な面のアプローチ（自分がなぜ暴力をふるうようになったのかを気付かせるカウンセリング等）のサポートも必要と感じました。（40 代・女性）

Ⅰ-2　被害者支援について

・被害者にとって暴力が慢性的になると、思考能力が低下する。初期の段階に気軽に相談できる窓口を充実されることが必要。できれば行政の施設でなく、民間施設を活用すると利用しやすいのではないか。（60 代・男性）

・一時的でよいから、逃げる場所がほしい。（40 代・女性）

・相談したらもっと暴力がひどくなるという例がたくさんあり、相談することをためらう方も多いかと思います。即行で対処できるようにしたら良いのではと思います。（50 代・女性）

・子供の為に DV の相手と結婚を維持する必要はなく、シングルになった時の生活、子育ての支援を行うことが出来るシステムがあれば良いのにと思います。（60 代・女性）
・切れ目のない支援体制を整備し強化していただく方法しかないと思います。（60 代・男性）

Ⅰ-3 広報・啓発について
・被害にあった方がきちんと、声に出して訴えることのできる窓口が整備される。我慢する必要がないことを周知するキャンペーンが必要に思います。苦しんでいる人が居たら「私も嫌なことは嫌だと言って良いんだ」と気づいてもらえるきっかけになってほしい。（40 代・女性）
・加害者が DV をしているという認識を広められるよう啓蒙してほしい。（50 代・女性）
・牛乳パックやコンビニのコーヒーカップ等、子供や若い人の目に付き易いものに DV 防止の標語・相談先などをプリントする。（50 代・女性）
・肉親であろうと、他人であろうと、暴力は犯罪で刑事罰だということを周知徹底するようメディア等を活用し、啓発していく。（60 代・男性）

Ⅰ-4 教育について
・義務教育の間に「男女間の暴力」について教育を十分に行い、加害者・被害者が「男女間の暴力」について知っている必要がある。その上で罰則強化や各窓口を整備するのでなければ、効果はないでしょう。この種の報道を見ると加害者にも被害者にもＤＶに関する知識が欠けていると感じられます。（60 代・男性）
・恋人間のＤＶが世間から見えづらいと思うので、学校等での教育を強化してほしいです。（30 代・女性）
・人間形成の一環として、小さい頃よりお互いを人として尊重する気持ちを身につける、家庭での子育て又、幼児教育が大切だと思います。学校での暴力防止への講演等。（70 代・女性）

Ⅱ-1 ＤＶや暴力について
・本人がそれを暴力だと思ってやっていないということがあってもおかしくない程まだ知られていないと思うのもあるので、まずは暴力についてを世の中の人達に知ってもらうことが第一なのかなという印象です。価値観は人それぞれという点も難しい所だなと思います。（20 代・女性）
・自分で DV を受けている自覚がない場合が多いと思います。（40 代・女性）
・どこまでが暴力なのか線引きが難しい。過剰（DV,パワハラ）になり過ぎて、コミュニケーションの低下につながり、人のいたわりがわからなくなると思う。（50 代・男性）
・暴力は絶対駄目、相手と話し合う。親から教えられたこと「わが身つねって人の痛さを知れ」。（70 代・男性）

Ⅱ-2 夫婦等の関係について（コミュニケーションなど）
・妻も子供も、ひとりひとりがかけないのない才能を持ったひとりの人間。人権を守ることが大切。（50 代・女性）
・お互い思いやりをもって相手の立場になって考えることが大事だと思います。（60 代・女性）
・何事も話し合いが出来るようにすることと、環境づくりが必要。（60 代・男性）

Ⅱ-3　家庭環境について

・小さいころの家庭環境の影響が非常に大きいと考えています。自己肯定感の低さや、コミュニケーションをうまく取れないなど、そういった根本的なところの解決も必要な人が多いのではないかと思います。あとは人の心を思いやる事そのものが欠如してしまっている人が暴力をふるってしまうと思います。そういう大人を再教育するのはかなり大変だと思います。（30 代・女性）

・核家族化が進み、気付きにくい環境にはあると思う。苦痛を与えられる本人自身、それを見ている子供たちについて、もっと早い段階でＳＯＳを出せる世を望みます。（40 代・女性）

・生活苦等の生活環境の影響はとても大きいと思われるので、様々な部分での取り組みが必要。（40 代・男性）

Ⅱ-4　社会や社会意識について

・女より男がえらい又は力がある（肉体的にも経済的にも上だ）という、日本の古い考えが変わらないと、いつまでも暴力はなくならないと思います。ですが、場合によっては女性側に問題があることもあるので、男性だけでなく女性も DV について考えたらよいと思います。（40 代・女性）

・暴力行為は、その人が生まれ育った環境からくるものだと思います。なので、大人になってから直せるものじゃないような気がします。小さいころから、おだやかに大切に育てば、だれに対しても思いやりの心を持ち、精神的にも安定して「きれる」ということはないと思います。暴力行為を受けてからの支援も大切だと思いますが、根本から暴力をなくせるように、日本がもっと良い国になり、だれもが安定した生活が送れるようにするべきだと思います。（50 代・女性）

Ⅱ-5　その他の暴力（職場内暴力、児童虐待）について

・夫婦や恋人間ではないですが、職場での上司・部下の関係（男女）で、かなり当てはまりました。アンケートに答えている最中、当時のことを思い出して辛くなりました。このようなアンケートをすることで男女間の暴力を防止し、被害者を支援できるようなることを望みます。相談できるところが少なく、女性は立場が低いと潜在的に考えてしまう教育もあると思います。これからの時代は、そのようなことがないようになったら良いと切望します。（30 代・女性）

・最近ニュース等で子どもに関する痛ましい事件が起こっております。このようなことが少しでも減っていれればと願っております。（50 代・男性）

・成人男女間の DV より、子どもに対する DV の防止が優先すると思う。（60 代・男性）

Ⅲ　その他　アンケートについて

・改めて暴力行為内容に目を向ける機会となりました。（60 代・女性）